

最近

25
970

岩内





小樽本金庫所屬岩内支金庫
北海道岩内支金庫代理店
日本銀行小樽支店岩内派出所

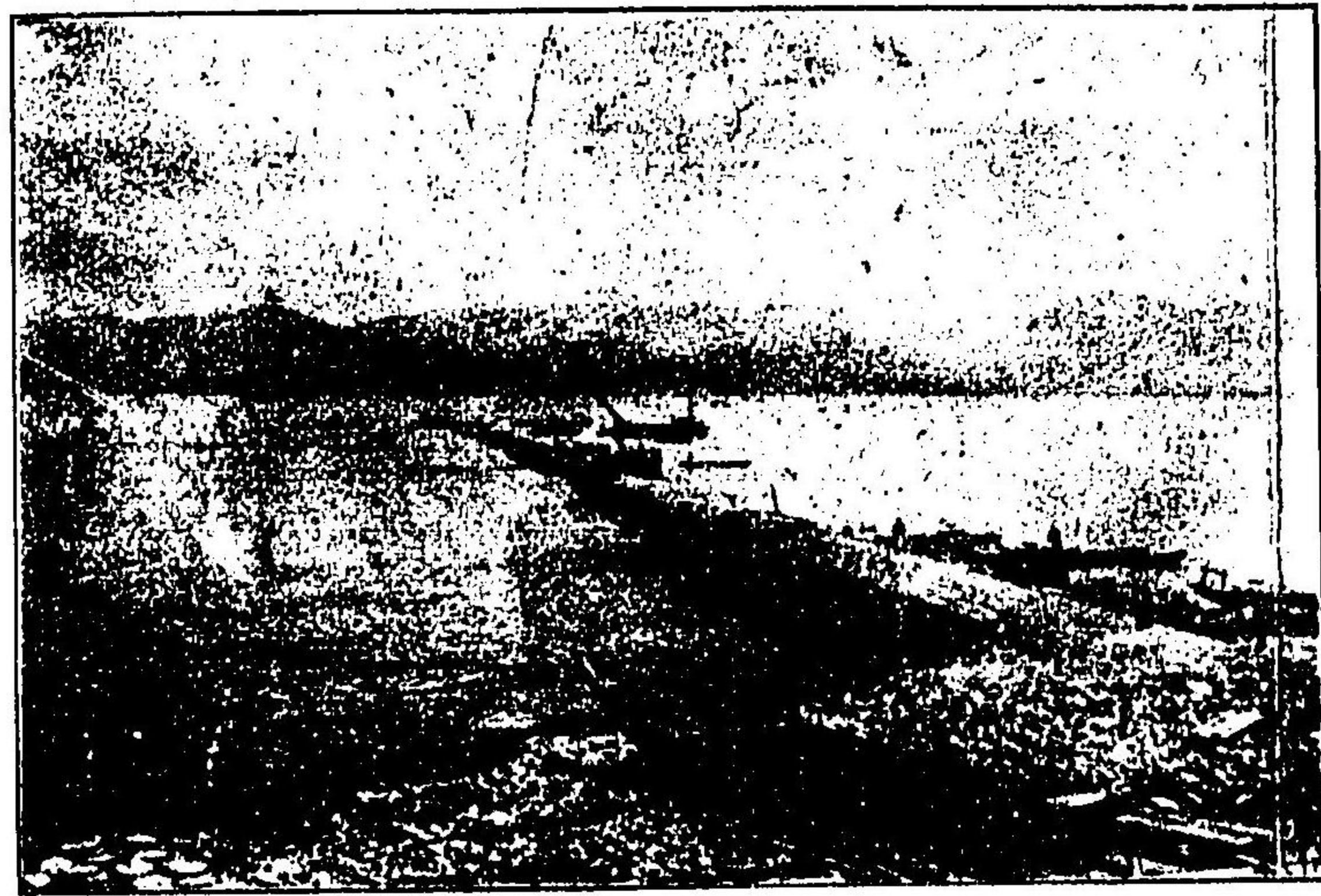
★銀 株式
會社 北海道銀行内支店

電話十五番

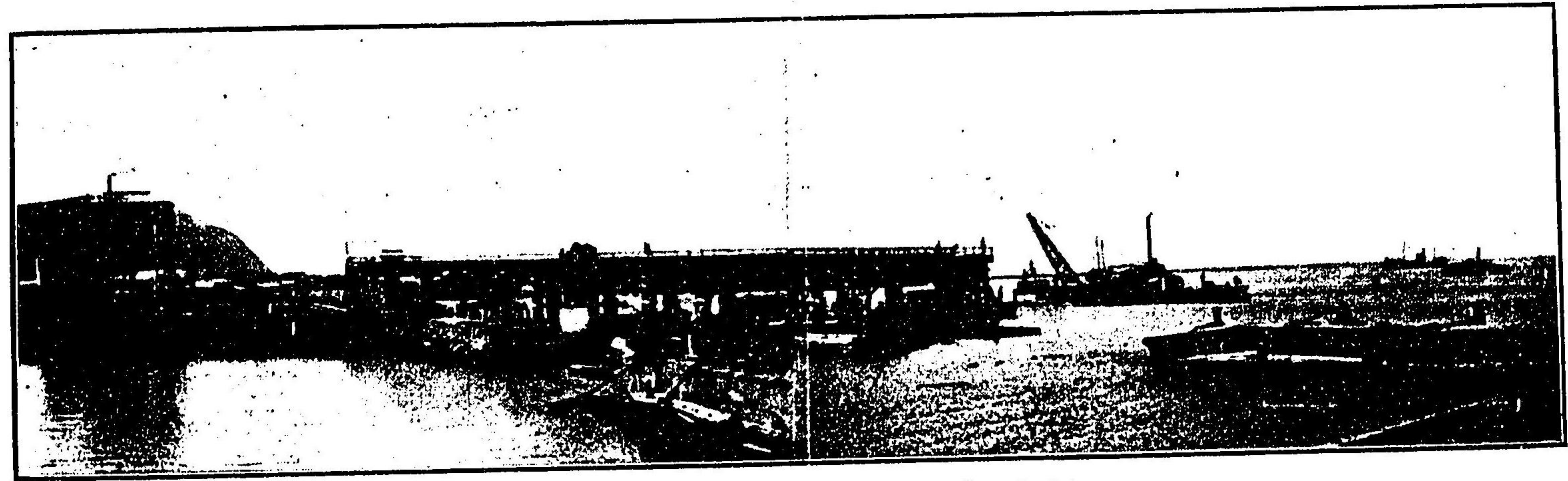
銀行一般ノ業務着實敏達御取扱可申候

岩內港全景





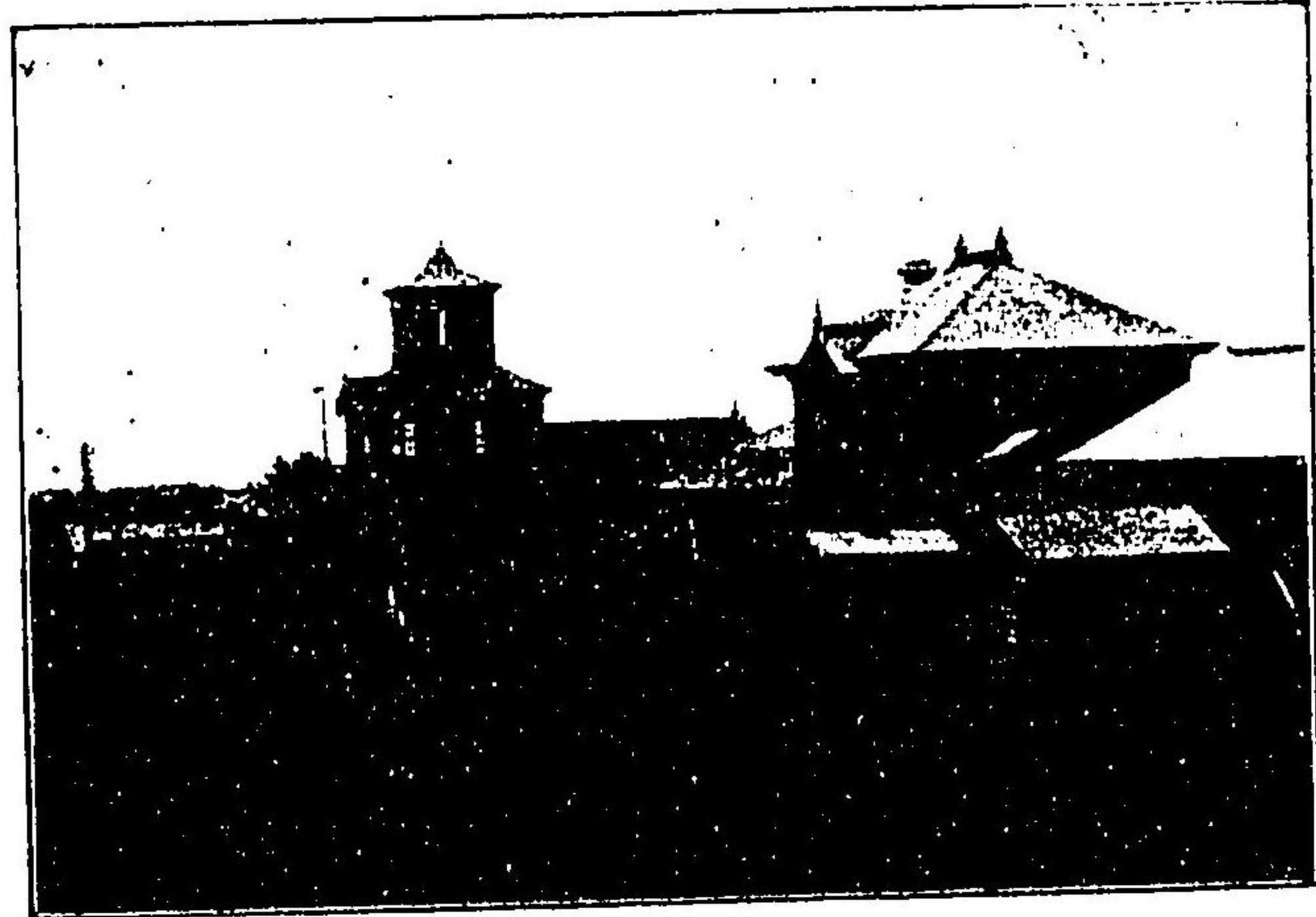
防波堤作工業事ノ景



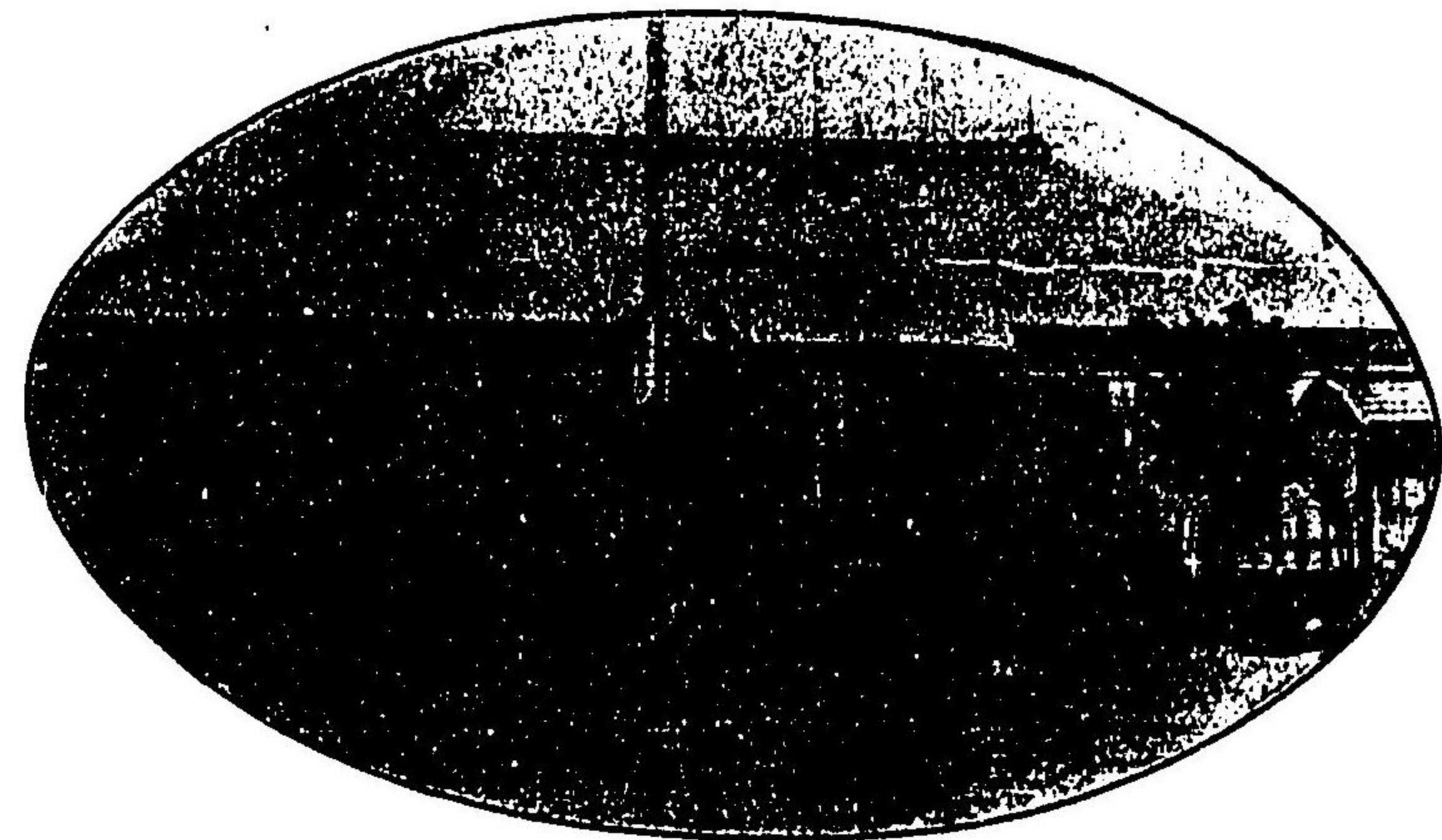
工場船入ヨリ防波堤ヲ望ム

激浪カ

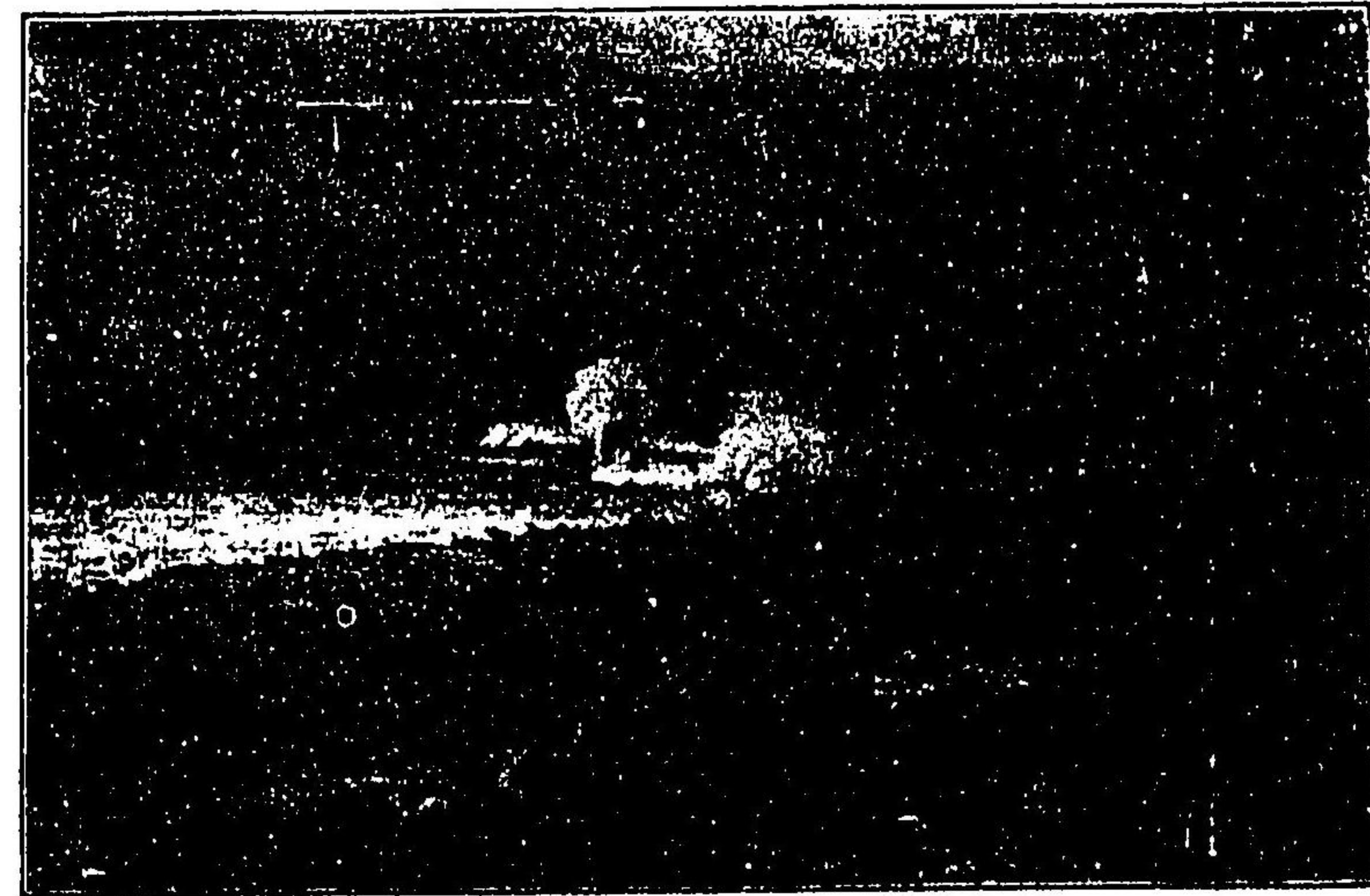
25-770



署察警内岩ト廳支内岩元



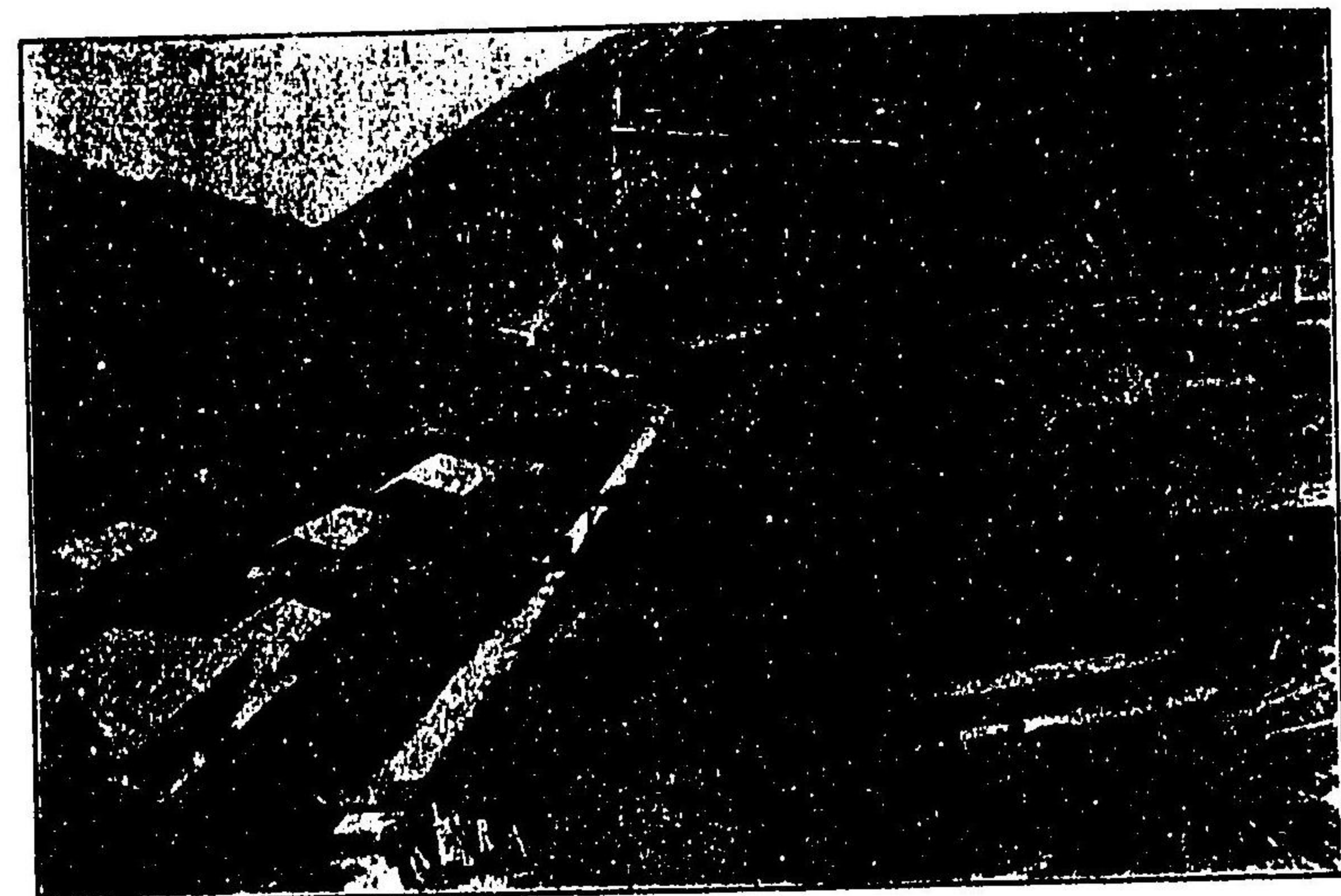
場役町内岩



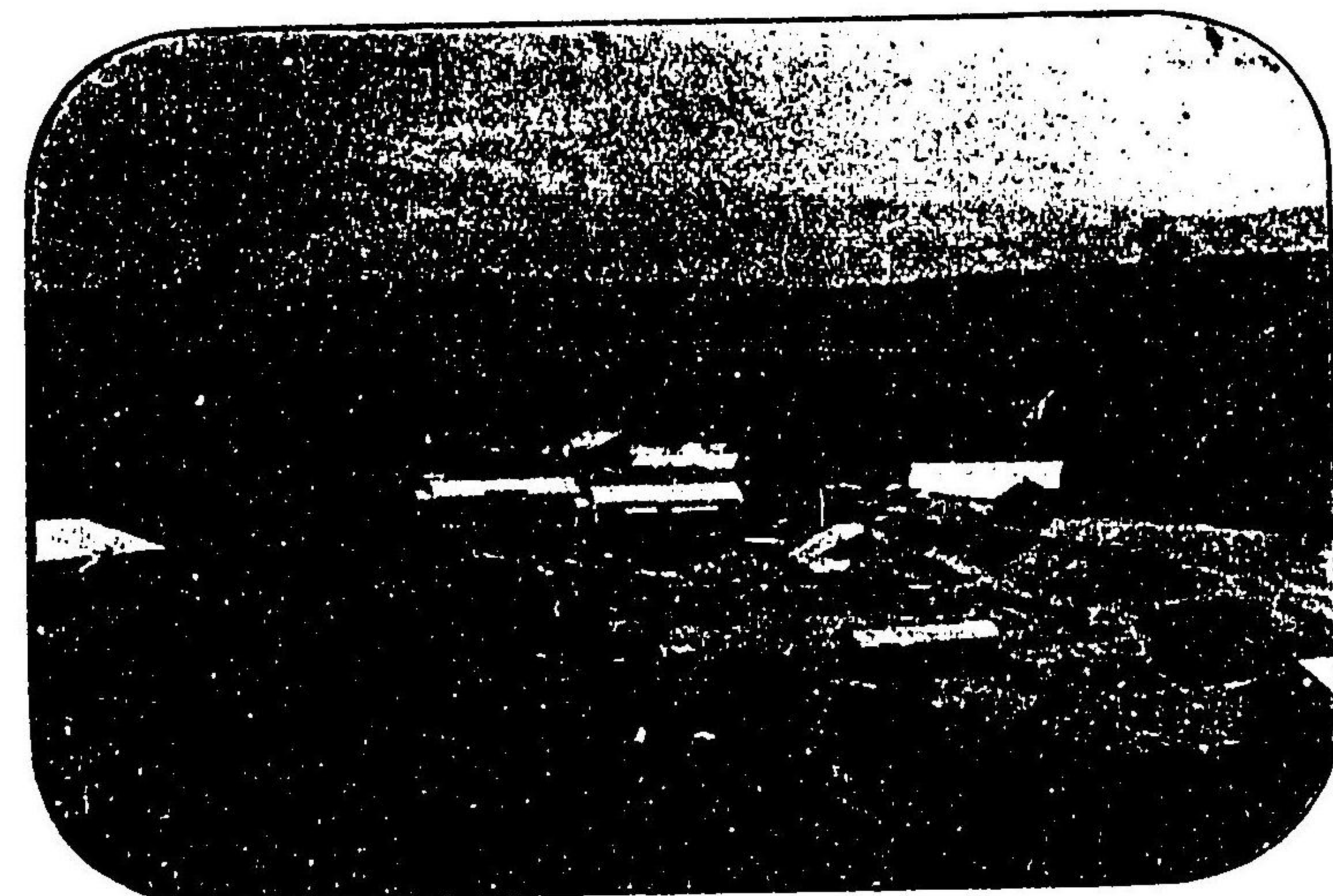
ス侵ヲ堤波防浪激



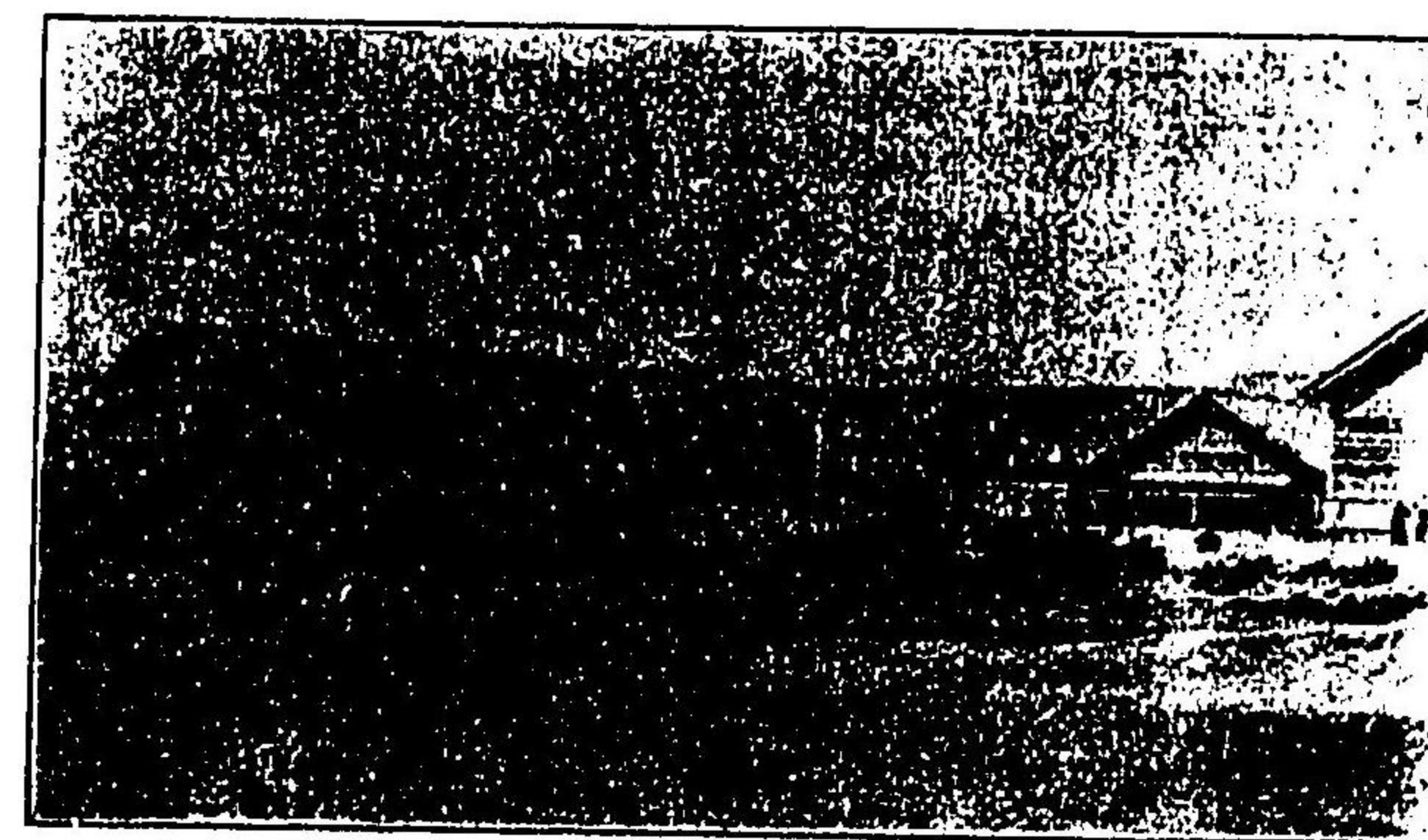
景ノ事工業作堤波防



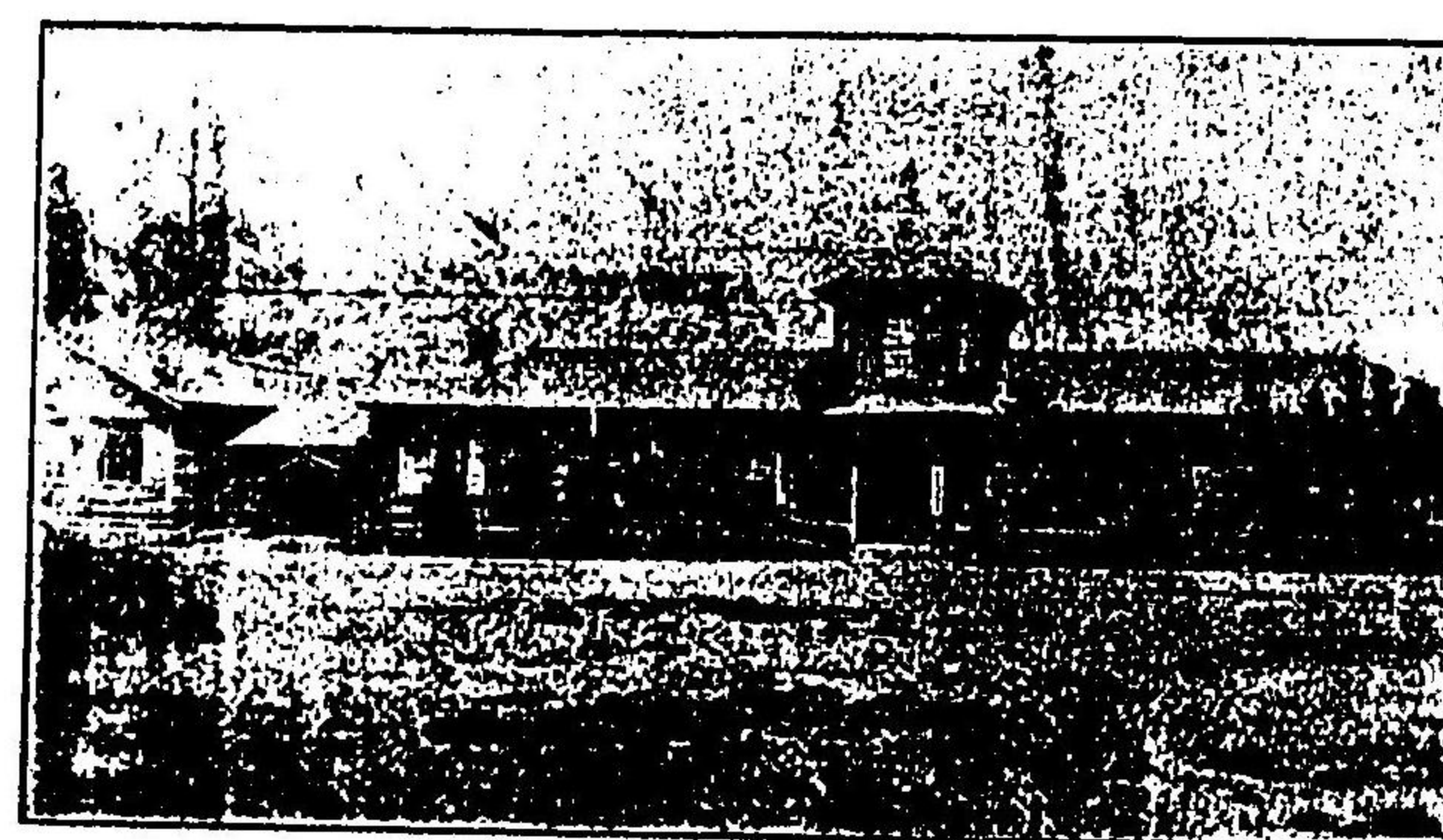
三井岩雄登硫磺元山景



同上宿舎の全景



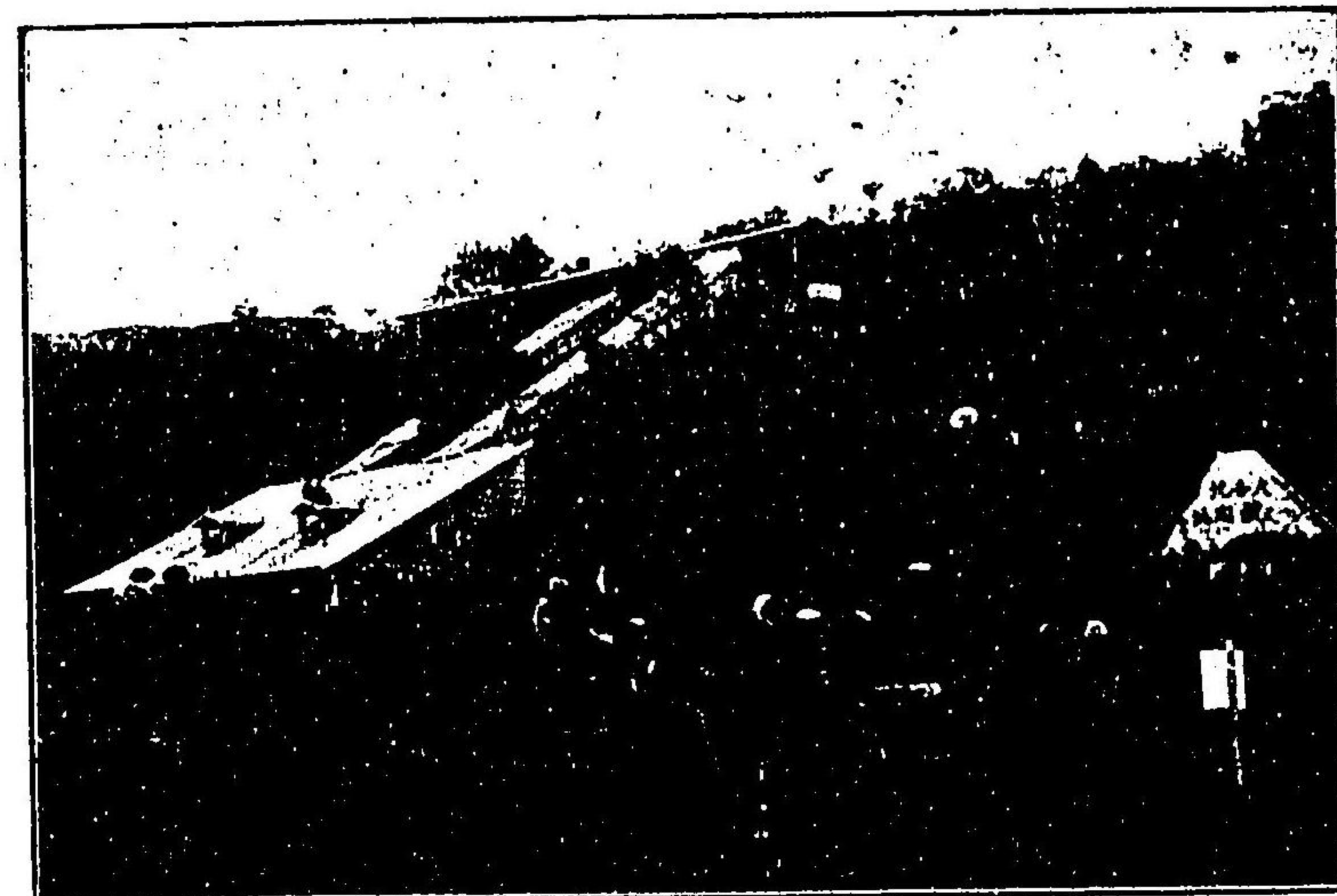
岩内尋常小學校



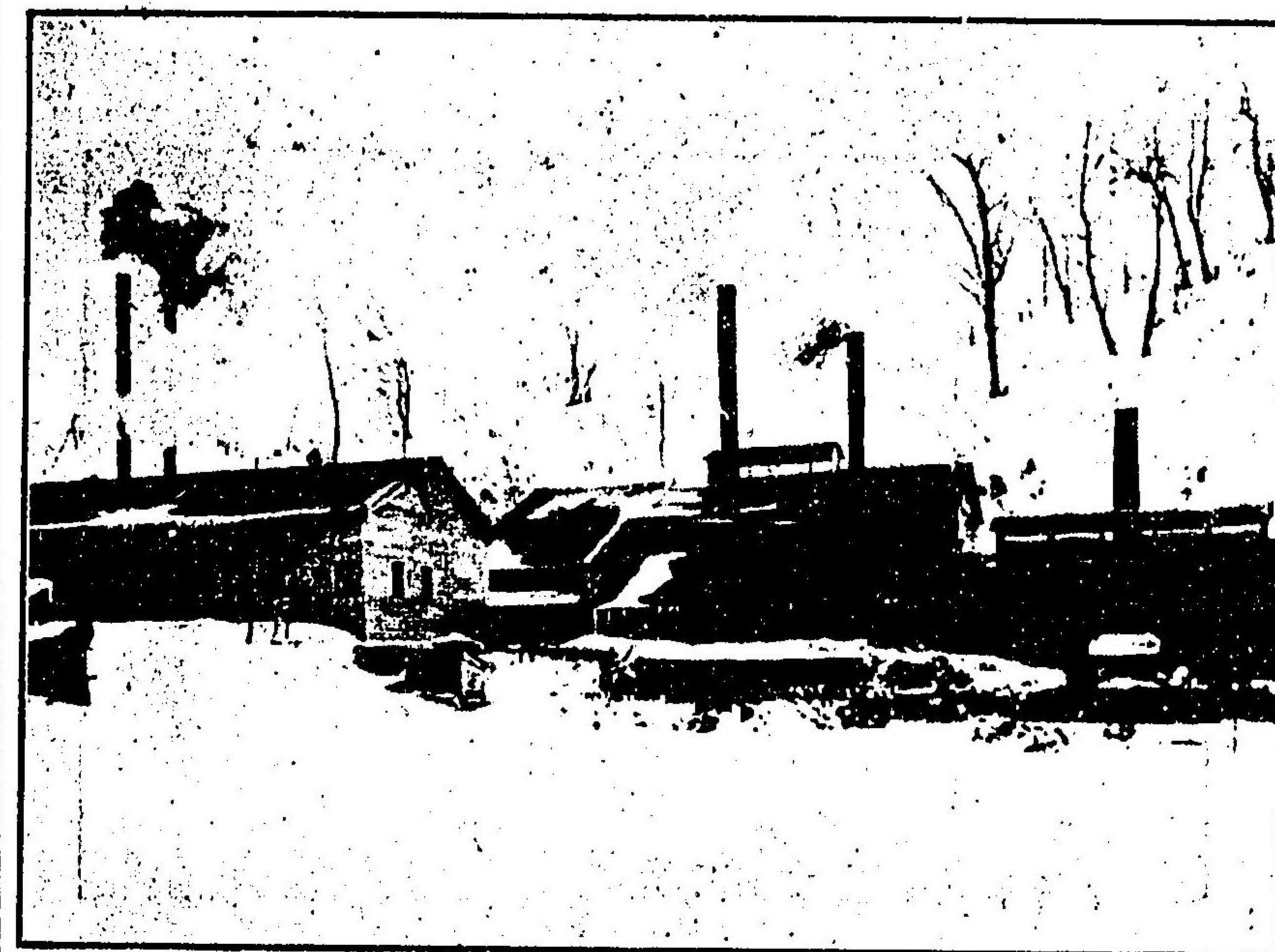
岩内女子尋常小學校



岩内郵便局



坑吉大(沼茅在)礦炭内岩



景全の爐礦溶山礦富國



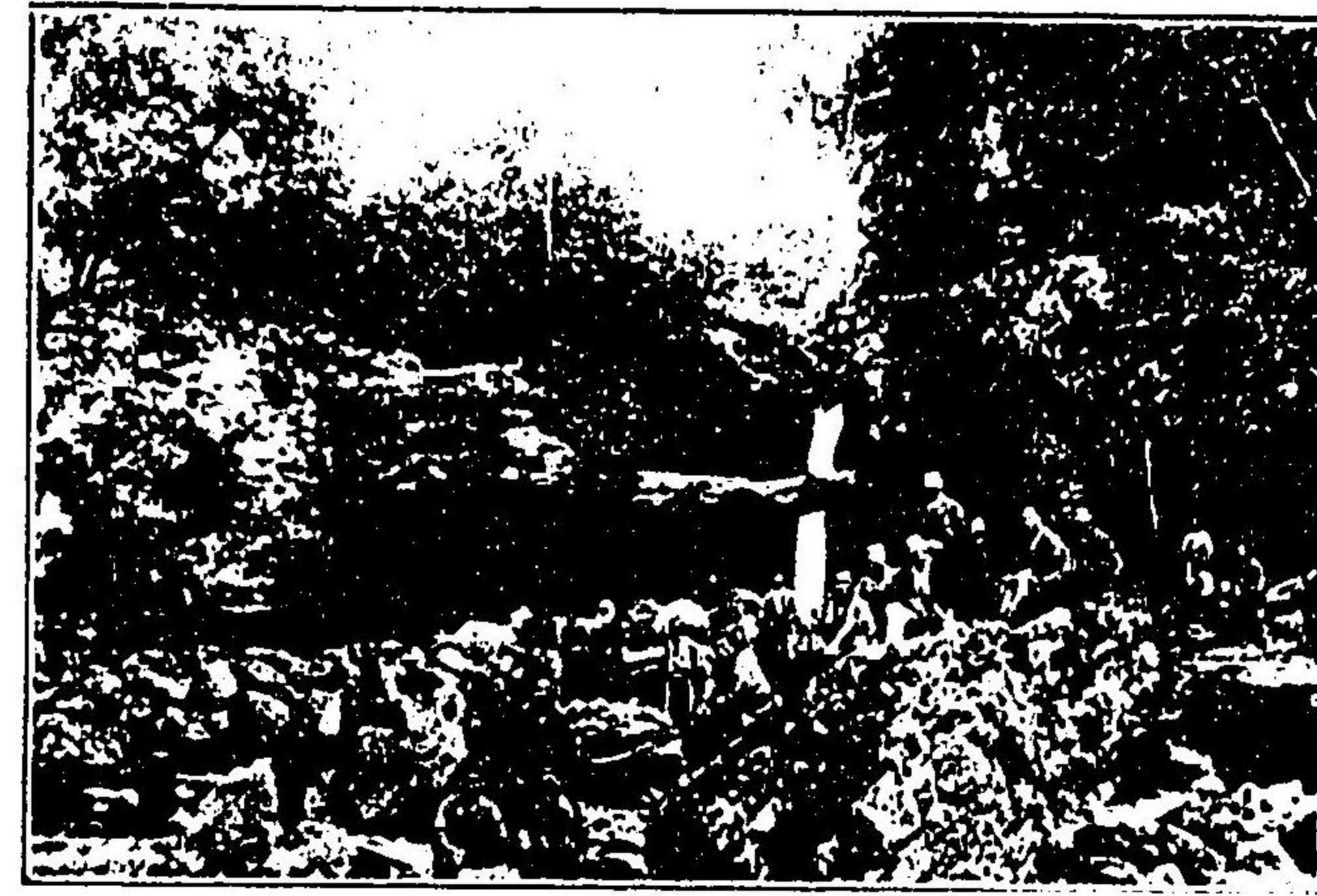
全の沼茅



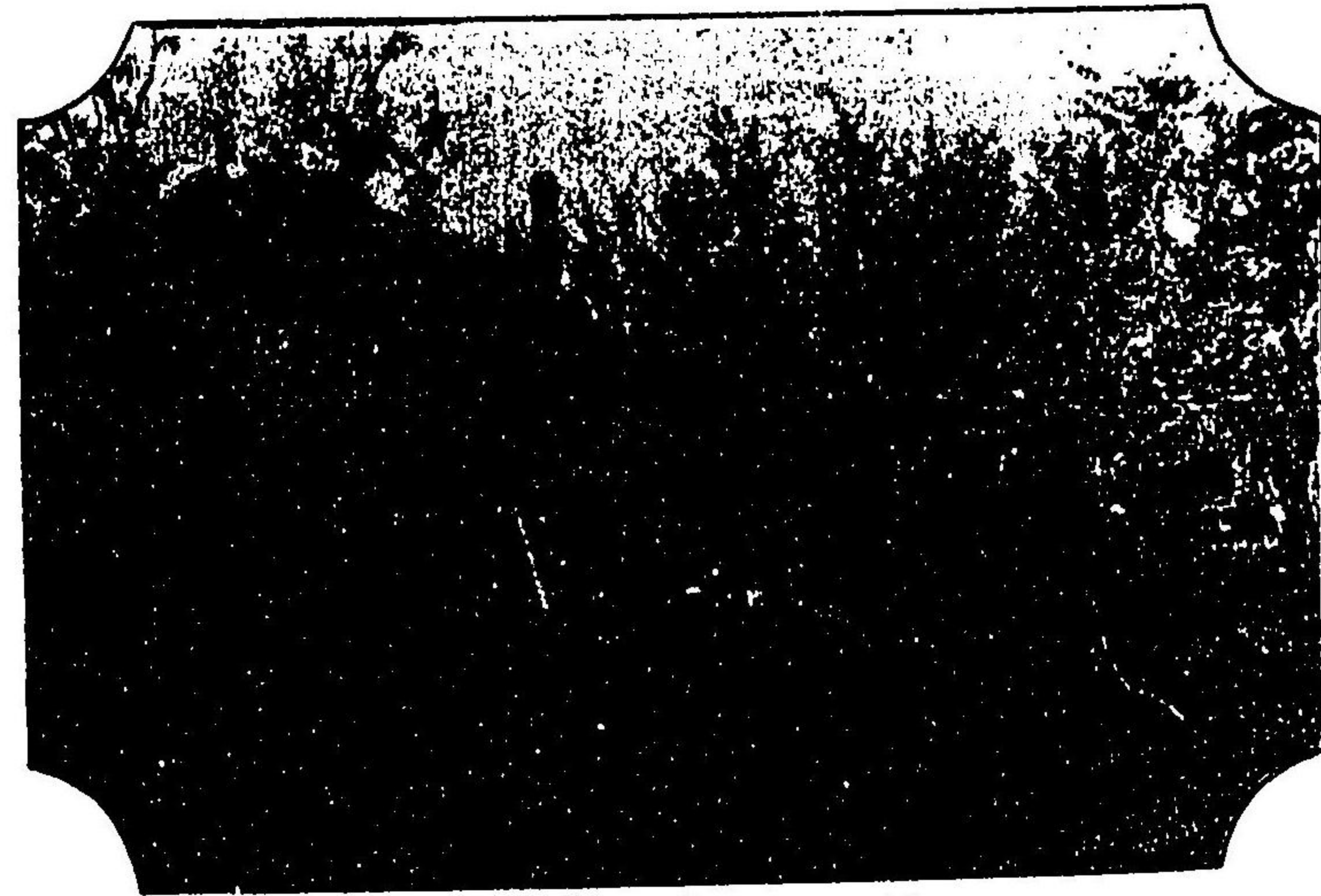
所護救内岩



園桑會人婦內岩



瀧神鳴



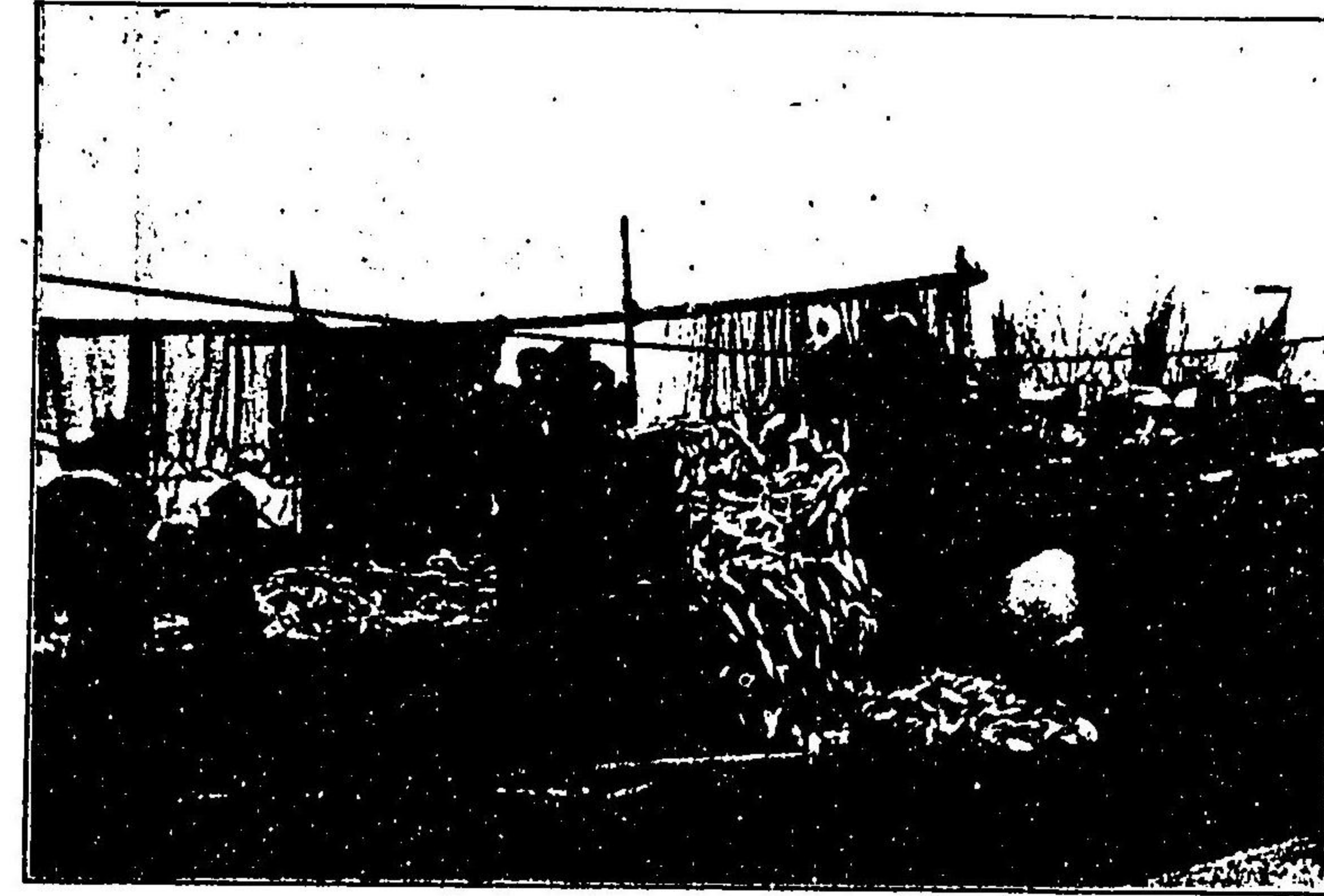
邸家樓上村



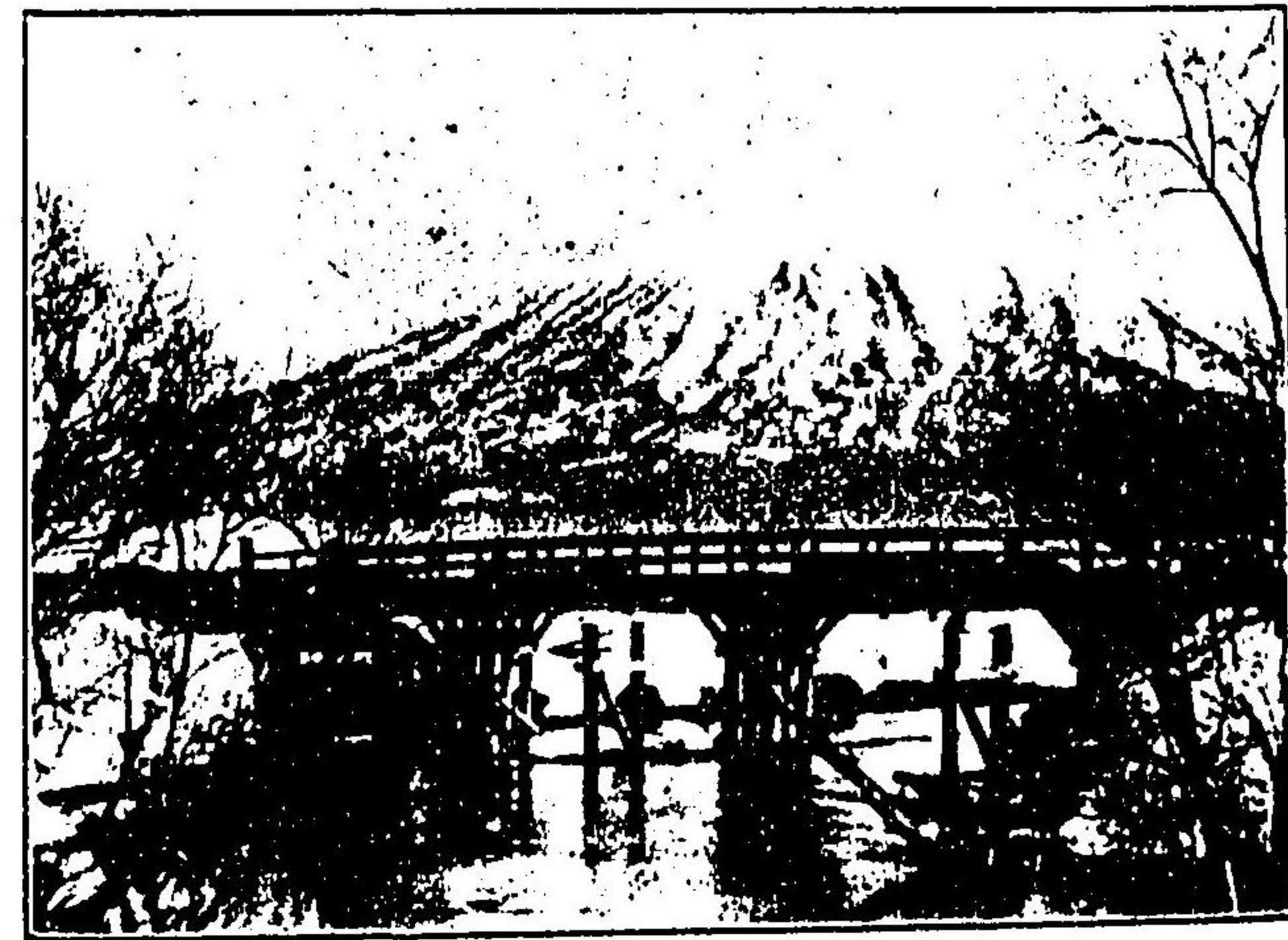
所電發內島敷氣電力水內岩



町内 鉢御内岩



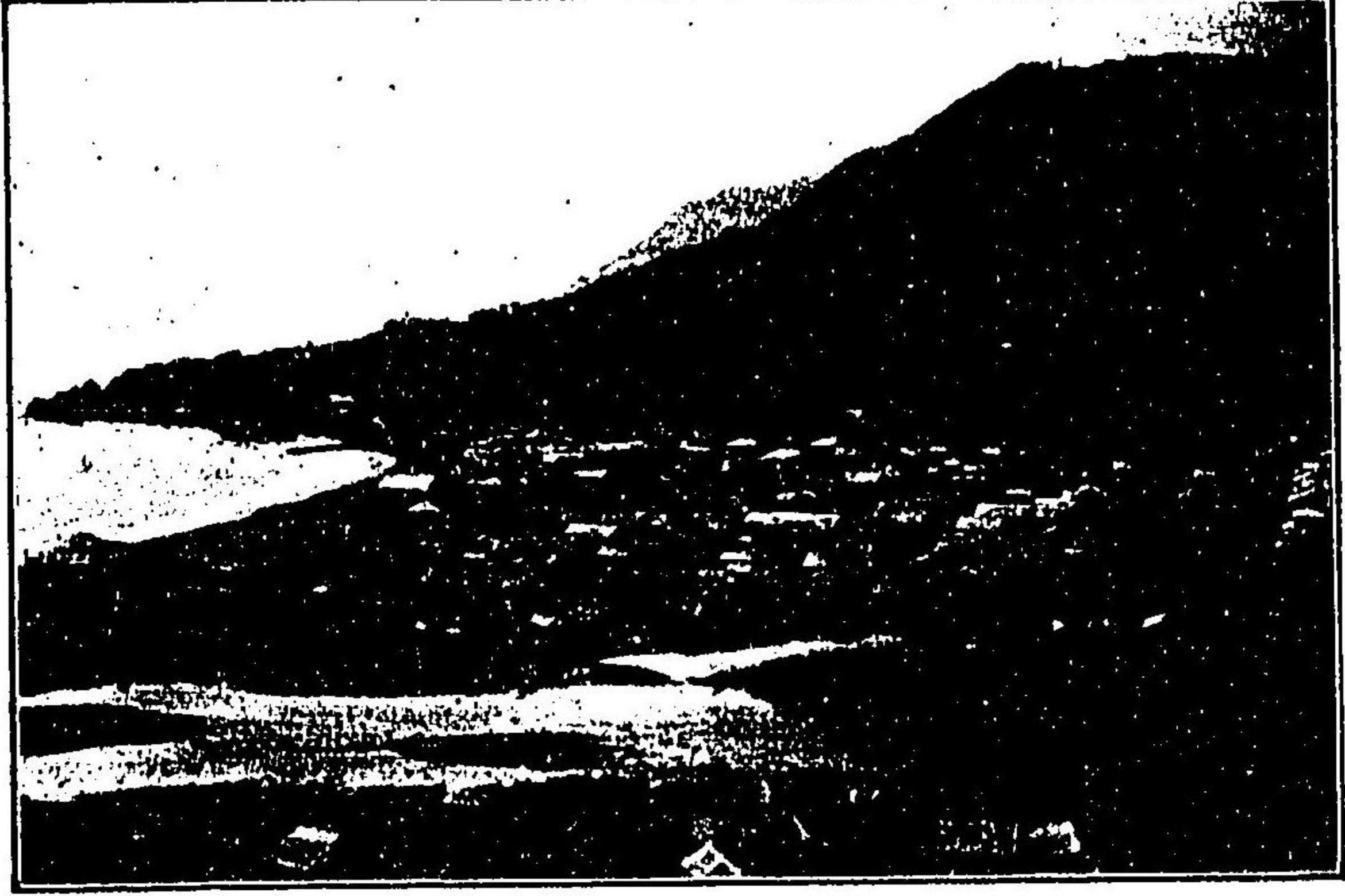
圖の揚沖網差鯨内港内岩



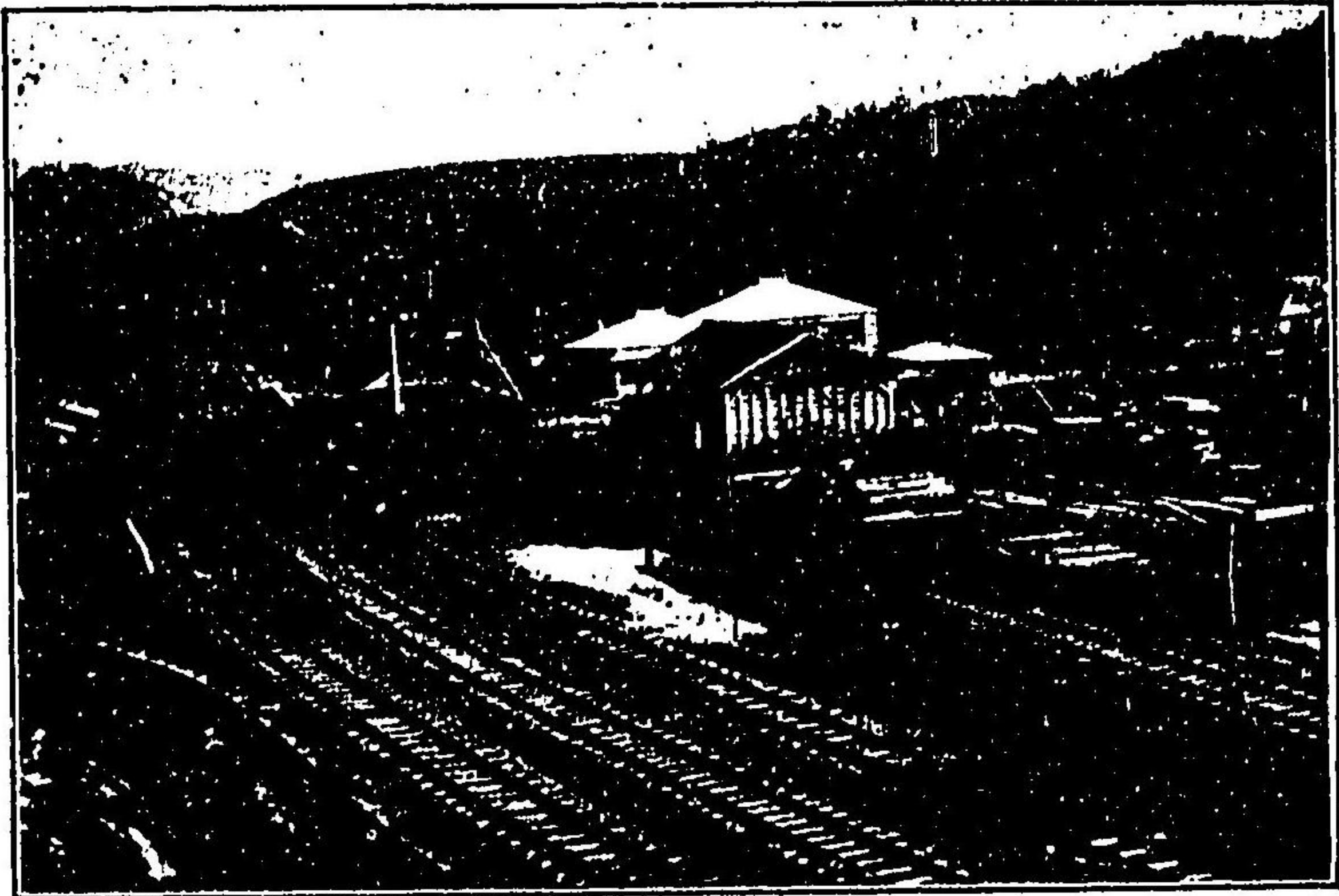
景ノ士富夷蝦名一山蹄羊



船驗試撈漁海近合組産水内岩



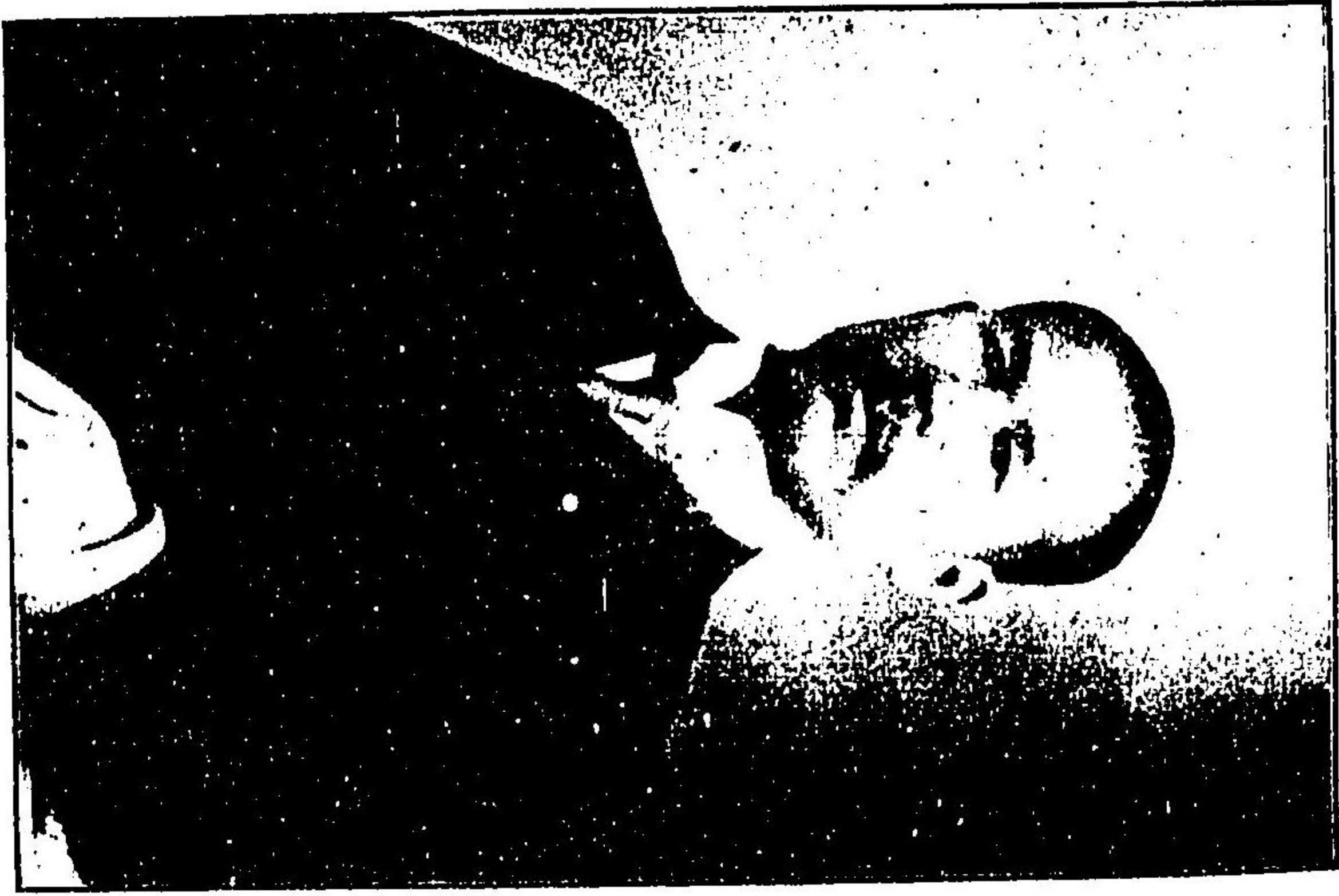
古宇郡神惠内全景



小澤停車場ノ景



岩内町長 山下良實君

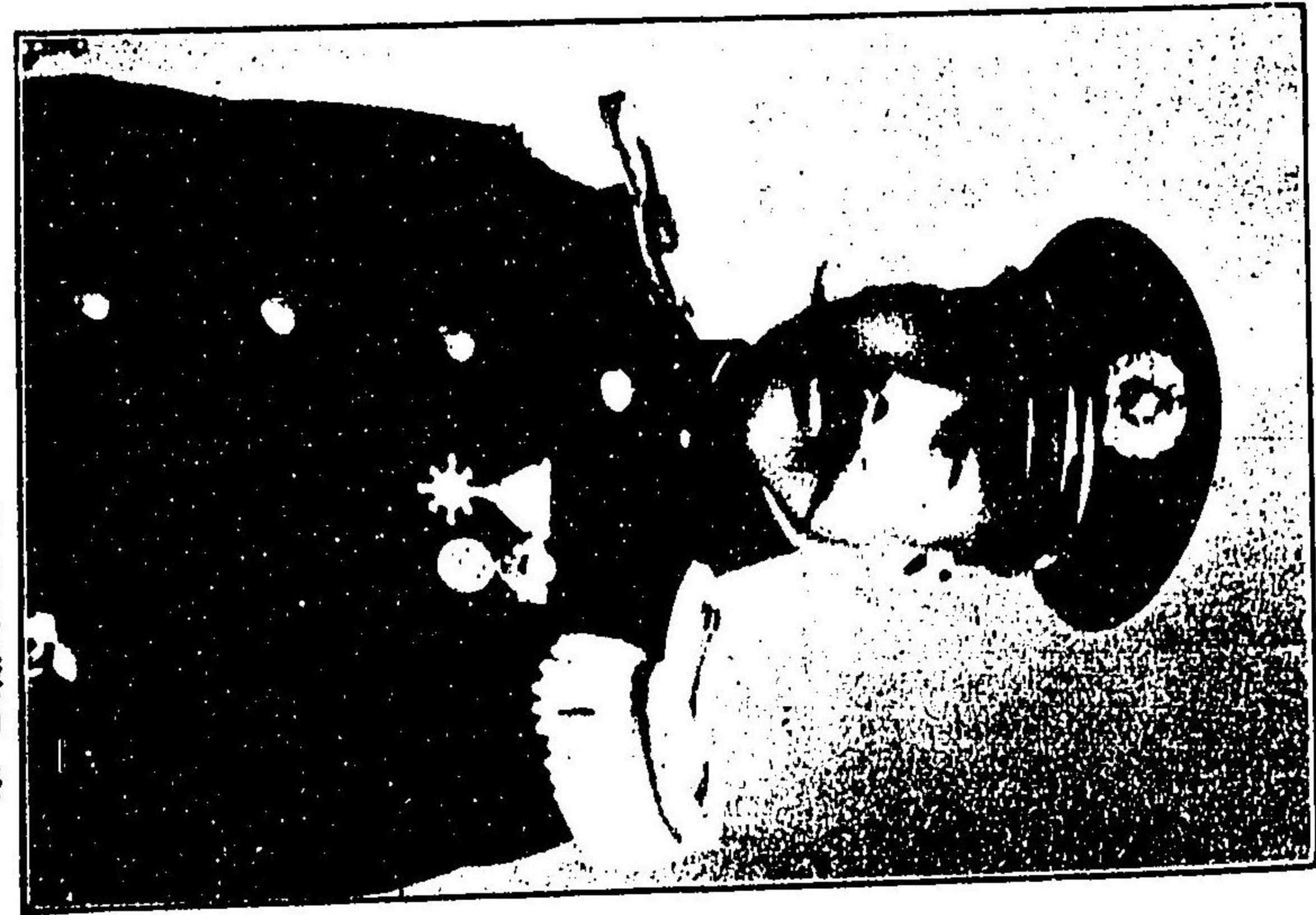


後志支長 東郷重清君

翁那太市澤梅 家封葉內岩



君毅弘日野子 長署察警內岩



君精真瀬築長局便郵內岩前
君郎次捨瀬築長局便郵現

君吉榮場馬 者表代社會名合場馬



君吉清本橋 家業實



役締取社台氣電力水内岩
君郎四長村川 家業漁



員議會町内岩前
君郎次勸間本





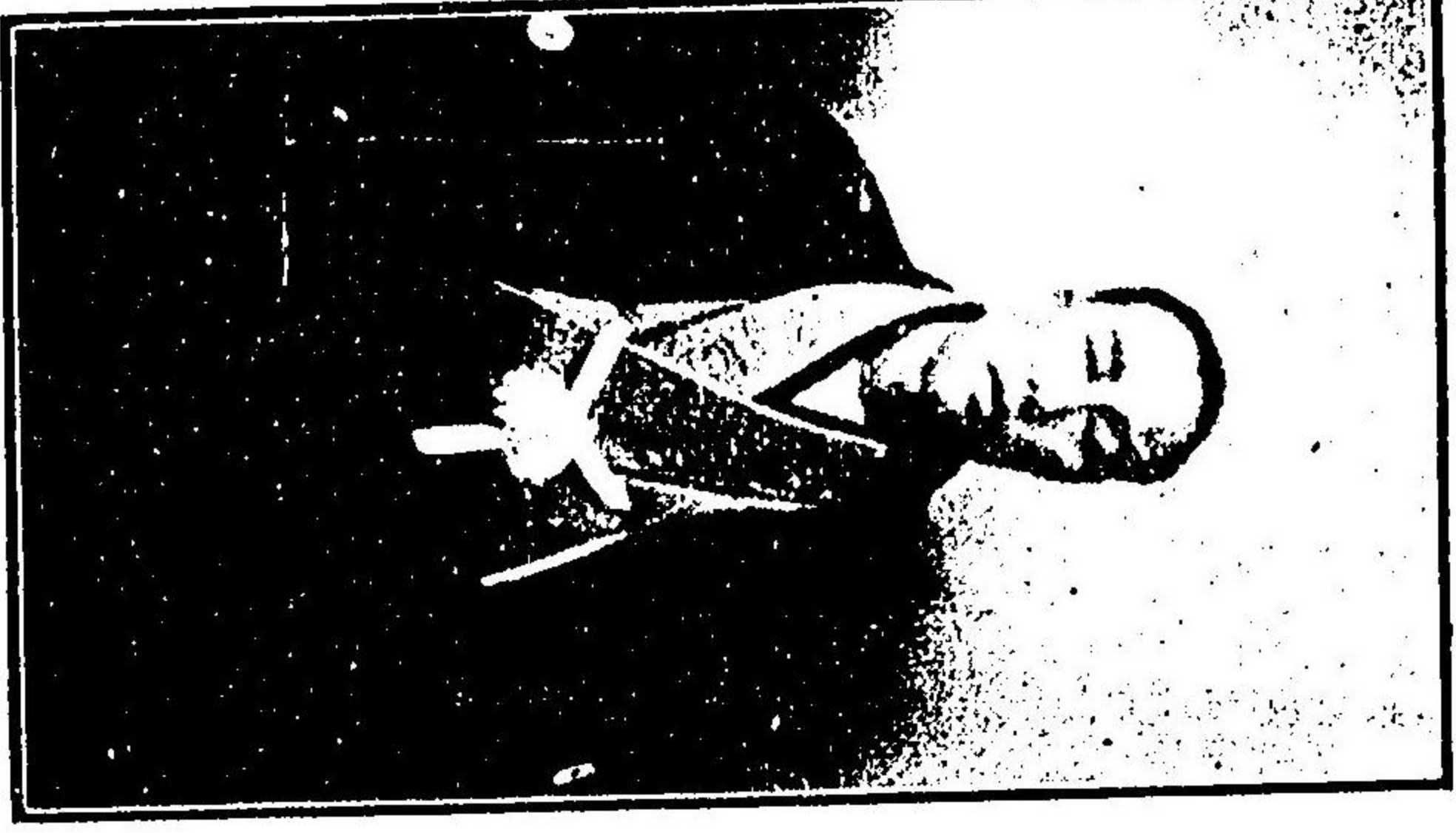
場漁其・君郎三富田井新 家業漁内島敷



員 議 會 町 前
君 藏 作 藤 澄

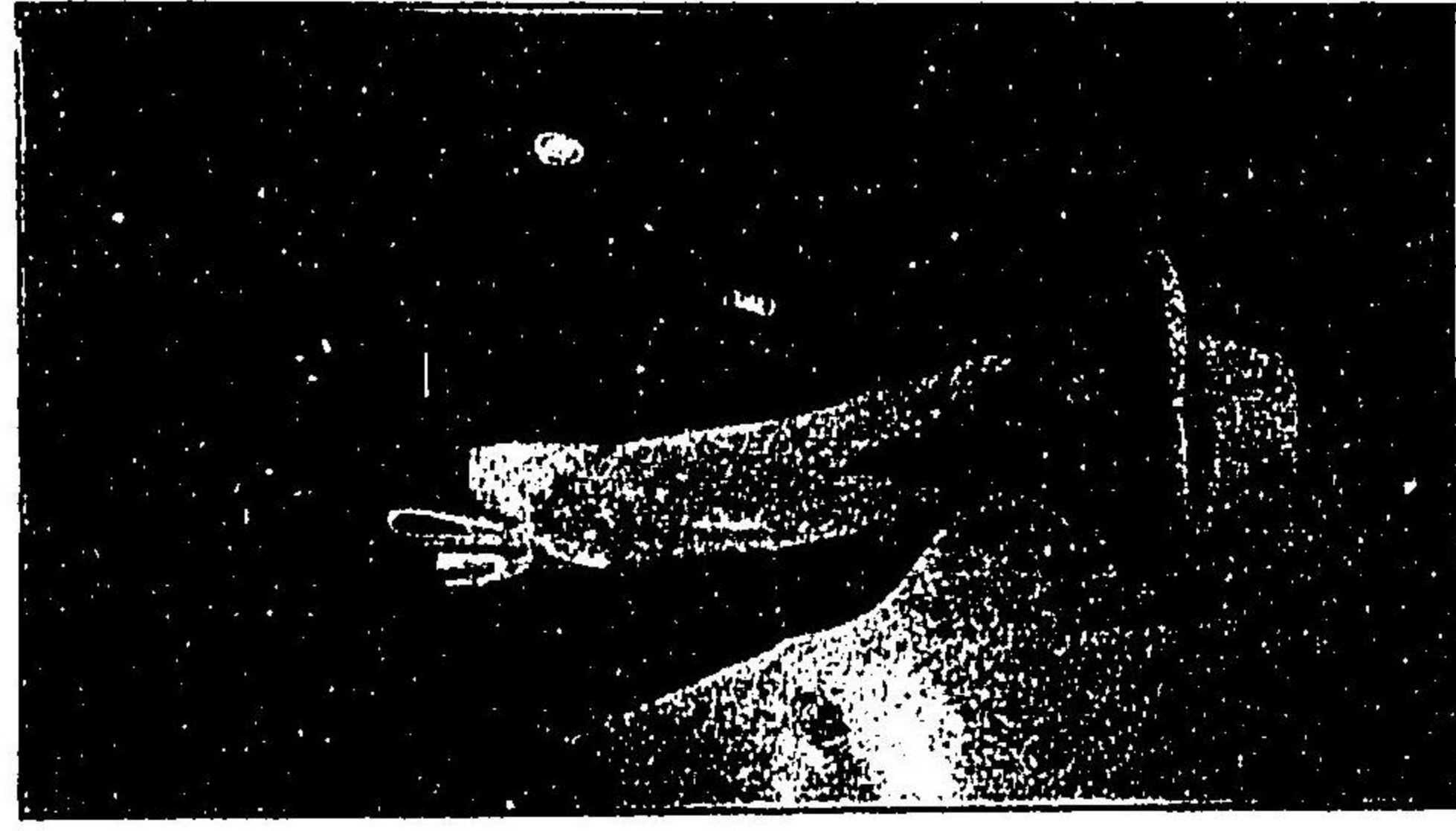


員 委 港 築 築 員 議 會 町
君 助 貞 林



員 委 港 築 築 員 議 會 町
君 耶 太 孝 田 藤

辯護士
孝本山君



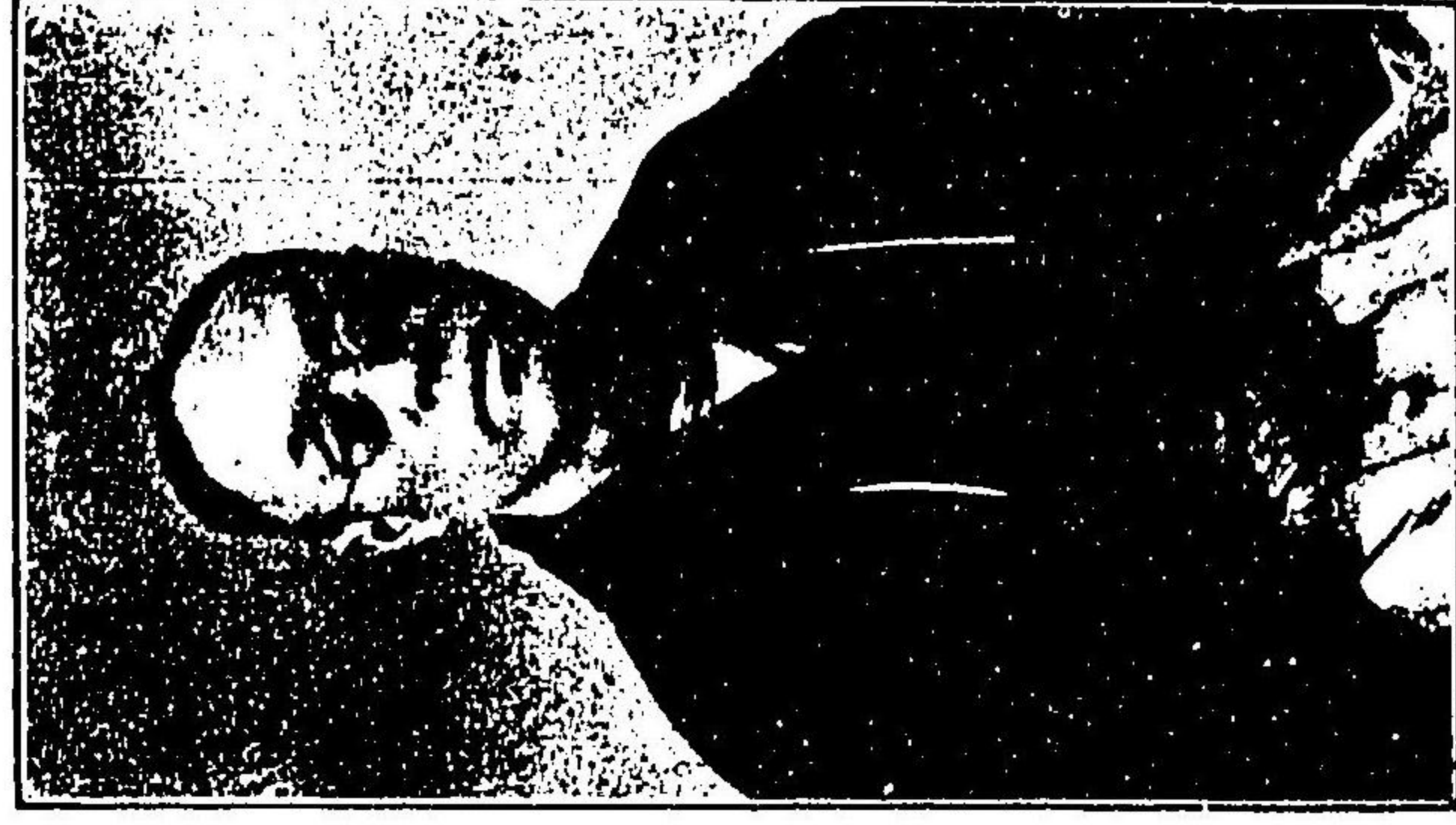
實業家
濱田二郎君



町會議員
北友之助君



公證人
上岡鶴君



町會議員兼
委員長
跡金治君



馬器社
北海道銀行
監督
澤口良藏君



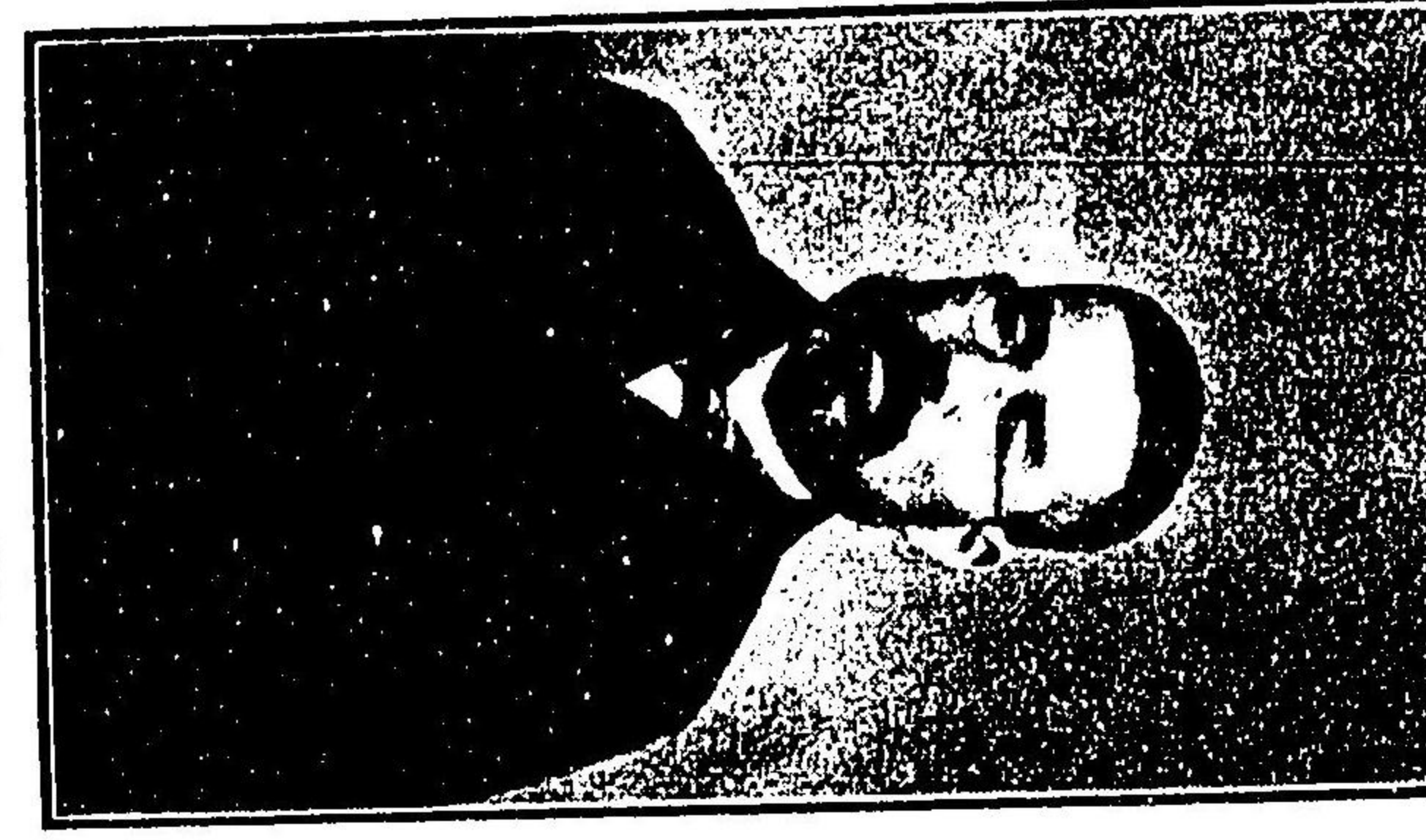
業員建築組合組工木
君 吉利 崎 宮



家 業 漁
君 門 衛 右 興 伍 松



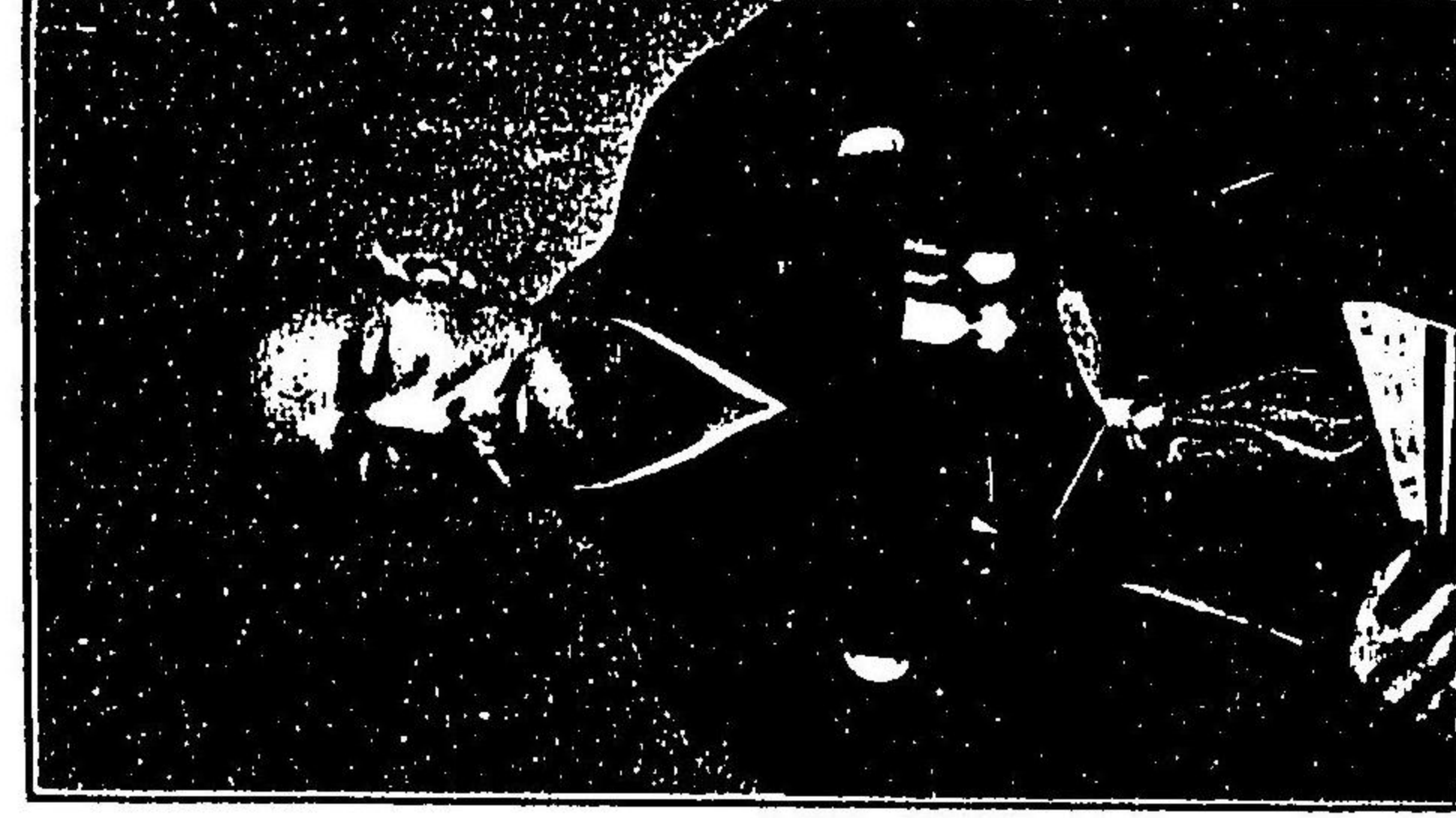
長院病泉 士學醫
君 郎 太 鉄 泉



長社開新宇古長町内岩前
君 和 常 上 三



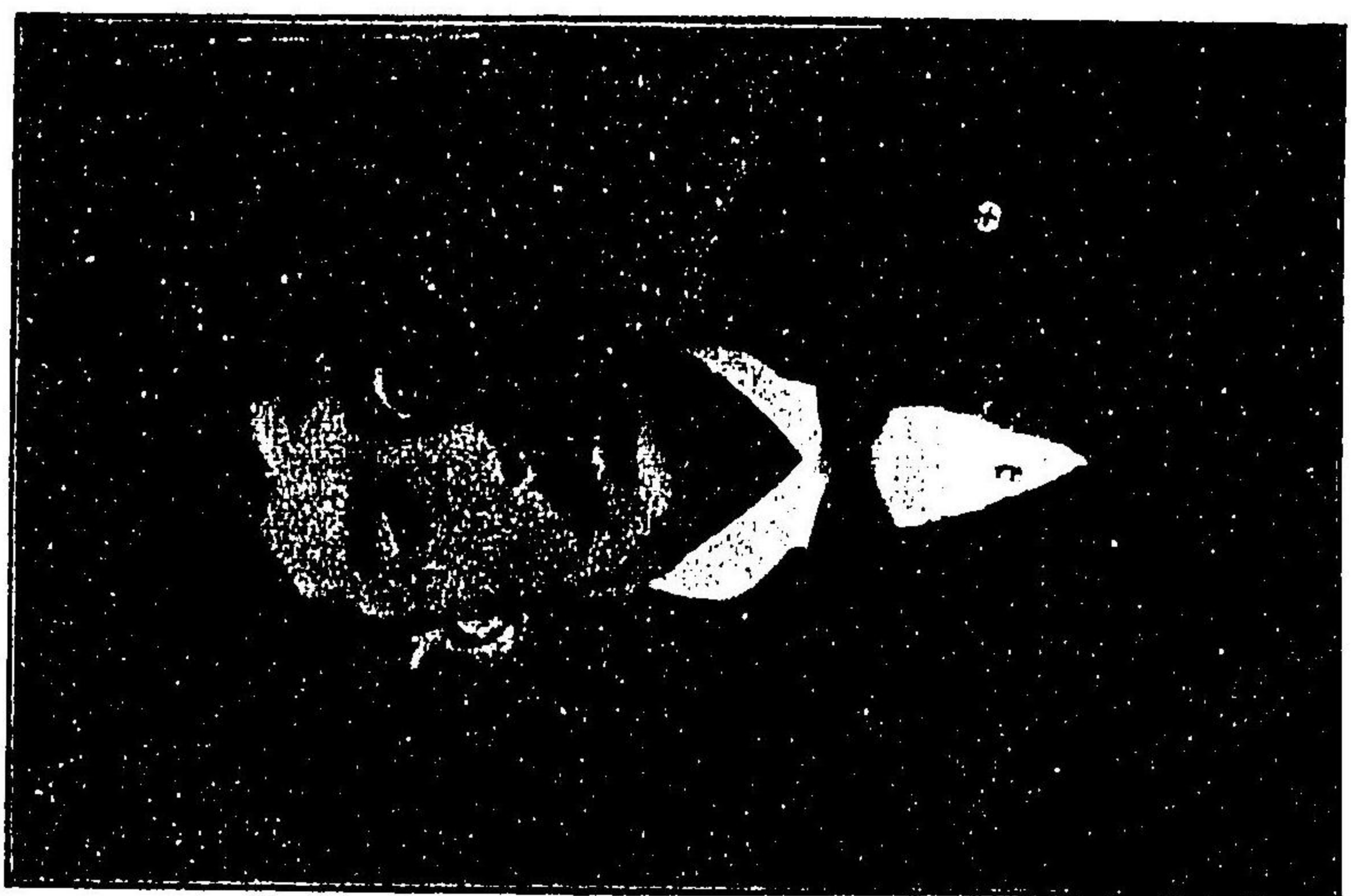
員委設常長町内岩前
君 崎 兵 順 島 大



役 助 町 内 岩
君 藏 敬 澤 道



君郎三喜濱 家業漁



君衛兵清藤 武



家業漁内島敷
君吉永浦河



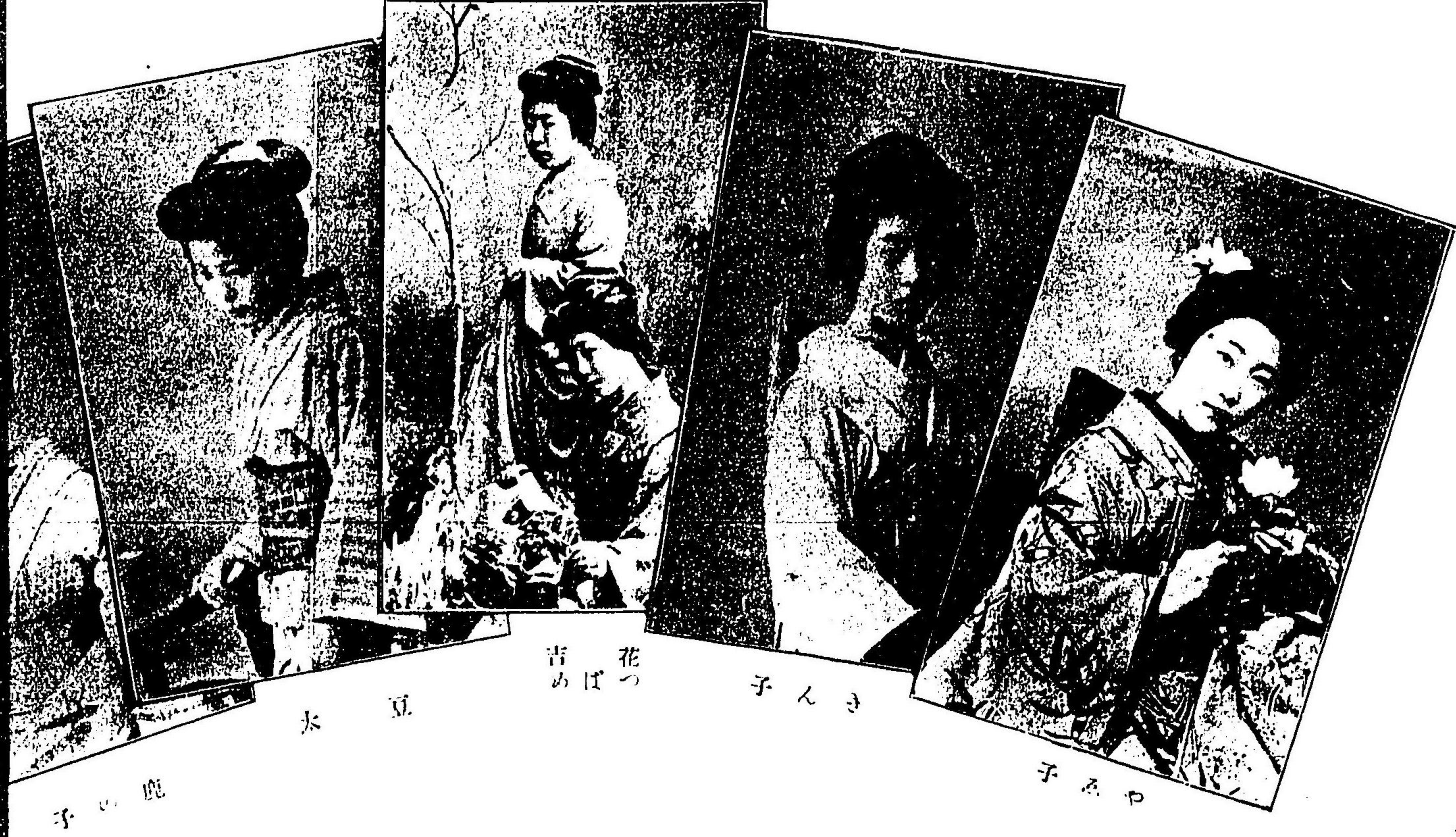
長院醫科崗岡下
君翼國下



長社報新内岩
君綱近山丸



岩 内 見 番 藝 妓



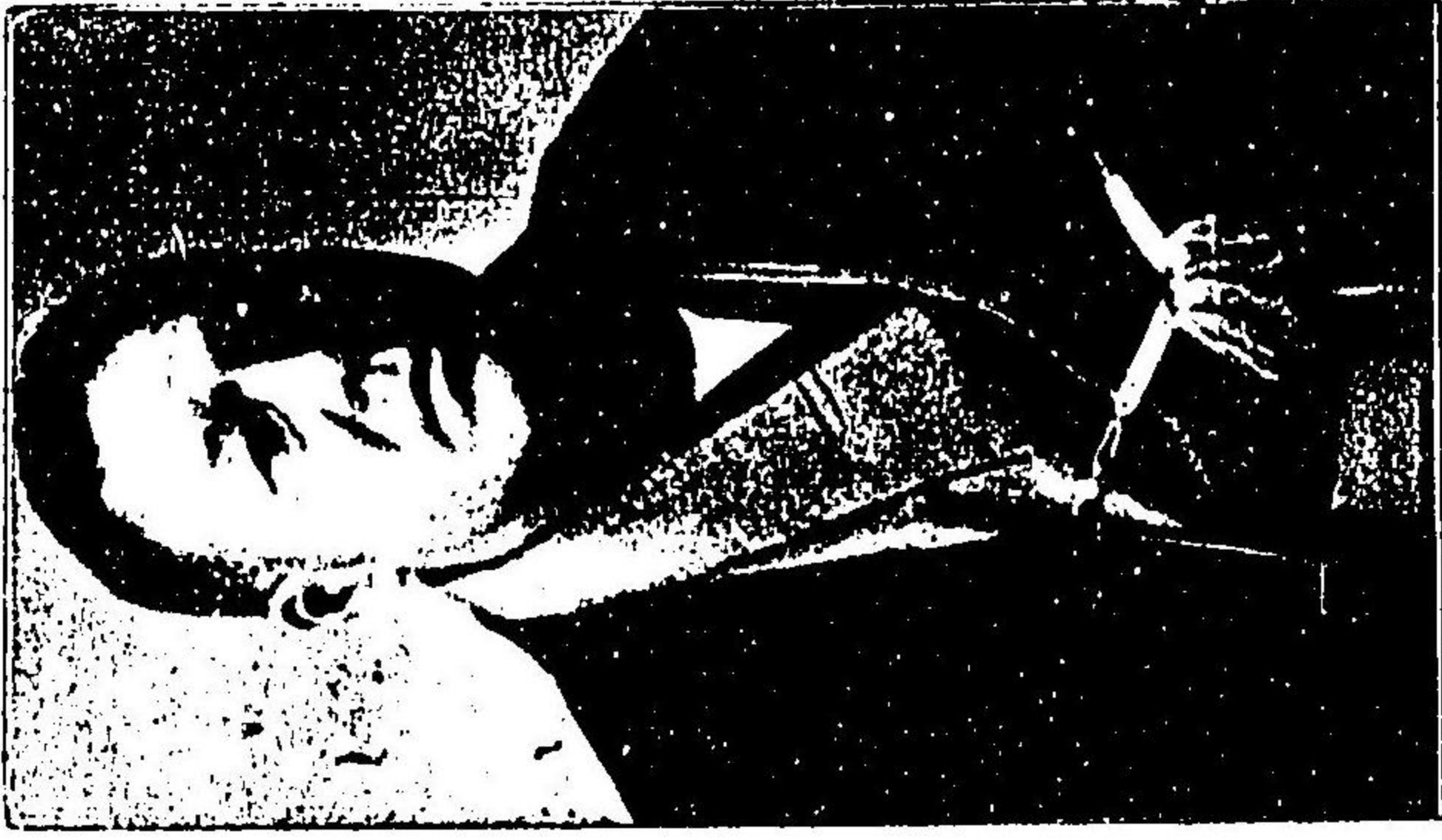
鹿の子

豆太

花吉
つめ

きん子

ア子



瀧 業 家
佐々木治君

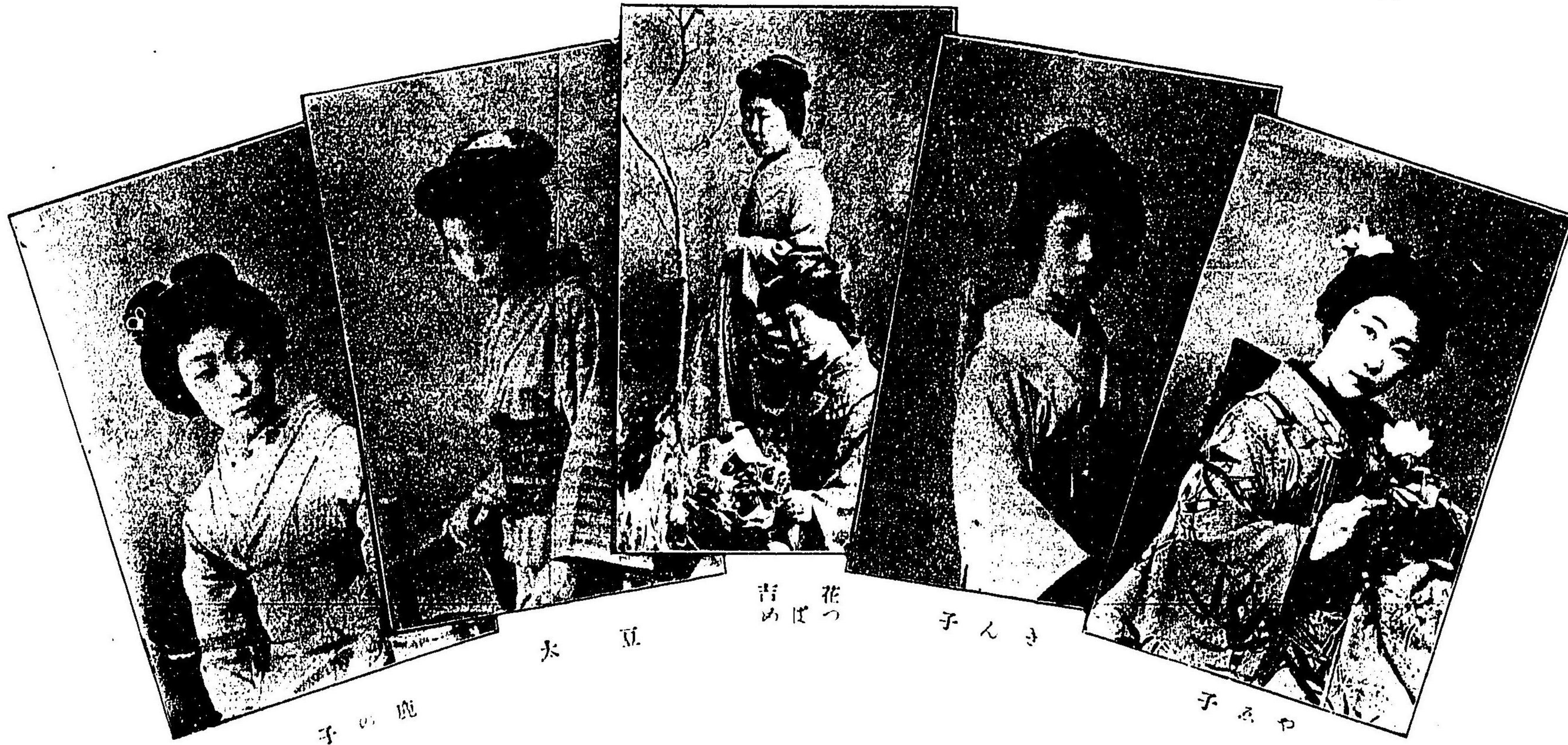


岩 内 新 主 幹
信夫 右衛門君



實 業 家
木間忠五郎君

岩 内 見 番 藝 妓



鹿の子

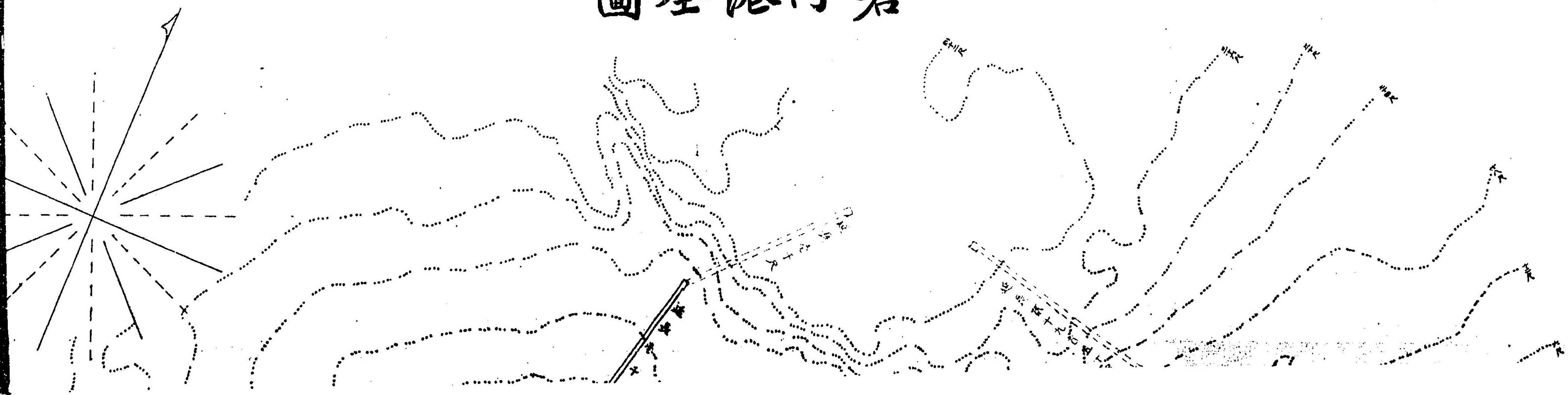
豆太

花吉
つめば

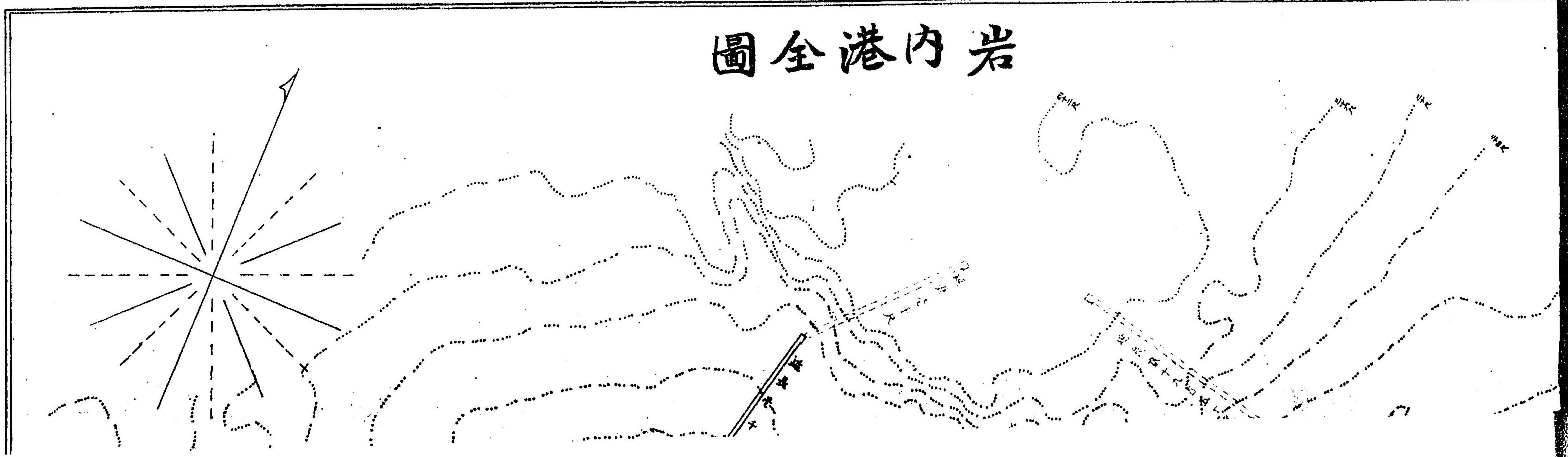
きん子

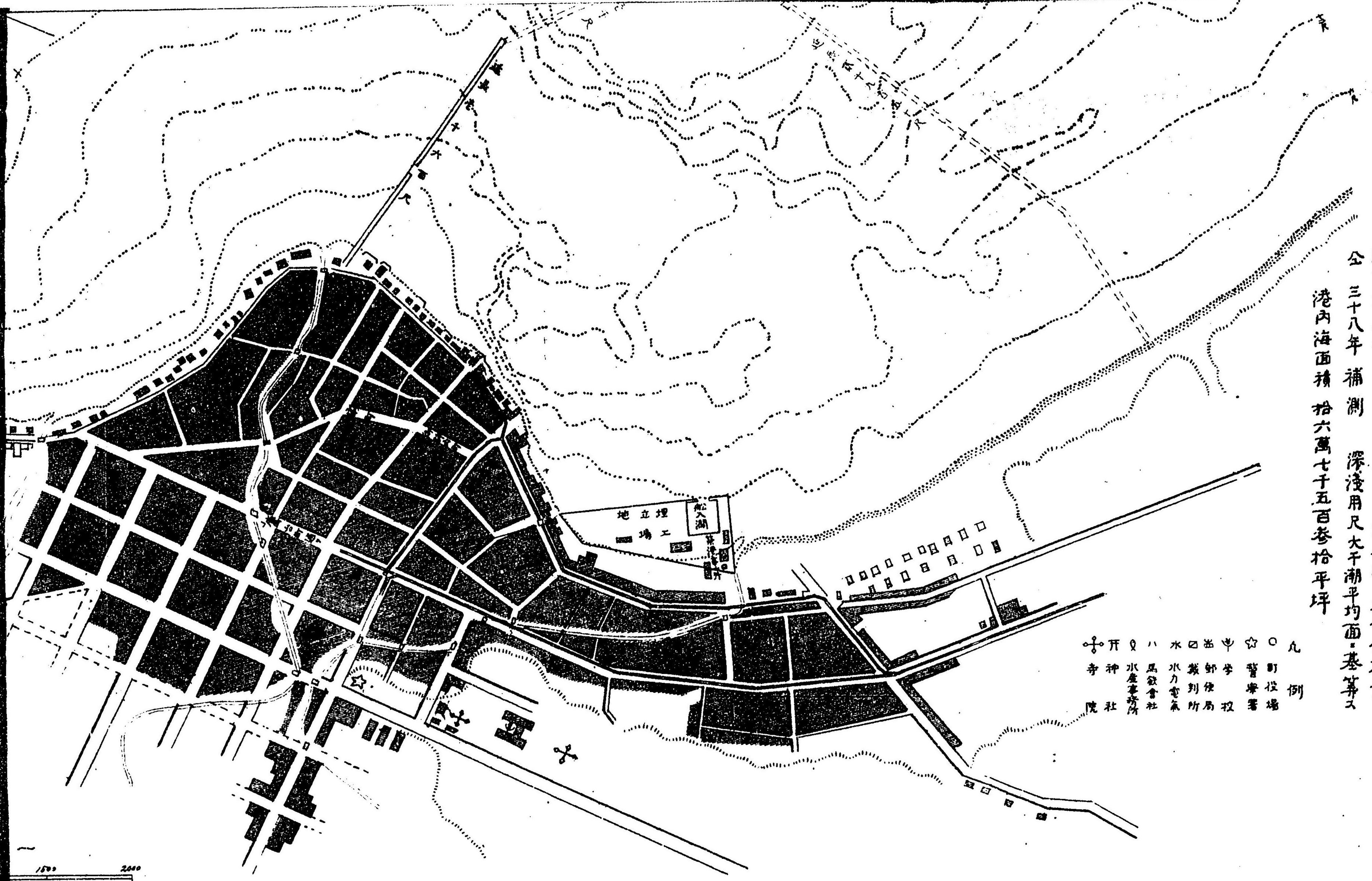
やぶ子

岩內港全圖



岩內港全圖

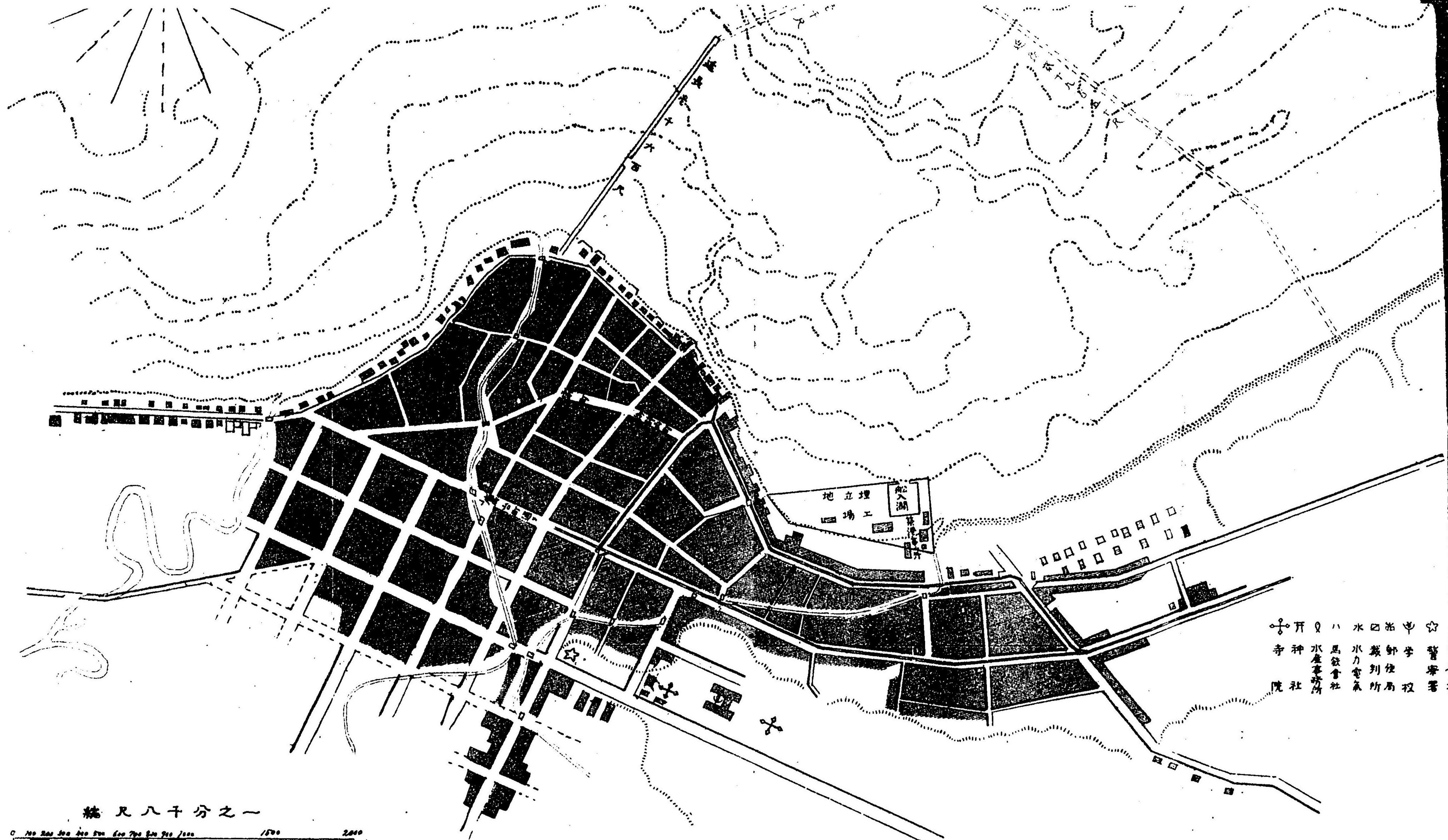




明治三十四年實測 大潮干満平均、差一尺三寸二分
 全三十八年補測 深淺用尺大千潮平均面、基準二
 港内海面積拾六萬七千五百叁拾坪

- 凡例
- 町役場
 - ☆ 警察署
 - 中 学校
 - 出 郵便局
 - 四 裁判所
 - 水 水力電氣
 - 八 農會社
 - 水産事務所
 - 寺 神社
 - 院

150 200



☆ 警署
 申 學校
 米 郵便局
 田 炭列所
 水 水力電氣
 八 馬鐵會社
 水 水產事務所
 神 神社
 寺 院

縮尺八十分之一

0 100 200 300 400 500 600 700 800 900 1000 1500 2000

◎貯金、定期、當座、小口、諸預金◎擔保付手形ノ割引及貸付
 ◎爲換◎荷爲換◎北海道拓殖銀行代理事務等精々御便利ニ
 取扱可申候



株式會社

拓殖貯金銀行岩内支店

電話 (一一五番)

札幌區大通リ

本店

店

旭川町二條通

旭川支店

(北海道拓殖銀行支店內)

空知郡岩見澤町
 岩見澤支店

小樽區稻穂町

小樽支店

函館區船場町

函館支店
 (北海道拓殖銀行支店內)

檜山郡江差町
 江差支店



正確
札實

醬油
味噌

岩內港御鉢内町

本間吳服店

電話 四十六番

岩内港總台町

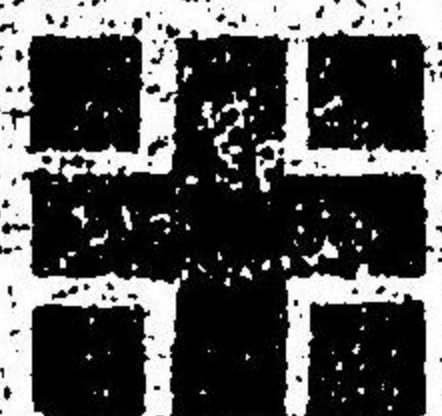
本間釀造部

電話 (百五十一、二)

吳服太物

洋反物

商



岩内御鉢内町八二番地

櫻居捨吉

電話 (五番)

確實正札



梅澤吳服店

電話 三十六番

各國汽船取扱
回漕業

北海道岩内港

由利回漕店

電話(五十三番)
電器(エタ)又(六二)



古宇、磯谷間定期船

第三古宇丸

取扱店 由利回漕店

清酒釀造卸小賣

岩内港橋町字清住



角

林藏

白米雜貨卸小賣
諸荒物
栗林國太郎

岩内御鉢内町

電話(六六)

確實正札

吳服太物業

全橋本吳服店

電話 三十二番

岩内港大字麻籠町

◆清酒

共立酒造合資會社

岩内港御鉢内町

海產商



佐藤熊吉

並海陸物產委託販賣

電話 一三〇番
岩内 (三ツ) 又 (二) 番

岩内港麻籠町新廓通

清酒釀造元



西尾酒造部

各國汽船取扱
回漕業

北海道岩内港

佐藤回漕店

電話(二一四番)
電略(サトウ)又(サ)

日本郵船株式會社岩内代理店 岩内港御鉢内町
各國漁船取扱業
貨物乘客取扱所

合資 橋本回漕店

電話(十三番)
電略(ハシ)又(ハ)

米雜穀商
荒物肥料



岩内港鷹邊町
齋藤商店

電話(四十一番)
電略(サ)又(ハ)

洋服裁縫



岩内港御鉢内町
倉部洋服店

靴製造

岩内港御鉢内町
かねせ靴店

渡邊又吉

各國汽船取扱
回漕業



北海道岩内港
佐藤回漕店

電話(二一四番)
電報(サトウ)又(サ)

日本郵船株式會社岩内代理店 岩内港御鉢内町
各國汽船取扱業 會社
貨物乘客取扱所

橋本回漕店

電話(十三番)
電報(ハシ)又(ハ)

米雜穀商
荒物肥料



岩内港御鉢内町
齋藤商店

電話(四十一番)
電報(サ)又(ハ)

洋服裁縫



岩内港御鉢内町
倉部洋服店

靴製造

岩内港御鉢内町

水谷靴店
波邊又吉

翫商店

木材部 森 孫三郎

(岩内廳盛岡)

電話 百二十七番

藥品部 森北辰堂藥局

電話 百四十番

解業

岩内港波止場前
合資會社

時計眼鏡販賣
懷中電燈販賣

岩内御鉢内町

諏訪時計店

海陸物產商
清國貿易商

岩内港

金天 中居 儀八

電話(子力)又(子力)
電話(七十二番)

美術小問物卸
舶來雜貨商

北

岩内港御鉢内町

北神喜三郎支店

電話(百六十一番)
電話(七十一番)

白米
雜貨
和洋酒

卸小賣

全佐藤

彌十郎

岩内港橋町

電話 一五一

眼内外科
診療

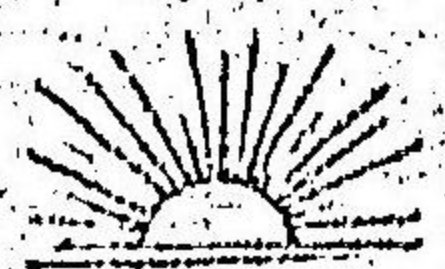
黒澤

醫院

岩内港御鉢内町三井邊

新式
美術

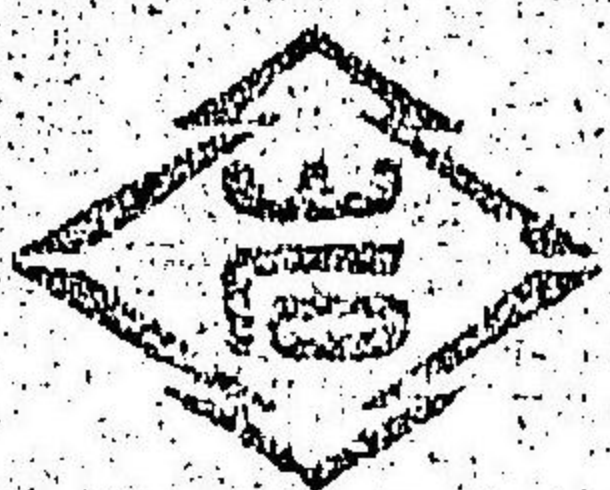
寫眞



日の出寫眞館

岩内町大字御鉢内町百九十一番地

藤森 琢太郎



北海道岩内港

岩内水力電気株式会社

電話 五十九番

米穀荒物卸問屋
海陸物産商

北海道岩内港

申 濱中又左衛門商店

電話(八十八)又(二二)
電話(二七九番)

海陸物産商
並米穀荒物商

申 濱中又吉出張店

電話 三十一番

岩内青橋通

眼科 小兒科
回陽堂醫院

院主 佐々英達

内外科診療

岩内郵便局前

兒玉醫院

電話 十六番

生 並御料理

岩内御鉢内町

澤田

柴谷合名會社製品特約店
ライオンカン石油會社特約店
細野生命保險株式會社代理店
ワバーグロン社代理店
保險株式會社代理店
硫酸肥料株式會社代理店
米穀荒物、砂糖、油、海陸物産商

北海道岩内港

中野久吉商店

電話 (拾番)

北海道岩内港

岩内銀行

電話(十一番)

序

後志國中部の要港として年額五百万圓以上の輸出入ある岩内は如何にして如斯發展をなしたるか、全道民に率先し巨額の資を投し漁港築堤に先鞭を著けたる岩内町民は如何なる動機によりてか、る壯舉を企てたるか、海運の状況陸上の設備と如何に計畫されつゝあるか、水産農産商業工業は如何なる状態にあるか、岩内町現代は如何なる人土に依りて組織されつつあるか、其他地勢沿革人情風俗等は如何以上は世人の齊しく知らんと欲する所たり頃日半酔浪戯君岩内案内を編し將に梓に上さんとするに際り來りて余に序を需む享て之れを讀むに收むる所町の沿革地勢より發達進歩に及ひ添ふる漁農工商に於ける成功家小傳を以てし詳を極め細に涉り大に我意を得たり君の勞や實に鮮明にあらず我岩内を知らんと欲するの人士は本書を繕き始めて了解するを得ん一言を叙し序に代ふ

明治四十三年初夏

霧岳 山下良實識

25-970

43. 8. 26

序

後志國中郡の要港として年額五百万円以上の輸出入ある岩内は如何にして如斯發展を
 遂げたるか、全道民に率先し巨額の資を投し漁港築堤に先鞭を着けたる岩内町民は如
 何なる動機によりてかゝる壯舉を企てたるか、海運の状況陸上の設備と如何に計畫さ
 れつゝあるか、水産農産商業工業は如何なる状態にあるか、岩内町現代は如何なる人
 士に依りて組織されつゝあるか、其他地勢沿革人情風俗等は如何以上は世人の齊しく
 知らんと欲する所たり、頃且半醉浪越君岩内案内を編し將に梓に上さんとするに際り來
 りて余に序を請ひ、之れを讀むに收むる所町の沿革地勢より發達進歩に及び添ふる
 漁農工商に於ける成功家小傳を以てし詳を極め細に涉り大に我意を得たり君の勞や
 實に鮮妙にあらず我岩内を知らんと欲するの人士は本書を繕き始めて了解するを得ん
 一言を叙し序に代ふ

明治四十三年初夏

霧岳 山下良實識

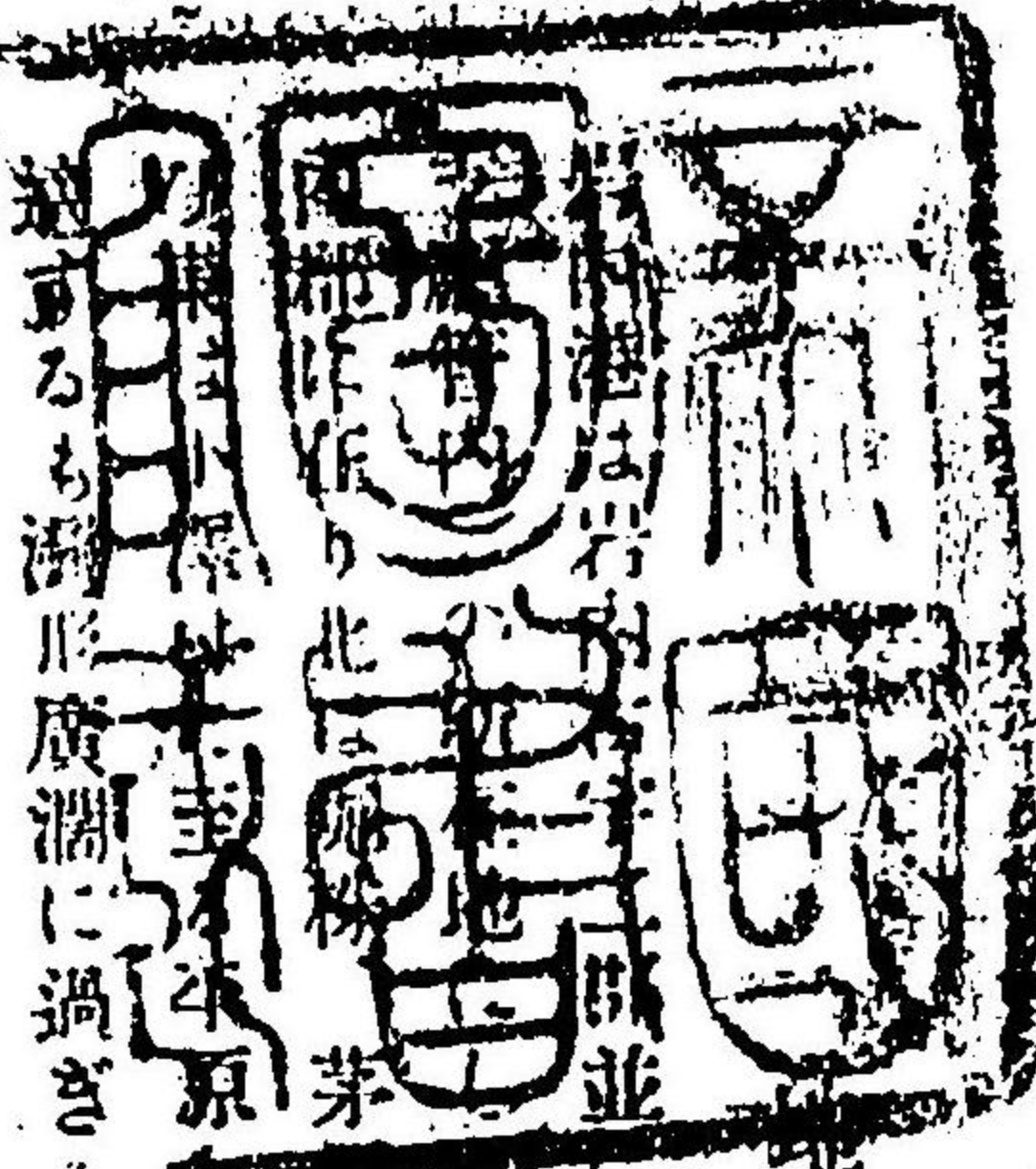
43. 8. 26
 内交

岩内案内目次

一 地勢	一	十二 礦工業	五七
二 沿革	一	十三 森林	五八
三 市街の現況	一二	十四 交通	五九
四 實業の狀態	二三	十五 教育	六三
五 築港沿革概況	一九	十六 寺院	六七
六 金融概況	二五	十七 衛生	七〇
七 銀行と諸會社	四一	十八 慈善事業	七一
八 海運	四八	十九 新聞事業	七三
九 水産	五一	二十 氣象	七三
十 農業と牧畜	五五	廿一 岩内統計一斑	七五
十一 養蠶	五六	其他雜錄	

岩内港

地勢



膽振國虻田郡の一部俱知安を管轄せる舊岩内支廳（現後志）北緯四十二度五十九分東徑百四十度三十分に位し後志國岩内郡に在り北に海、南に、泊、盆の諸村に對し南は（ボロスブリ）及び雷屯山脈を負ひ、北に、控へ以て一大港灣をなせり灣内は水深く大船巨舶の定繫に堪ふるも灣形廣濶に過ぎざるを以て時々風波の難を免れず

沿革

本道の起原と事歴と就てと確たる資料なく其詳細を知る能くざるも今日まで傳れる史料を考證すれば

本道の起原は遠く十二代景行天皇の 御宇に於りて渡嶋蝦夷の稱ありたりと云ふ三八代神明天皇の四年 阿部比羅夫をして齋田淳代の蝦夷を伐たしむ蝦夷恐懼して降を

請ひ夷人恩荷誠心を以て天朝に奉事せんことを誓ふ此時渡嶋蝦夷を有間濱に聚め酒食を賜ひ諭撫して歸る五年春三月阿部比羅夫復た蝦夷を征服して後方羊蹄を以て政所と爲し且つ郡領なるものを定む四十一代持統天皇の十年渡嶋蝦夷伊奈理武志等に錦袍給緋紺絶袴等の物を賜ふ四十四代元正天皇の養老二年八月乙亥出羽並渡嶋蝦夷八十七人來て馬千匹を貢す四年正月舟嶋津輕司從七位上諸役等六人を誅揚國に遣して其風土を觀察せしむ四十九代光仁天皇の寶龜十一年出羽と數して曰く渡嶋蝦夷久く朝化を懐き貢獻闕かず常今歸俘逆を作す將軍國司宜く意を加へて緩撫せよと以後幾變遷を經六十
 六代一條天皇の時蝦夷亂を作す陸奥の人安倍棟東兵を率ひ海を渡り我て之を平定し倉長を俘虜と爲せり八十二代鳥羽天皇の文治五年藤原泰衡源賴朝と戰て大敗し將に蝦夷は出奔せんとして途に殺さる當時其將士往々蝦夷に逃竄する者あり其洲を渡り嶋中に入るを以ての故に後人之を渡黨と謂へり是時に當り國東の齋安倍貞任五世の孫安藤季信(安東と云ふ即ち下國の祖)賴朝に屬し功ありたれば季信を以て津輕の守護と爲し後之として蝦夷地を管領せしむ降つて南北朝の初め安藤の族貞季代りて津輕を領し藤嶋(津輕の北に在り)に居る正長元年貞季の孫教季兩郡益行に逐はれ嘉吉三年松前に渡り嶋民を撫綏す是を下國氏と爲す此間考証す(史料なし)百三代花園天皇徳享三年若

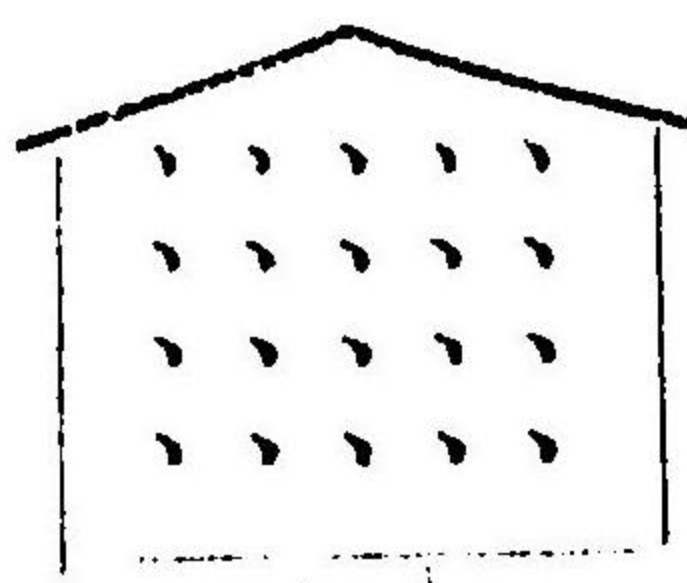
狭の人武田信廣渡航し來りて上ノ國(檜山郡)に居る長祿元年會長胡奢慶允亂を作す諸館擊て之を平く此時信廣功あて上の國崎崎季繁の女婿となり疊を天河に築き勝山と號し崎崎氏を冒す永正十年蝦夷騷亂して諸館を陥る下國氏亡ぶ信廣の子光廣松前に來り大館の壘に入る改めて徳山と名け高廣をして勝山を守らしむ天正十二年秀吉慶高に命じて蝦夷及松前を統轄せしむ慶長十一年福山と稱して氏を松前と改む此時より蝦夷地の統轄全く松前氏に歸するに至れり云ふ本道の起原と此如幾千百餘年の變遷を經たる歴史の斷片あるも岩内に就ては信憑すべきの資料なきを如何せん然れども傳説に依り推究すれば岩内は元とイワラナイと稱する土人の方言(硫黄の住る處の稱)より起り今を距る四百二十三年前の慶長十八年武田氏(即ち松前家)の祖夷地を統轄せしより以後の三百餘年の寶曆二年初めて律令を全道の漁場に布き自治的の制度を採り諸負人を設けたる時より宇和に至る十五年間福山の住人熊野屋與左衛門岩内郡を請負ひ經營する處ありたるも成功を見るに至らざりき文化三年九月露西亞唐太に寇す四年三月幕府の直轄となり又西蝦夷地を収め松前章廣を陸奥の梁川に移封し政廳を松前に遷し松前奉行を置き全道を總管したり文化十年加賀屋太右工門代りて請負となりたるも素志を貫かず文化四年十二月更に東西蝦夷地を松前家の管領に復したるも一藩の獨立經營の至

難なる事情ありたるものと見ゆ仙台、津輕、南部、庄内、會津、秋田の各藩に命じて各地を警護せしめ専ら意を拓地殖民に注ぎ開發の端を啓くに至れり此際國費多端の故を以て各地請負上納金の増額を命じたる時岩内請負額は千四百六拾餘兩となり舊來の二倍強の負擔となりたり文政六年に至り仙北屋仁左衛門請負人となり土人を使役し漁場年來の宿弊を改め千辛萬苦稍や其目的を達せり藩主其成效を賞し七ヶ年一期の成期を以て岩内地方請負を許可せらる此時より漁業出稼の爲め來集するもの年一年に増加し漸やく小村落を形成するに至れり(當時土人男子孳人居住し居れりと傳ふ又た市街なもものは今ハ稻穂崎の前濱通のみなりきと云へり)而して總て物品交換は一に運上家(即ち請負人)之を掌り安に庶民の賣買交換を禁し漁民は悉く二入役と稱へて收穫物の二割乃至一割五分を漁税とし運上家に納め其他公私一般の事を裁斷したるものなれば何事も請負人の指揮命令に待たざるべからざるの境遇にてありたれば請負人の權勢は頗る強大なるものにてありき、安政二年再び幕府の直轄となり函館より奉行を置き竹内下野守行政を掌りてより施政宜きを得其治績の見るべきもの有りき之れより幕府が經營の歩を進め就中力を西海岸の開發に傾注したる時に於て岩内に對する經營施設の多くは安政三年より萬延年間に行はれたり其重なるものを擧ぐれば請負人仁左衛

門に命じ岩内余市間六里二丁二十間の山近及び磯谷越雷屯山道(三里十七丁)間の開鑿を爲さしめ諸人來往の利便を開きたり或は字イソヲノボリ(今の三井岩登)硫黄山の採掘に又は茅沼石炭礦(今の岩内炭礦、右近炭山)の開坑等に着手せり(此時鐵路を布設して運搬の便を計れり之れ日本に於て鐵道布設の始と云ふ)亦た雷屯山峽字ユウナイは岩内と磯谷の中間に位置す且つ温泉ありたるを以て奉行諸役人庶民の來往の便を計り(即ち中憩所として)茲に家屋を新設し大和屋又兵衛と云ふものを土官通行取扱兼家守となせり(今は馬騾遞所として道廳より月額拾五圓を補助せられあり)是等開鑿に就ては仁左衛門の功多大なるものあり特に岩内余市間山道開鑿の功を賞され堀織部正より銀七枚を賜はり且つ左の如き御高札を稻穂峠に建てられたりと

稻穂峠御高札

(高サ一尺五寸 横巾四尺)



此道は松前唐津内町仁左衛門新右衛門技ヶ崎町長左衛門小松町徳兵衛門等が御國恩の爲ておの／＼ちからを合せて安政三年秋さりひらきし也そ乃前は草木生しけり流水道を遮りたま／＼通行のものもいたく難儀せしを今かく心安く往來せし事永久の功績少からずをりてそのよしを往來の諸人に示す

参照 左ノ金額ハ現今ノ通貨ニ換算セシモノナルモ其當時ハ二拾五錢ヲ壹歩トシ壹歩ノ四乗セシモノヲ壹兩ト唱ヘタリ

當時余市及び雷電山道開鑿に要したる經費は左の如し(仁左衛門手記に依る)安政三辰年より四年迄成功

岩内より余市越山伐開經費調

一人夫千六百二十五人

内 譯

字シヨユナイヨリ余市界稻穂時マデ道巾二間道程六里二丁二十間

一金八拾三圓六拾七錢

前入夫雇賃料一人一日錢三百五十文ヲ通貨直シ

一金二十三圓八十九錢

同一人一日白米一升ヲ當時直段石金壹圓四拾七錢カヘ

一金十一圓〇八錢

味噌糞繩ムシロ鐵道具代

合金百拾八圓六拾四錢也

但シ此山道川々敷ケ所是アリ殊ニ路程一里外ハ殘ラス濕地ニテ毎年雨雪ニ道イタミ

丸木柴ハシヲカケカヘ仕直候ヘトモ其修繕費調不詳

安政三辰年ヨリ同五年迄成功

磯谷越雷電山道伐開經費調

但荷別内濱ツメヨリ磯谷塚アソシタ迄道巾二間里程三里十七丁十間

一人夫千五百人

此山中頗ル嶮難受負人ニテ此余市越トモ一時切ヒラキニ付壽都ツメ調役長谷川儀三郎殿出役中、夫、食、仁左衛門ヨリ差出サセ永住人へ右實際説諭イタシ安政三年五月アラ切イタサセシ出人足ノ調如此尤モ其際儀三郎ヨリ賞トシテ米四斗入十五位請負人冥加ツミ米ノ内ヨリ官費ニ入濱ヘツカハシ同時四斗入五拾俵仕入米ヲ以テ則仁左衛門ヨリ現米相渡シ賃米トス

一人夫二百七十八人

安政三年五月受負人雇人ノ人夫

一人夫千四百廿一人

全四年五月ヨリ九月マデ回断人夫

一人夫千百五十三人

全年五月受負人松前福山城トヨリ別ニ雇下シ相沼村久右衛門

十七人組ノ人夫

一人夫九百四十六人

全年五月ヨリ七月下旬マテ字エトコヨリブツフタイ迄一里三

丁ノ間元道ヲステ木ヲ伐リ絶壁ヲ崩シ新規本道相立候雇夫調

ヘ三ノ取市三郎組

合人夫五千二百九十八人

内

千五百人ハ初竹ヤブ荒伐人足
三千七百九十八人本道立人夫

- 一金二拾三圓八拾錢 初村人足ニ渡夫食米四斗入五十俵代金直段石金壹圓拾九錢替
- 一金九拾圓五拾七錢 受負人雇夫二千六百四十五人一人日ニ錢三百五十文ノ賃金調
- 一金卅九圓拾四錢六厘 前雇夫日ニ白米一升ヲ渡ス此合石二十六石四斗五升直段石ニ
付金壹圓四拾八錢替へ
- 一金拾八圓九拾八錢 味噌糞ナハムシロ鐵道具早物代
- 一金七拾三圓〇六錢三厘 福山城下ヨリ雇下シ久右工門十七人組千五百十三人別人數ニ
付一人一日金壹朱宛
- 一金拾七圓〇六錢四厘 前入夫一日ニ白米二升宛合石十二石五斗三升石壹圓四拾八錢替
- 一金拾五圓九拾八錢 味噌糞雜ナハ菴金物炊キ道具マデ代金
- 一金二拾九圓八錢 前入夫往返路費並頭ラ手當トモ
- 合金三百〇八圓六拾八錢也

但此山道後チ年々雨雪及馬足ニアラシ箇所々手入イタシ候へトモ右修繕費ハ不詳
右兩山道總人夫六千九百二十三人

此賃料金四百二拾七圓三拾二錢也

其他道路の開修橋梁の架設等を爲して大に交通の利便を計れり翌四年幕府の定役常見
榮太郎に命じて今の發足村及び觀似村に開墾及び水田の試作を爲しむ之れ岩内ノ於け
る農事開墾の嚆矢にして御手作場の字名稱は此時より起れり又た今の老古美にも數
反の水田を耕し試作せしむる等諸種の經營ありたるを以て岩内は當時に於て既に主要
かる土地として知られ年一年に發達を遂ぐるに至れり明治二年藩政の廢止と同時に関
拓使を置かれ蝦夷地の稱を廢され北海道と改稱し十一ヶ國八十六郡となりたる時岩内
の名稱も茲に確定し請負制度も廢止され内地人土人の別なく自由に漁業を營む事を許
さる此時岩内古宇より出張所を設け行政其他の官部を掌理せり此時郡司たり柴田某現
今の字薄田、清住、八幡通の如きは一面の谷地にして茅蘆繁茂し雨季には小舟を以て來
往したる有様なりき今氏之を憂ひ水源を御鉢内川に探り一小川を開堀せば谷地は變じ
て耕地となりと畫策を立て住民に協議する處ありしもの贊助を表せざるのみなら
ず寧ろ大反抗を招きたるより全氏は一大革斷を以て強制的に大和船の人夫を夫役と爲
し竟に柴田川なるものを開通して橋、鷹登(薄田、八幡通、清住、岩ヶ嶺)の如き街衢を形
成するに至りたりと今七年出張所を岩内開拓分署と改稱し又は勸業獎勵の方針を採り

奨励貸付金規則を設け一般産業の發達を喚起せる爲め岩内郡の如きも稍や見るに足るものありき。十八年蘭人ゲンドをして岩内港の測量をなすしめ築港の議あり。全年より十三年に至る間驛遞病院警察郡役所區務所等を設置し普く民衆の利益を保護し福利の増進を計りて諸種行政機關を設備せり。明治九年の交藤藤直治佐藤勇治二氏唱し野東川の水利を老百美に引用し柴田川に合する疏通工事を施したる結果は現今の如き水田地を耕成したり。全十二年岩橋徹輔開進社なるものを發足村に設置し内地より移住者を募り専ら開墾農事に従事せり。全十六年加賀藩藩主前田利嗣石川縣士族櫻産の爲め起業社なるものを組織し資本金拾萬圓を投じ、多額の士族を前田村に移住せしめ専ら農業に従事せしむ。前田村の稱之れによりて起れり。此れより以後佐竹虎分宿内川の水利を引き西老百美に水田及び畑地數百町歩を拓く等漸次に地方産業の開發増進を計るに至れり。全十五年の廣使置縣(函館札幌根室の三縣)となり。全十九年三縣を廢し北海道廳を置かるゝに至り統一主義を採り拓殖政策を確立せるより。茲に舊來の風習を簡單し面目を一新するに至り。年一年の進歩發達をなして。竟に今日の如き發達なる北海道を實現せり。

岩内も往時より幾多の變遷を経、今日に至り其間多少盛衰消長なきにあらざり。も交

通機關の整備と農商工業の移住者増加し随つて産業の改善振興とにより生産額を増し。次に發達を遂ぐるに至れり。明治三十三年九月特別一級町村制實施せられ自治機關隘はり町是の方針定まりて。茲に面目を改むるに至り。然して付近農村前田幌似野舞納發足と俱知安の開發進歩は直接若くは間接に岩内の發展を促すと共に舊函館鐵道の經營布設は急進的に大發展を爲すべく餘儀なくせしめぬ。

於茲鐵道支線の布設或は築港速成の問題をかりたるも當時の事情は此を希望を満たし。至らずして止みたるに依り鐵道支線の布設に換へ小澤岩内間十一哩二十九鎮の馬車鐵道を布設して僅かに満足する事となり。其他車道の架設、水力電氣事業の經營、農業及び漁業の改善振興等苟も地方の利益を増進すべき經營を見るに至れり。又二十七八年戰役紀念事業として養蠶、植樹の奨励、桑園の造營、産業組合、同業組合の興起及び指導を爲したる結果成績の觀るべきもの有り。尋て戦後の經營事業としては町民多年の宿望たりし岩内築港も愈々明治四十一年度より着手し。洞餘内埋立も既に完成し。次で稻穂崎延長千六百尺の防波堤工事に着手中なりしが本年十月を以て第一防波堤を全部竣工の筈なり。又た北海道十年計畫の豫定雷山開發野東橋を起点磯谷山北尻別尻別川右岸を終点とて海岸を開通する新道は既に實測済なれば此工事に於て愈着手を見るを得。磯

谷壽都間の連絡を得岩内前途の繁榮今より數倍すべし

(三) 市街の現況

市街の現況 年一年お發展の域に在りて現在戸數(四十二年十二月調査)二千七百九十八戸人口二万〇二百三十一人を算す前は海に臨み背後は高臺より東西二十丁南北十町に亘りて一大市街を爲し七箇町に區劃さる御鉢内、橋、稻穂崎、吹上、三嶋、堀江、鷹臺等とす其内最も繁盛なるは御鉢内町にして三井岩雄登礦山事務所岩内炭礦拓殖貯金銀行支店岩内銀行澤口汽船合資岩内物産合名清水台名會社を始め南河藤田乃各旅館其間に介在し其他海陸物産商賣店呉服店料理店軒を並べ出入甚だ頻繁を極む稻穂崎は御鉢内に隣し岩内倉庫會社畑澤倉庫岩内水産漁業組合及び漁業家多し橋町は亦御鉢内の南に位し岩内區裁判所橋小學校北海道銀行支店岩内水力電氣會社二葉岩内の南劇場泉病院各種の商賣數多あり鷹臺町には舊岩内支廳岩内警察署郵便局町役場男女小學校營林區署公証人役場岩内馬車鐵道會社寺院濟生兒玉松村下國日山等の各専門醫院其他諸商店鱗次又た字薄田は遊廓を設く三嶋吹上堀江は稻穂崎の南に連かり一小市街を爲

せ、河川は數條あり御鉢内川、岩内川、柴田川と云ふ

(四) 實業の狀態

岩内は古來より漁業本位の土地として知られ其生産物は殆んど海陸の一種に限られ住民は之れにより生活を營み漁業豊凶は直接に地方の盛衰、消長に關係を有する狀態にして岩内は漁業を主として商業は從たるの觀あり而して當地の商業の起原を尋ねるに今より三十數年前の開拓使時代に於て半官的仲買及び問屋なるものを營める受負人の手により握られ其重なる賣買交換の如きは内地はり渡航し來る大和船との間に行はれ地方の小商賣なるものありたりと雖も唯だ僅かに日用必需品の補足的賣買を爲すに過ぎざるの狀態にてありたれば爲め賣買價格の如きは常に一定の標準なく頗る不規則なるものにてありき然れども世運の進歩發達に伴ひ交通運輸の便開け農工商の移住年々に増加するに隨ひ漸次に一般産業の興振發展を來し舊來の風習は打破され自然に秩序ある賣買取引を見るに至り文明的分業行はれたるは明治十二年以後にして夫より漸く商業なるもの基礎を形成し社會の大勢と地方の必要に迫られ産業組合若くは全業組合等設立せられ全業者の共同の利益を増進せしめ且つ賣買價格の統一を保ちに至れ

り一面には農、礦、漁業の改善進歩を來して益々商業の基礎を鞏固し商業區域を擴大ならしむるに至りぬ而して商業の繁盛に赴くに隨ひ金融機關又は倉庫設備とならざる安泰確的に商取引を爲すに至りて勢運を來せり特に農業の發展は實に驚くべき發展をなして從來唯一の地方財源なる漁業と匹敵すべき産出額を見る而して管内現時の生産力は二百萬圓以上を計上するに至り益々増進すべき趨勢に在りたるも昨歲末方の所謂世界的財界恐慌を來したる爲め此等の影響を受け金融其他少なからざる打破を蒙り稍や衰退の狀を呈せりと雖も財界も漸次に恢復の順境に向ひつゝ、あれば近き將來に於てより以上の發展を爲すべくと信せらるる其商業區域は道外に在つては青森、秋田、佐渡、伏木、直江津、新潟、敦賀、東京、大阪、四日市、神戸、尾の道、馬關等にして道内に在つては小樽、函館、磯谷、岩内、古宇、積丹、虻田郡俱知安、狩太、昆布に及へり然とも目下殆んど竣工の域のある築港の完全と鐵道布設を見るに至れど從來喪失し來りたる損害約二十餘萬圓以上を獲得すべく亦た當港と密接の關係ある附近農村(前田、幌似、犁野舞納、發足等)の發展に伴ひ一層の膨脹を來し其生産額も二百七八拾萬圓以上を計ふるに至るや今より豫想するに難からざるなり今四十二年度の輸出入額及び其一斑を擧れば

輸入 輸出

輸入 輸出

農産物	一七、六二七	三九、五二〇	水産物	九六、二五〇	〇
工業物	〇	三〇九、九七七	礦産物	二六、三三六	一一、四六六
林産物	〇	一五五	雜貨	一、五三、三〇八	一〇、三、七九九
			合計	二、四九、五五六	一、九七、三、八八八

右表の外本道内に輸出せしものは合計百五十四萬七千八百八十八圓にして其種類別如左
 農産物 二六、九七九 水産物 三、九〇三 工業物 三七、〇七七
 雜貨 六、六五五 合計 四九、六六八

尙は二十八年より四十二年に至る五年間の道内外輸出入額は左の如し

	輸出	輸入		輸出	輸入
卅八年	一、六六、五六〇	一、六三、五〇〇	卅九年	一、九七、八二〇	二、五五、〇六六
四十年	二、三〇、六二五	一、八九、九二二	四十二年	一、八二、三四〇	一、〇〇、二四二
四十二年	二、四九、五五五	一、九七、三、八八八			

▲岩内港輸出入貨物

四拾二年度に於ける當港輸出入額は二百四十萬圓内外にして輸出額は二百四十萬圓なり今本道外貨物に就て見るに輸出品としては農産物は豌豆、小麦、蕎麥、馬鈴薯、玉蜀黍、

蕎麥、種子物類、燕麥其他の雜穀海産物は胴、身欠、白子、笹目、搾粕、蝸蝓、鹽鯨、スケ
 ン、棒鮫、生鮫、開鮫、鮫の子、昆布、鹽物は硫黄、石炭其他にして輸入品は白米、玄米、味
 噌、砂糖、清酒、人糞肥料、醬油、白玉粉、燐寸、燐、同表、酢、紙、吳服太物類、小間物類、麥
 酒、素麵、小細工物、蠟燭、白絞油、鐘詰家具、陶器、セメント、自轉車、染料、漆器、度量衡
 器、燒酎、乾物類、茶、鉄器類、同刃物類、藥品類、石油、櫻、苗木、花樹苗、竹竿、其他の雜
 貨にして取引地は主に北陸道の直江津新潟潟伏木敦賀佐渡三國等を始の青森大阪東京秋
 田酒田横濱神戸尾の道兵庫馬關名古屋宇治静岡岡津堺池田小木等なり本道内に於て常港
 より輸出せらるる貨物白米雜穀麥菜鹽搾粕桐鱈白子笹目鮭其他鮮魚鱈干魚玉筋
 魚粕味噌清酒砂糖人造肥料燐寸骨硝子漆器茶白絞油小細工物蠟燭藥品鉄器類素麵吳
 服太物鐘詰其他雜貨等にして輸入品は一般の海産物麥酒紙セメント和傘硝子類家具漆
 器衣類小細工物蠟燭其他の雜貨なるが道内取引地は近郡なる古宇磯谷壽都江差を初め
 として小樽、館南港乃取引盛んにして輸出額四九〇四七二圓輸入額六三三八七八圓な
 り本道内外を通じて輸出額一七三四八八八圓輸入額一六六六六七圓内外なり
 以上は岩内港を経て道内外各地へ輸出入せる概要を今陸路岩内馬車鐵道會社の手
 を經輸出入せる貨物及其運賃及び乗降客並に賃金を計上して参考に供せん

▲明治四十一年度馬鐵會社收入表

乗降	客		貨		乗客賃	貨物賃	計
	乗	降	計	個			
岩内	三、七五二	六、五三九	六、五三九	二、八八八	四、四〇四	三、四〇三	一、八〇一
小澤	二、七九三	五、二八九	七、〇八二	一、三六六	二、七五五	一、三六六	一、三八八
計	六、五四五	一一、八二八	一三、六二一	四、二五四	七、一五九	四、七六九	二、一九三

▲明治四十二年度分

岩内	小澤	計	客		貨		收入金合計
			乗	降	發荷個數	着荷個數	
人員	人員	人員	二、七五二	六、五三九	五九、一九九	一七三、四一七	一八、三六四
賃金	賃金	賃金	六、一六二	五、七三九	三、三三九	三、二八一	一八、三六四
人員	人員	人員	二、七五二	五、二八九	一七、三四七	五九、一九九	一八、三六四
賃金	賃金	賃金	五、七三九	六、一六二	三、一七〇	三、二三一	一八、三六四
人員	人員	人員	四、七三三	四、七三三	七六、五二六	二二二、五七六	三六、七九二
賃金	賃金	賃金	二、九〇〇	一一、八九〇	六、四九五	六、四九五	三六、七九二

備考 馬鐵以外、駄馬若くは荷馬車を以て、俱知安狩太方面間輸出入貨物は四十、四十年一度ありては馬鉄調査表總高の約二倍以上の輸出入あるへさる、具体的の調査は成し難きも大要左の理由に基くからん

一 甲商店より狩太又は俱知安方面の乙商店へ直接に運搬し積卸し積替及び小澤俱知安狩太等の各停車場より更に乙商店へ運搬の手數と賃金を省くを以て大なる利益あること

二 甲商店より乙商店へ至りたる駄馬又は荷馬車は歸り荷と稱して非常の安價を以て運搬すること

三 狩太俱知安の農家其ものが各自馬を飼養し彼等自身生産せる農産物を直接運搬し岩内各商店に付き物品交換又は販賣するものあること

右等の理由は馬鉄運賃高價にして馬鉄會社が到底駄馬車屋等に競争し能はざるを以て以上の結果を生ずる所以あり

理由

岩内小澤間に於ける鉄道敷設に對しては既に政府に請願せる處にして此際敷地を無償提供するの必要あるに由る(明治四十三年一月十七日議決)

(五) 築港沿革概況

岩内築港の起原、遠く嘉永三年幕府が近海の測量を爲すと同時に岩内港灣の調査を爲したるより始まり、其後明治八年開拓使が蘭人セントに命じし築港の設計をなさしめたることあるも、岩内炭山(茅沼炭礦)の廢止と共に築港計畫を中止するに至れり、又た明治廿一年メークをして港灣を調査測量せしめたるより地方有志をして益々築港の急務を感せしむるに至りたるも、當時岩内の生産力は現今の半數に足らずして尙早の時機に在りき然れども、築港てん(觀念)は須臾も岩内人士の頭腦より去らざりし、爾來三十四年間は主として潛勢力を蓄積せしめ、明治三十四年町會の決議により國費を以て築港完成に就ての意見書を政府に提出したるも容れられず、空しく築港の大希望を抱ひて四五年を経過せるが交通運輸機關の整備と農、商、漁業等の改良發達とにより一年お發展を來すに至り、卅六年道廳が漁港設備調査會なるものを設け、本道主要なる港灣の調査を爲したる結果、岩内町民が更らに漁港として之れが速成を成さんと町會の決議を経て道廳に稟請を爲したるに、道廳の方針は漁港としての港灣修築は其地方の獨立經營を爲すべきものとの指示を受けたるも、築港費に充つべき財源ならより其財源の探求に亦

た兩三年を費せり全三十八年八月の交時の支應長山田有斌、町長三上常和、地方有志橋本清吉齊藤作藏本間勘次郎諸氏が熱心調査の末雷電入會漁場の解除を爲して之れが財源を求むるより他に方法なしと尙ほ調査に調査を重ね此旨を申請し三十九年八月に至り断然雷電入會漁場を解除し三十一ヶ統の鮭建網漁場を特設し表面上岩内漁業組合に附與し其附與の實質は即ち岩内漁港修築費の財源となりたるものなり該漁場貸賃料の収入より毎年壹万五千圓以内を岩内町に提供することとなりて爰に始めて一の財源を得るに至りたるより更に地方費補助と起債方法に依りて築港の完成をなさんと議一決せるを以て築港費支辨法と設計方法を調製し三十九年十一月道廳地方費補助と起工許可の請願を爲す全時に一面道會に向ひて補助通過を計らん爲め山田支應長佐藤一課長三上町長、一柳道會議員、橋本、本間(勘)丸山岩内新報社長の諸氏出陣の上熱心奔走の結果竟に道會の容る處となり昨年より向六箇年間に十萬五千圓を補助を受るととなりて多年岩内港民が希望せる築港の大事業に着手するの運びに至りたるは山田前支應長初め右諸氏乃熱心盡力に依る其功多謝せざるべからず

築港事業も如此經過によりて其成效を見るに至り町民が滿腔の誠意を以て其成功を祝したるよ不拘四十年新春早々端な、濱中埋立問題に對し紛紜を惹起し埋立派、非埋立

派なるもの、二派を生じ互に論難攻撃至らざるかく竟に三上町長として其職を去らしめ岩内支應一課長佐藤浩氣か町長職務管掌者となり此の紛擾の解決を告げざるに先つ起債認可に關する重要件を帯び上京數月漸やく起債の認可を得て歸岩せり而して久しく解決を告げざりし埋立前後問題は設計の如く埋立をなす更らに稻穂崎に別工場設置するることとなりて兩派妥協を遂げ圓滿に局を結ぶに至れりと雖も此の紛擾は儘かに岩内發達史上に一汚点を印せりと云ふべし

附記 岩内築港の成立と其財源たる入會漁場開放より道會通過、補助全議決に至る迄の經過に就てと永く岩内人士の記憶に残すべきは時の山田前支應長三上前町長一柳道會議員、町會議員橋本清吉、本間勘次郎、本間玄契、手塚貞、丸山浪彌の諸氏及び内に蕭何の任に當りたる町會議員齊藤作藏君築港起債問題の爲め上京斡旋せる佐藤管掌町長等は特筆大筆するの價値あるべきを信ずると共に雷電漁場開放と岩内部漁業組合へ認可されたりと雖も其内容は岩内築港の財源に充つる爲め認可されたるものなるを忘るべからず

▲岩内漁港設計摘要

本港修築工事は左の諸工事より成るものとす

第一 西防波堤工事
 第二 北防波堤工事
 第三 浚深及棧橋工事

以上三工事中西防波堤工事は緊要工事にして北防波堤は防沙を兼ね其必要を感ずるも北防波堤完成後漂沙の移動及港内埋没の程度を探究したる後施設するも敢て遅きに非ざるべく第三工事の如きは目下尙其必要を認めざるより西防波堤に着工す同堤の位置は稻穂崎の一端に起り北十二度三十分東に向ひ千六百尺を築設するものにして港内被覆を受くる面積は約拾三万坪とす
 防波堤の構造は陸地より遠近深淺及波濤衝突の強弱にとり甲乙丙丁戊の五部に分ち各部の設計を異にせり

一 甲部は陸地接近の部分延長三百五十八尺にして左右勾配七分五厘、間知石を最も堅牢に積み之を干潮面上六尺に至らしめ堤巾を十八尺となし表面に張石を施し中間には割栗石を填充して潮面上間知石の後面及び張石には裏込コンクリートを充實し且合端にはモルターを詰込むものとす

一 乙部は甲部に續き延長百八十尺にして地盤に捨石を施し充分沈下固定せしめ此上

中間四尺の間隔を保ち左右に重量十二噸の塊混凝土二層を積疊し以て干潮面上三尺に至らしめ割栗石を中詰とし上部には三尺乃至三尺七寸五分の場所詰混凝土を施すものとす

場所詰には所々に息抜口を設け波浪襲撃の際堤心中に生ずる壓搾空氣を排除せしむ
 一 丙部は延長二百十六尺にして捨石を以て地盤を均せ堤巾二十尺に混凝土塊三層を積み頭部には場所詰を施すこと乙部の如し

一 丁部は延長三百六十尺堤巾二十二尺にして堤頂に場所詰を施すこと前の如し

一 戊部は四百四十尺にして水深く波浪の衝に當るを以て堤巾を二十四尺に擴め捨石上混凝土は深淺に應じ五層乃至六層に積疊し頂上には厚さ五尺の場所詰を一帶に施すものとす

一 堤頭は將來防波堤の延長を期し且つ施工上の便宜を計り長さ四十二尺巾四十二尺の角形となし乙部同様捨石を以て基礎とし此上に六層の塊を積み堤頭には場所詰を施し背部には階段を設け以て昇降に便す

一 港燈は堤頭中央に建設し悉く鉄製となし燈火の高さ干潮面上三十五尺となす

工場は御鉢内町字濱中海濱に約七千五百坪を埋立て敷地となす混凝土は重量十二噸乃

至二十六噸の各種にして其數合計三千六百三十六箇とす其配合と大抵左の比例を以て調和し搗固法を以て製造す

セメント 一、〇 火山灰 〇、八一 砂 二、 砂利 二、

碎石 二、 淡水 全量の一割二分内外

本工事は着手より竣工迄四ヶ年を費し其工費豫算は左の如し

一金六拾五万三千六百五拾六圓二拾錢

工事 總 額

内 譯

金三万六千九百圓 工事監督費

金三拾八万六千九百九拾七圓二拾錢 防波堤費

金拾四万六千六百三拾圓 機械器具費

金五万八千九百二拾九圓 工場設備費

金參 万 圓 豫 備 費

▲岩内漁港修築費の起債

岩内漁港修築費と最初卅年起債五拾四万圓の豫算なりしを四十年以内務大藏兩省に於て之を變更しセヶ年起債四拾八万圓となして許可を與へられたるも其後利率の關係上變

更申請する處あり其許可額と四拾七万四千五百圓償還期限は据置三ヶ年を除き一七ヶ年に短縮せられたり四十年度より四十六年度に至る七ヶ年間地方費補助費拾五万圓四十年度より六十年度に至る二十一年間岩内漁業組合より贈與する三十一万五千圓及び町税補充費三十六万六千三百圓基本財産收入繰入額七万五千八百六十圓二十六錢埋立地貸付地十六万五千五百圓不用物件賣却代二万六千圓を以てせらるべきものにして其負債は株式会社北海道拓殖銀行より年利九厘を以て借入れ若くは借入中に属するものにして其償還年割額は左の如し

四十四年度	四六、五六、一〇九九	四十五年度	二四、七九、八〇一五
四十六年度	二七、〇二九、九八	四十七年度	一四、四七五、一〇
四十八年度	一五、七五六、六〇	四十九年度	一七、一七四、一〇
五十年度	一八、七一九、七八	五十一年度	二〇、四〇四、五五
五十二年度	二二、二四〇、九六	五十三年度	二四、二四二、六五
五十四年度	二六、四二四、四九	五十五年度	二八、八〇二、六九
五十六年度	三一、三九四、九四	五十七年度	三四、三二〇、四八
五十八年度	三七、三〇〇、三二	五十九年度	四〇、六五七、三五

六十年度 四四、三二六、四一

備考 拓銀借入契約金四拾七万余圓の内拾五万六千四百余圓は未だ借入せず

町財政乃都台豫定の償還を縮少し又は低利借替を爲すことを得

築港工事一部設計變更の結果四十二年度に於て機械費其他に於て九万六千圓の起債増額の必要起り内務大臣向大臣に申請認可を得左の年限より償還を命ずるものとす右金額は拓殖銀行の手を經低利基金より借入れたるものにて利率は年六歩五厘なり

四十四年度	三七、一七九、五二	四十五年度	三、三八六、一九
四十六年度	三、六六〇、二九	四十七年度	三、八四〇、七〇
四十八年度	四、〇九〇、三五	四十九年度	四、三五六、二三
五十年度	四、六三九、三七	五十一年度	四、九四〇、九三
五十二年度	五、二六〇、〇九	五十三年度	五、六〇四、一三
五十四年度	五、九六八、四〇	五十五年度	六、三五六、三四
五十六年度	六、七六九、四七		

▲岩内築港防波堤延長

本港の歴史修築の沿革等は今更ら如説の要なきも將に本年を以て竣功を告げんとす

第一期工事を繼承し第二期設計の施行時代に到達せんとは岩内町民の素志にして之が端緒を開かんとする念慮は寤寐の間にも忘却せざる所なり冀くは江湖諸彦に於ても岩内港視察の場合には同時に此至要問題に對しても亦一顧を吝まれざらんことを切望に堪へず

抑も第一期工事は港灣の地勢及本港將來の發達に稽へ圖上明示の如く稻穂崎の一端に起り北東に向ひ延長壹千六百尺(貳百六拾六間)餘の防波堤を築造せしと御針内町海濱地及水面に於ても約壹万坪の埋立を施行したるものにして之に要せし工事費六拾五万圓起業年度より竣工年度に至る四箇年間に於ける町債利子拾万圓合計金七拾五万圓の内北海道地方費補助金拾万五千圓を差引殘額六拾四万五千圓は全然岩内町民の負擔に屬し實に向後拾七箇年に涉り元利償還の責務を負へり

第二期設計に在て既設西防波堤を延長し且つ之に對峙し北防波兼防砂堤を施行せんとするものにて就中西堤延長を以し緊急要務とす北堤は古宇半嶋に遮斷せられ強烈なる風波を生ずることなきに依り暫く之を後年に譲り敢て遅しとせざるも既設西堤のみにては西北風に於ける波濤防遏の効果比較的薄弱たるを免れざるがゆへに更右方に屈折し壹千尺(壹百六拾六間餘)を延長すれば港内被覆面積約十七万坪に達し茲に初

めて西堤を完璧ならしめ防波の威力を完全に發揮するものと謂ふを得へし之が所要工事の概算約壹百万圓を計上すと雖も斯かる巨額の資金は最早岩内町の孤方を以て到底支辨し難き所なれば該事業を國庫に請願し有終の美を濟さんことを庶幾ふものなり而かも岩内町は獨り延長工事を國庫に求めて無爲ならんとするものにあらす港内の浚渫は最先着手を爲し築港の目的に添はざるへからす水道の施設も亦忽緒に付するを得ず其他海岸の整備と云ひ道路の改修と云ひ本港の發展に應じて漸次經營を要するもの多々あり如今函館間鐵道岩内支線は鐵道院に於て施行採納の上明年を以て開通せられんとする機運に際會し輻湊貨物の劇増と共に小樽港の吞吐に餘る所のものも亦副港たる地位を有する本港に於て集散せらるゝに至るべく愈々町營諸設備の急施と同時に西堤延長の必要を感ずること一層劃切なるを覺ゆへま

之を要するに我岩内町の危衰は一つに築港の成否と關繫す夫れ海上の利權を収め資を貿易に求めば繁榮の域に達すること期して待つ可し況んや魚介群居、海濱發生し天賦の産物極めて豊富を占むる土地なるよ於てをや苟かに膽振に於ける平原開拓の資源地として之が發達に努め又北海に於ける遠洋漁業の根據地として之が啓發に任せんとする所以のものは管に一地方の福利を圖るに止まらず國益増進の一端たるものゝを推

信すればかり幸に識者の深甚なる同情を得て第二期設計遂行の迅速ならんことを至囑して歎ざる也

來る二十七議會開會に先づ當町有志は之を延長の請願を爲さん爲め左の意味により町民大多數の調印を求め内務大臣貴衆兩院議長北海道長官等に請願する處あらんとす

北海道岩内港防波堤延長に關する請願

岩内港は北緯四十二度五十九分東經百四十度三十分に位し後志國岩内郡に在り小樽港を距ること七十海里函館港を距ること百七十海里にして西面は日本海に位み北は古宇半島の神威岬に對し南は雷電一帶の山脈を負ひ東方に膽振の平原を控へ一大港灣を形成す灣内水深く大船巨船の出入碇繋に適すと雖も灣形廣濶に過ぐるを以て時々風波の難あるを免れず本港の沿革は歴史を按ずると齋明天皇乃御宇阿部比羅夫をして北夷を征せしめ覇府をしりべしに置くとあるに依り夙く既に王化に浴し享徳三年武田氏の蝦夷地を統ふるや寶曆二年廣く全道の漁場に律令を布き岩内古宇地方の請負人を定む於茲乎燈烟瘴雨の地始めて邦人の漁村部落を形成するに至り文化四年幕府の直轄に移り明治二年に及んで開拓使の管轄に屬せり而して岩、宇兩郡の沿海二十有餘里の地を北海道中魚族豊富なる最良漁場にして

毎年鯉、鮒、鮭、鱒等主要漁獲物の價格百五拾万円を超へ鯉、烏賊、海鼠、河豚、雲丹、鮑、昆布等の副産物に於ても亦貳拾万円を下らず將又膽振の平原は着々拓殖の實を挙げ其產出額は年一年増加の趨勢を示し駭々乎として停止するところを知らず加之茅沼炭礦、岩雄登硫黃、國富銅鑛等の有るありて之に對する輸出入價格約參百萬圓に達すへきを以て是等海陸諸貨物の集散地たる本港の吞吐する總價額は現時優に五百萬圓を超過し尙且つ長足進歩の状態を持續して愈々歇まざるものあれば上記の倍額即ち壹千萬圓に達することも蓋し十年を出ざるや昭なりとす

岩内町は本道西海岸中嶺、樽間に於て小樽に亞ぐ商業殷盛の市街地にして廣袤東西一里南北二十町に亘り戸數三千人口二萬を有し背後には頗る宏漠たる地積を存するが故に將來の發展に伴ふ幾多諸計畫、充用するも聊か不足を告ぐることもなき餘裕を有す而して本町が築港經費と其由來する所造く嘉永三年幕府の近海測量を爲すに同時、岩内港灣を調査せし際に萌芽を發生し明治八年開拓使の蘭入ゲンに命し築港設計を爲さしめ二十一年再び米人メークをして調査測量を爲さしめめたるより漸次住民の腦裡に刻銘せられつつ深く潛勢力を蓄積し一度三十四年中道廳技師の設計成りしも財源之に伴はず空しく機運の熟するを俟つこと多年適

き戦後國運の發展に鑑み道政獎勵の趣旨に基き町民奮起し遂に三十九年に於ける中道廳技師の更新設計に依據し第一期工事遂行の目的を確立し明治四十年度乃至四十三年度繼續事業とし地方費補助の指令を得資を得債に當り四十年九月を以て初めて實地の起工を爲したり爾來萬難を排除し着々工事の進捗を計り閏歷四星霜今や所期の西防波堤延長千六百尺の功を竣ふるも日隄の間に迫まれり之に對せし工事費六拾五萬圓四箇年間に於ける町債利子拾五萬圓合計金七拾五萬圓の内地方費補助金十萬五千圓を差引殘額を全然岩内町民の負擔に屬し向後十七箇年に拂り元利償還の責務を負ふものなり

第二期設計に在つては既設西防波堤を延長し且つ之に對峙し北防波堤兼用防砂堤を施行するものにして就中西堤延長を以て緊要事とす此堤は古宇半嶋に遮らるる爲め強烈なる風波を生ずることなきに依り後年廻り散り進しとせざるも第一期工事のみにては西北風に於ける波濤防遏の効果薄弱なるを免れざるが故に更に一千尺を延長し西防波堤を空壁からしめ然る後初めて築港の効力を發揮するものと謂ふを得べく之が所費工費概算約一百万圓を計上するも雖も斯かる巨額の資金は最早岩内町の孤力を以てし能く支持し得る所にあらざれば該事業を國費支辨に

仰ぎ以て有終の美を濟さんことを庶幾ふ所以なり

然りと雖も岩内町は獨り延長工事の施行を國庫に求めて無爲に安せんとするものにあらず港内の浚渫は最先急務に屬し水道の施設も亦忽緒に付すべからず其他海岸の整理と云ひ道路の改修と云ひ本港の發展に應じて漸次經營を要するもの尠少ならず今や幸に函樽間鐵道岩内支線は鐵道院に於て施行の義を採納せられたれば遅くも明年を以て其開通を見るに至るべきことと確信す之か海陸連絡を全ふする曉には裝漕貨物を劇増すると共に小樽港の吞吐に餘る所のものも亦副港たる地位を有する本港に於て集散せられ從て漁船の來往頻繁を加へければ一面に於し町經營に係る諸設備の急施を要するもの續出すると同時に一面には益々西防波堤延長の必要を感ずるものと一層劃切なるを覺ゆへし冀くば本町が敢て多大の負擔を辭せず卒先漁港修築工事に着手し一意國益の増進を企圖せる苦衷を諒とし速に願書貫徹相成候様御詮議被成下度地方有志者一同運署を以て此段請願仕候也

明治四十三年 月 日

▲鐵道布設と期成同盟會

岩内鐵道期成同盟會は明治四十二年五月の創立にして其目的は岩内築港完成の曉に於

て海陸連絡の必要上岩内港に連絡すべき舊北鉄線の支線を國費を以て速成敷設するを目的とし今會には會長一名副會長一名評議員四十名幹事一名を選舉せり

- 會長山下良實 副會長一柳平太郎 評議員伊東敬 林貞助 本間勘次郎 堀江爲治
- 本間作平 大嶋順兵衛 大岩虎吉 若松潮陵 上嶋徹 角林藏 田原彌三吉 浪越重隆 梅澤六兵衛 梅澤榮之助 丸山浪彌 築瀬拾次郎 松浦嶋次郎 齋藤作親
- 三上常和 坂本六兵衛 若狹岩藏 西尾清太郎 藤田幸太郎 卯尾治三郎 勝峰金治 栗林國太郎 佐藤彌十郎 北友長之助 小森留吉 橋本清吉 中居儀八 澤口良藏 大井昌次郎 長濱彦次郎 清水仁八 川向榮太郎 濱谷兼太郎 武井政治 吉田寛治 谷口久松 幹事道澤敬藏

以上の諸氏を以て組織し昨冬以來淺羽、東兩代議士に依頼し本間勘次郎も山浪彌堀江爲治の三氏を上京せしめの運動に従事せしむると今時 岩内町會に於ても岩内小澤間支線鐵道布設の急務を認め全會一致を以て左の意味の請願書を其筋へ提出した。當局に於ても請願の趣旨を認められ本年六月岩、小間の會測に従事せられたれば近き將來に於て海陸連絡の大武器たる鐵道の布設を見るに至るや必然たるへし

岩内小澤間國有鐵道施設の義、付請願

吾が岩内は本道西海岸中函館小樽に近く重要な港灣として多額の貨物を集散吞吐するの地利を有せるのみならず漁獲物豊富にまて人為的施設に待つもの一に吐足らず就中津灣廣瀨にして船泊乃碇繋安全ならざると陸上に於ける運輸交通の不便なるにあり故に本町は奮起之れか振興策として港灣修築の計畫を建て工事は其一部を地方費に仰きたるの外獨力之れを負擔經營し既に四十年中に工を起し來る四十三年度を以て竣工すべく目下銳意進行中に属す是れ畢竟地方の開發を促進し國利の増進を企圖するの熱烈なるに外ならず然れども津灣の修築は唯一部交通の途を開きたるに過ぎずして之れに伴ふ陸上乃連絡機關備ふるにあらざれば鳥の一翼なきに飛揚せんことを望むの憾あり従つて鐵道敷設の急務を認むるも如何せん財力之れを許さず實に本町の不利とする處たるのみならず亦た國家將來の富源として矚目せらるゝの膽振原野の開發進捗上至大の關係を有せずはならず本町の現状既に如斯加ふるに本町より小澤驛に至る線路たる平坦砥の至く一の幌似川横流せるのみ工事の易々たるに幸に野村技監の親しく視察せられたる處たり故に本町は岩内馬車鐵道會社を買収し現に全社の占有に屬する線路と勿論其他必要の敷地と全部之を寄付せんとす仰き願くと閣下の明鑑に依り町民の微衷を諒し速に

敷設せられんことを別紙本町會の議決書相添へ此段請願候也

明治四十二年一月三十日

岩内町長 山下良實

鐵道院總裁男爵藤新平殿

岩内町會決議書

本町より小澤驛に至る國有鐵道敷設の速成を期せん爲め之れに要する敷地全部を政府に無償提供せんとす

(六) 金融概況

金融の狀態と自然的人意的社會經濟の變遷に於て一張一弛を免れずと雖も部分的地方の金融は地方特殊の事情に左右せられ直ちに大勢と步調を一にし難きは白明也岩内の如き工業と殆ど論ずるに足らず農作物の收益一年卅余万圓を算すると雖も春來鯉漁獲の多少によりて一年の計を卜するに足るものとす從て金融の如きも亦然り例年十二月初旬より漁業準備資金の需要起り金利昂騰市中金融の逼迫其極に達し貸借利率の高底等何等問ふ處に非ず五月に至り右資金の回收を見る海産貨物身欠肥料期は五月以降七月末に亘り越中越前越後京坂尾の道青森方面に輸出荷爲替貸出あり五月中旬より六月下

旬に亘り商内活氣を呈し銀行業者の特に繁忙時期と爲す八月以降菜種豌豆小麦等の雜穀出廻し際し多少金融繁忙なれども未だ金利の高低を左右するに至らず輸入物は越後越中酒田より米を第一とし其他日用雜貨品也右は一般的概括状態にして此間多少曲折なきに非ず要するに海産農産共に商業地として當道稀々存する好望なる地域なりと雖も未だ純然たる漁業地の體裁を毫も脱せざるは鯨業の厚薄により銀行預金變化の之に伴ふは最も顯著なる事例と支尙幾多製造販賣其改良を要する点多々なるは勿論不確定なる漁業一方の基礎は決して岩内白年の大計に非ず近く漁港完成鐵道開通後の利用功望の術策如何によりて始めて新生活面を刷新するものにして金融機關の如きも茲に至て聊か運用の妙を得ん歟

北海道銀行岩内支店諸統計表

四十一年	▲預金總高	四十二年	▲預金總高
四十二年	金參百四万參千圓	四十一年	金貳百八拾六万壹千圓
四十三年六月迄	金貳百四拾六万八千圓	四十二年	金貳百參拾九万七千圓
四十一年	▲貸付金、割引手形並に當座貸越總高	四十一年	金貳百壹万五千圓

四十三年六月迄	金五拾壹万圓也	四十一年	▲仕向荷爲替取組高
四十一年	金五拾貳万七千圓也	四十二年	金六拾壹万八千圓也
四十三年六月迄	金五拾五万貳千圓	四十一年	▲被仕向荷爲替取立高
四十一年	金四拾六万九千圓	四十二年	金四拾八万壹千圓
四十三年六月迄	金拾七万五千圓	四十一年	▲送金爲替手形取組高
四十一年	金壹百參拾八万七千圓	四十二年	金壹百貳拾壹万六千圓
四十三年六月迄	金五拾四万五千圓	四十一年	▲送金爲替手形支拂高
四十一年	金九拾九万圓也	四十二年	金九拾參万九千圓
四十三年六月迄	金七拾壹万九千圓	▲四十二年六月諸利息歩合	
▲四十二年六月諸利息歩合			

	最高	最低
定期預金	年六分	年五分
當座預金	八厘	〇
小口當座預金	壹錢	〇
別段預金	八厘	〇
割引手形	三錢五錢	貳錢八厘
荷爲替打歩	四錢五厘	參錢八厘

拓殖貯金銀行岩内支店諸勘定取扱高

▲總預金高

四十二年 中 六拾五萬參千參拾八圓五拾四錢貳厘
 四十三年 六月迄 四拾九萬三千五百七拾六圓壹錢
 ▲貸付金、割引手形並に當座貸越總高
 四十二年 中 貳拾五萬三千三百七圓六錢
 四十三年 六月迄 七萬九千六百參拾四圓九拾壹錢

▲荷爲替取組高
 四十二年 中 十三萬六千五百四拾壹圓六拾貳錢
 四十三年 六月迄 八萬八千六百九拾四圓九錢
 ▲被仕向荷爲替手形取立高
 四十二年 中 四千八百三拾六圓五拾七錢
 四十三年 六月迄 七千拾圓貳拾壹錢
 ▲仕向送金爲替高
 四十二年 中 貳拾壹萬九千壹百三圓〇九錢
 四十三年 六月迄 拾一万二千百廿二圓三錢
 ▲送金爲替手形支拂高
 四十二年 中 拾四萬六千六百七拾九圓八拾四錢
 四十三年 六月迄 拾壹萬八千百圓四拾五錢

付記 日本工商銀行改稱岩内銀行は一昨年來休業同様の姿にて本年六月漸く整理の上開業せしを以て同行の分は省略す
 北銀支店、拓殖貯金支店の重なる取引先は左の如し

東京、大坂、京都、新潟、長岡、敦賀、青森、函館、伏木、直江津、酒田、小樽、札幌、岩手、江差、磯谷等主要なり

▲質屋貸金

一年間貸高	同上受戻	同上流れ高	年末現在
口數	口數	口數	口數
金額	金額	金額	金額
明治四十二年 二、七九 二、七九	明治四十二年 二、七九 二、七九	明治四十二年 二、七九 二、七九	明治四十二年 二、七九 二、七九
同四十二年 二、七九 二、七九	同四十二年 二、七九 二、七九	同四十二年 二、七九 二、七九	同四十二年 二、七九 二、七九

▲同上利子

拾圓に對する			壹圓に對する		
最高	最低	平均	最高	最低	平均
明治四十二年 三五	明治四十二年 三五	明治四十二年 三五	明治四十二年 四〇	明治四十二年 四〇	明治四十二年 四〇
同四十二年 三五	同四十二年 三五	同四十二年 三五	同四十二年 四〇	同四十二年 四〇	同四十二年 四〇

▲倉庫

産業の發達は地方の膨脹發展を來して従て年一年に輸出入の増加を示すに至り之が爲め物資の保管々理と金融の補助機關として倉庫の設備となり商業界に少なからざる利益を與ふ今當港に於ける倉庫業の現況を觀察すれば岩内倉庫、畑澤倉庫の二に過ぎず其容積は前者は二百〇三坪、後者は百五十三坪にして比較的尙ほ幼稚の域に在り當地商業取引の上より打算せば未だ之れを以て満足すること能はず現當の趨勢より觀察すれば築港完成と明年布設に内決せる岩澤間鐵道開通の曉に於ては斯業の發達を促し之が増設を告ぐるの日到來すべきは敢て疑を容れざるなり

(七) 銀行と諸會社

▲岩内支金庫

橋町北海道銀行支店內に設置しありて一切の金庫事務を取扱ひ居れり主任は(北海道銀行岩内支店長岡景命)

▲北海道銀行岩内支店

橋町に在り常町經濟界の機關にして商業の發達と取引の利便を計れり前身は北海道商

業銀行なりしも明治三十九年五月中小樽銀行と合併北海道銀行と改稱せるものなり支店長は(岡景命)

▲ 拓殖貯金銀行岩内支店

同行は御鉢内町に在り北海道拓殖銀行監督の下に經營せる當町唯一の貯蓄機關にして亦普通銀行の事務を兼ねる商界の一機關なり支店長は(川中三郎外五名)

▲ 岩内銀行

明治三十九年七月二日御鉢内町舊小樽銀行跡に支店を設け開業せるが四十一年九月十五日本店を東京に移せしが本年總會の結果支店を本店となし頭取に川台芳次郎支配人磯部喜藏營業主任をり外に地方有力家四五相談役となり本年五月營業を開始せり

▲ 岩内倉庫合資會社

稻穂輪町に在り一般倉庫業を營み倉預り証を發行して金融の利便を計れり代表者社員は(橋本清吉)

▲ 畑澤倉庫

御鉢内町にあり岩内倉庫會社と同一業務をなし代表者は(畑澤要吉)

▲ 三井台名會社岩雄登礦山事務所

御鉢内町「五五」に在り明治廿六年六月設立登記を爲しありと雖も(商法實施による登記)其以前より開設せられ専ら硫黄採掘及び製煉事業に従事せり該礦山は幕府時代竹内下野守か時の請負人仁左衛門に命じて開坑せしめたるにむり起れるものによて本道硫黄坑採掘の嚆矢なり夫れより三井家の手に歸し種々設備を行ひ業務を擴張し今日の盛大を見るに至りたり而して從來の生産額八千噸にては需用を充すこと能とざるか一層規模を大にせん爲め四十年七月金拾万圓を投じ前田村字宿内川の水利用を引用し元山より前田村字宿内間(四万六千八百尺)に鐵索架設工事を行ひたる結果從來産出額の殆んど二倍約壹万六千噸を算するに至れりと云ふ使用人夫一日約五百人内外にして同社資本金は二百万圓にして全部の拂込を了しあり當事務所の資金は共進にて出資社員は(三井一家)にして無限責任なり代表社員は三井三郎助氏當事務所と礦山主事大岩寅吉次席梅田映、井上樞太郎荒川又次郎本郷彦二大平丹次野口高藏長山一郎生田角次郎遊佐可也小田鐘治村山政治等なり(口繪参照)

▲ 岩内炭礦

同炭山と後志國古宇郡茅沼村海濱より約二十町の處にありて岩内港を距る陸路僅に三里海路二里にして運輸の便なること北海道中殆んど其比を見ざる處なり

該炭山は安政三年漁夫の發見に係り爾來松前藩主に於て年々藩吏を派遣し試掘せしめたるに文久元年に至り幕府米人「ブレイキ」及「ボンベリ」の二氏を聘し本道の礦物調査の結果大に有望のものとなり文久三年幕府愈々炭山開採の議を決し大嶋惣左衛門高任なる人を派遣し試採せしめ年々多少の炭を見たるも慶應元年に至り一時中止せり其後開拓使に於て米人「ライマン」を聘し炭量調査の結果大に豊富なるを以て英米兩國より鐵道及運炭車を購入し海濱より元山まで約二十町の間三十磅レールを布設し自然の勾配を利用し動力を用はずして海濱に搬出するの裝置を爲し煤田開採事務所を置き盛に開坑し從事せり是れ我國鐵道の嚆矢とす

明治十六年に至り煤田開採事務所廢止せられ同二十三年徳田與三郎なる者拂下を受け次て同二十六年松岡讓之を讓受け銳意諸般の設備に勉め既設の鐵道より宇古舖に至る約壹哩の間更に小軌道を布設し坑道を修理し撰炭場を設け又新に九尺余の新坑を開鑿し大に斯業の發展を企圖せり

明治三十二年岩内町有志炭礦合資會社を設立し該炭山を讓受け更に大軌道六百間を延長し玉川坑口に達す其他新に大吉坑を開鑿し二百間の小軌道を布設し及新式撰炭場を造り又岩内茅沼に四棟の貯炭倉庫を設置し本店を岩内支店を茅沼に設け大に規模の擴張を圖れり同四十三年五月尾張國知多郡半田河合彌平之を讓受け試験の結果玉川坑粉炭の「コークス」原料として高嶋炭に亞く良品なることを發見し大に販路を擴張し茅沼支店を本店とし更に坑夫を増員し目下盛に採炭しつつあり

因に記す該炭山は三鑛區にして總坪數六十一万六千八百九十一坪坑道は大吉玉川の二坑道にして何れも炭層二尺五寸より十二尺のもの六層炭層頗る豊富にして玉川新坑最も佳良なりと云ふ

▲岩内馬車鐵道株式會社

同社組織の動機は三十六年舊函樽鐵道の布設に始まり地方交通運輸の利便を啓かん爲めに該鐵道支線を岩内町に延長布設を北鐵會社に交渉せるも同社當時の事情は此の要求を容る事能はず地方有志の希望は遂に貫徹するに至らざりき於茲、更に協議の上小澤岩内間に馬車鐵道を布設するの事となり明治三十七年七月五日六万圓の株式を以て一會社を組織し三十七年十一月線路の布設を見るに至りて交通運輸の便稍や開けたりと雖も時恰も日露戰役中にて一般經濟界は不振を極めたる時に際したれば其間發起有志の苦心慘愴實に筆紙に盡す能はざるの状態なりき當時同社が僅に十五七臺の貨車と六臺の客車を有し業務を開始したりと雖も尙ほ種々の備設經營を要するの創始時代に

てありたれば之れが爲めに、兩年間は少なからざる損失を招き一時は經營難を唱ふるに至りたるも克く困難を處し三十九年末拂株の拂込みを爲さしめ尙ほ設備の改善と社務の整理を計り漸やく收支償ふ程度に達せり四十年五月更らに社債參方圓を募集し鷹島町舊病院跡に事務所を新築し線路を岩内橋に延長せるが本年六月鷹島町線を布設して益々事業の發展を計るに至れり現今は貨車卅臺客車更に十數臺を有し其物資の運輸力は一日平均百廿噸にして夏秋兩期は毎日往復各六回の回轉を爲し其収入一日百圓内外を計上す本年上半期の決算によれば未だ利益の配當を爲さざるも一切の經費並に社債の利子を支拂ふに餘裕を見るに至れり同社の創立は當町に於ける諸事業勃興の先驅となり且つ地方交通運輸機關として前途多望の域に在り社長一柳平太郎事務員葛西仁作

▲岩内水力電氣株式會社

同社の發起は明治三十七年十二月にして創立當時は馬鉄會社よりは寧ろ悲劇なる歴史を有せり同社が本道に於ける水力電氣の嚆矢にして其水源は彼の有名なる雷市峠より發する幌内川の鳴神瀧を利用せるものにして最初大地大谷喜久江武内嘉二郎泰若二郎氏が京都才賀電機商會に交渉し協約の結果技師として才賀の理事土木部長三井工學士來岩調査の結果十分の見込あるを以て共同經營の下に株式募集を爲し發起人苦心の裡

に漸やく明治三十八年六月其設立を見るに至り爾來工事に着手し点燈營業を開始せしは卅九年十月なりき以來引續き營業しあるも冬期中結氷の爲め燈火不十分なるを以て昨年來同期中と雖も完全に点火し得ず爲め目下發電所増設中にて新設備の原動は瓦斯發生機にして完成の上は二千燭光を増加する見込なりと目下の点燭數は十燭換算千二百燭にして配當利率は年五朱内外なるも増設機完成の上は優に壹割以上の配當を得る容易なりと謂ふ社長は三井助作取締役は本間重策木村正義川村長四郎野田儀一郎監査役は川浦春吉畑澤吉氏なり支配人小西嘉市

▲清水台名會社

本店は御鉢内町五十四番地に在り明治卅六年五月の設立に係り資金壹万壹千圓にして銅鉄其他金屬製品の賣買を以て營業とす支店は御鉢内町百四十四番地に在り現今千六百五拾圓の積立金を有せり代表社員(清水仁八)

▲共立酒造合資會社

鷹島町に在り明治三十八年八月の設立にして資金は壹万圓酒造を以て營業とす代表社員は(本間重策)

▲澤口汽船合資會社

御銚内町に在り明治四十年二月の設立にして資金は三万円専ら運輸を營業とす現今三千四百五拾圓の積立金を有せり代表社員(澤口庄吉)

▲合資會社橋本回漕店

御銚内町に在り明治四十年十二月の設立にして資金と五千圓専ら貨物運送を營業とす代表社員(吉田清作)

▲岩内物産合名會社

全社の資金は壹万円にして桶谷清與門緒股定治谷孫左門の合名なり四十二年を以て開店せり専ら海陸物産買賣並に委託販賣を主とす代表社員は(桶谷清與門)

▲角中解合資會社

今社は本年の開始にして貨物運送を營業とす代表者は(中川榮三郎)

(八) 海 運

岩内港は兩嶺間ふける一嬰港にして本道西海岸航行の船舶多くは本港に寄港するを例とせり亦た岩内右宇兩郡虻田郡俱知安方面の生産物及び該方面に供給すべき米糧、雜貨類は從來總て本港を經由したるを以て船舶の出入常に頻繁を極め海運業も稍や發

考、供せん

達の域に進み明治二十二年六月岩内汽船會社創立せられ大に地方運輸交通の便を計り益々海運業の發達を來せ全社も業務を擴張し利潤も少なからざりしも三十七八年戰役中一般海運業は戰時の影響を蒙り一時不振の状態に陥りたるも三十八年媾和後多少恢復の兆を呈せりと雖も亦た舊來の盛況に達する能はざるを以て當港の海運業も茲に一頓挫を來し明治三十八年七月全社も任意解散するの不幸を見るに至れり亦た北海道鐵道(四十年七月一日より國有となる)全通と共に從來岩内港を經由したる俱知安小澤方面の輸出入貨物は該鐵道により直接に函館小樽兩港を經由運輸せらるるに至りて二乃至四の輸送力を減殺せられたるを以て商業上受けたる打撃は實に多大なるものなりき加之みならず四十年九月補助航海の廢罷も本港の海運業に少なからざる影響を與へたり而して本港の海運業は從來に比すれば今日は寧ろ退歩の傾向ありと云はざるべからず然れども最近四五年来附近農村は著しく發展し今日に於ては陸産物も二百萬圓以上を算するに至り築港工事も年々進捗の状態に在りて發展の素地を造られつつあり且つ今日と雖も運賃の關係上海運に比するもの多ければ近き將來に於て軌回するに難からざらべしと信ず今四十二年度岩内港に於ける出入船舶數並に乘客下客數を擧げて參

▲四十二年岩内港に於ける出入船舶

定期汽船	出	一七五艘	計	三五〇	噸數	六五三、二〇〇
不定期汽船	出	六九七		一三八四		八、七四〇
帆風船	出	一九九		三八		一〇、四八〇石
日本形船	出	一六六		三三		
定期汽船	入	一七五艘		三五〇		
不定期汽船	入	六九七		一三八四		
帆風船	入	一九九		三八		
日本形船	入	一六六		三三		
輸出入貨物合計				三八七六、五五一個		三三六、〇〇噸

四十二年中當港出入船舶は汽船八百七十二艘噸數三十二万六〇〇噸帆船十九艘四千三百七十噸日本形船十六艘石數五千二百四十石にして前年より比し汽船に於て百四十九艘増加したるも噸數に於ては却て七千七百餘噸を減したり

月別	乗船客	内	下船客	計
一月	一五二八		二三七八	三八九人

水産物は當港に於ける唯一の重要物産にして其産額實に百五六拾万円を算す故に斯業

(九) 水産

二月	一二九	六一五	六四四
三月	二六三	二五八三	二八四六
四月	三〇一	八九一	一一九一
五月	二八七	九一四	一一九一
六月	一六九二	八二三	二五〇九
七月	四九七	一九二	六八二
八月	四二二	三五〇	七六二
九月	三〇七	二〇〇	五〇七
十月	二五五	一三八	三五三
十一月	二五九	二四二	五〇一
十二月	二七二	二二五	四八七
計	四七七九	七三八〇	一一、一五九

の盛衰と獨り當業者の利益に關するのみならず地方の消長に關し延いて國家の富源に至大の關係を有するは敢て喋々を要せざるなり政府は夙に一般水産業の開發を爲すべく三十五年七月より漁業法を制定實施して全國水産業の統一を計り漁撈法及び製造法の改良を企圖し沿岸漁業、遠洋漁業の奨励を爲すに至れり之れが爲め當地水産業の改良發達を喚起し三十六年岩内水産、漁業の兩組合を組織して斯業の改善發展を圖りたるより次第に舊來の面目を一新し其成績の見る可きも乃在り當地に於ける現今の沿岸漁業は實に本道有数の地位に在りて摸範漁區と稱せらる然れども今日の現狀は未だ成效の途上に在るを以て岩内水産組合は幾多の新經營と新設備とを講究し斯業の増進と保護を企圖し一昨三十九年七月更に近海漁業の試験を開始し改良漁船を造り老熟なる教師を招聘し練習生を募集し諸般の準備を整へ積丹郡神居岬より壽都郡辨慶岬に至り沖合漁業を試みしに漁撈法に於て稍や研究を極めたるも魚族の去來に就ては充分なる探檢を遂ぐる能はざるは要するに時化多く充分に試業するの餘地なかりし爲なり然れども實驗調査の結果前途多望なるを認め爾來本年に涉り之れが試験事業に従事せるも未だ充分なる効果を収むに至らずと雖も本年の實驗と研究は歩一步を進めたりと云ふ遠洋漁業の如きは特筆すべきものなきも昨年取嶋内村畑澤豊吉氏が鯨、鮭、鱈、漁業の

目的を以て西洋形帆船取嶋丸、大坂丸の二隻を艦裝し露頭沿海州へ出漁を試みたるもに竟に不成功と終り當地に於ける遠洋漁業の思想は頗る幼稚なり然れども當地に於ける一般水産業の前途はヨリ以上發展の餘地あれば斯業者も奮勵一番自ら進んで新漁場の探檢を爲すと同時に漁撈、製造法の改良を究め益々斯業の發達を計り國富増進を爲さざるべからず

丙に記す岩内漁業組合の如きは濱中に七統、雷電に三十一統の鯨漁場を有し此の賃料一箇年約二万餘圓を収む之れを以て兩組合の經費及び水産事業費を支辨し亦た岩内漁港修築へ一萬五千圓取嶋野小學校基本金とて壹千圓の補助を爲す本道唯一の財源を有する組合なり 因に廳令改正の結果(八十間問題)即ち雷電二十七統を三十一統に變更す財源の増収をなせし背後には東代議士並に時の運動員勝峯金治本間勘次郎齋藤作藏上嶋職の四氏あるを忘るべからず

▲漁業及水産組合沿革

岩内漁業組合は明治三十三年三月十二日の設立にして發起人は故橋本清吉、勘次郎、角林、廣羽、生、鉄、次郎、本、間、玄、契、外、數、名にして理事九名幹事拾二名總代二拾名より組織せられ組合員總數六百拾壹名なり基本金は五千五百五拾六圓七拾七錢三厘にして外に救護費

千圓あり而して四拾二年度の決算は二万六千三百四圓五錢九厘にして収入は漁業料
一万九千七百三拾圓餘定置漁場三拾八箇所あり

又岩内救難組合は漁業組合の事業とて本年二月廿九日指定せられたるも其組織準備
の爲めに救筒月を費して漸く本月十日に開所式を擧られたりしか其組織は監督林貞助
一名組合長木田久藏一名組合副長四名組長三名監視五名救助夫四拾五名にして救助艇
三艘あり其他事業として四拾年度に於て鯨刺網、鮑、海鼠、昆布、日和貝、鮪、石花菜の
専用漁業を農商省に出願せしに此頃漸く技手出張せられ調査済になりければ孰れ不日
其筋より免許せらる可し(理事長は梅澤六兵衛)

岩内水産組合は明治三十六年七月拾六日故橋本清吉、角、本間(勸)本間(玄)羽生鉄次
郎氏乃發起にて翌年一月中設置せられ組長一名副組長一名評議員七名役員拾八名より
組織したるものなり先づ試験事業として鱈詰、薰製鱈、凍藏鱈の製法其他鱈、鮪、鮫、鯉、
月稜鯛釣、スラ漬漁業、秋刀魚漁流網漁業等を試験せしに就中秋刀魚漁は成績良好に
して將來夏漁業として最も有望なるを確めたり其後引續き秋刀魚漁に従事せしに昨年
の如きは漁網僅か七放及び小晒網を使用して秋刀魚八千尾を収獲せり斯の如く秋刀魚
漁の有望なるのみならず本年の如きは秋刀魚網に潑刺たる大鱈數度投網せられ甚だし

きは一網に三百尾を漁獲したるものとあるを以て鱈漁は該組合事業外なれども明年より
は同組合に於ては相當の設備をなして鱈漁を試むる筈なり

又漁業製造品検査設置以來成績良好にして前年迄は獨り昆布のみに止めたりしか本年
よりは魚粕敷の子ども検査する筈にて本年は敢て前年に異ならざるも愈々消應令發布
せられたるを以て明年よりは一層嚴重に該検査を執行するを以て斯業者は今より宜し
く注意を拂ふ可しと因に本年の昆布採取は漸く去廿二日より採取せられ其の収獲未定
なれども昨年の如きは共収獲高千二百石を採取したりと云ふ(理事長は梅澤六兵衛)

(十) 農業と牧畜

岩内町に於ける農業と牧畜は唯だ老古美あるのみなり其作付反別の如きは僅かに畑二
百四十町歩と水田十二町にして之れが收獲の重なるものとみにて六千圓内外に過ぎず
然れども農事専門の戸數六十二戸よりすれば各自が生活に餘ありと云へり牧畜の如き
は安達清吉の老古美第一牧場十萬六千三百八十坪村上元吉の七萬五千五百六十三坪の
二個所にして前者の飼養は牛十八頭後者は馬四頭なりと雖も尙ほ將來に於て増加の設
備を爲し在りと云ふ

(十一) 養蠶

岩内町及び支廳管内各村に於ける養蠶事業の夫れ今日の如く進捗、發達を來すに至りたるは主として戰時中町村の生産力を増進せしめんと山田前支廳長の熱心勸誘に出たる結果なりと云ふべし就中其著しき者と當地在住の愛國婦人會の養蠶事業なりとす明治廿八年四月中愛國婦人會員は別に岩内婦人會なるものを設け一般婦女子に適當せる産業を習習せんと欲し岩内女學校内に共同養蠶飼育を開始し又會員の手藝品展覽會等の開催し當時の利益を擧げて恤兵隊に献金せり夫れより岩内共有財産中より畑壹町六反歩の永久無償貸附と道廳より桑苗を受け桑園事業を起す同年五月十四日會員自ら鋤鍬を採り長官支廳長其他とともに桑苗無償付與を植栽すると同時に紀念園遊會を薄田梅澤別邸内に開催せり其他各町村に蠶業講師を特派し養蠶に關する講話と實地習得をなさしむ等一も缺くる處なかりき而して蠶業の發達に伴ひ品質良否の品評と商人の利益遮斷を防止生産者をして均等の利益を得しめん爲め昨年春製繭の共同販賣法實行したるに其成績頗る佳良にして岩内(發足、小澤兩村と合併)は一升五十七錢五厘俱知安は一升五十六錢五厘に販賣せらるるに至れり本年も種蠶共同飼育場を鷹野町元支廳官舎内に置き岩内町農會の事業にして教師として佐藤豐治氏を聘ま本年六月より

飼育に關する一切の講習を爲せり

▲春 蠶 (四十二年度)

戸數	枚數	收繭量		合計	價額	一枚ニ對スル收繭量
		良繭	玉繭			
岩内町	三〇	五、〇〇	七、五〇	五、三九	五、八九	二〇七
		石	石	石	圓	圓
						八三

(十二) 礦工業

岩内港に於ける礦工業は唯だ僅かに一個人の經營に係る煉瓦、鱈肝油、沃度製造(工業)あるのみ礦業の部類に至つては全く岩内町管外に於て經營せらる然れども其多くは岩内町に會社本店若くは營業出張所を設置し生産の礦物は當港にて集散せらる亦た必需品の供給の如きは經濟上至大の關係あるを以て多く之れを岩内町に仰ぐ其重なるものを與ぐれば三井岩雄發礦山、岩内炭礦、右近炭山事務所、小澤國富礦山(四十年開坑田中平八同銀之助兩氏)等にして何れも將來擴張發展の趨運に在れば之れが爲め將來岩内町受くべき利益は實に多大なるものなるべし其他古宇郡神惠内銀山珊内硫化鉄茅沼金銅茂岩舊三井銅礦試掘及び日下出願中のもの殆んど數十を以て算す之にして盛んに業務

を開始するに至り、なほ従來の産出額五十万圓以上は一躍數倍の増進を見るに至るへし別項國富礦山部を参照すべし

(十三) 森 林

森林の保護經營の如何は一國産業の興廢消長に關するもの頗る多大なるものあるを以て内地各府縣の如きは夙に森林保護經營に就て充分に施設せられあるに反し本道に於ける森林の状態を観察すれば一般に愛林の思想乏しく濫伐の弊に陥り森林の保於護造林經營の講究施設に及ばざりしが偶々卅七八年の時局は本道林業の保護經營の急務を促し各町村一般之れが保護經營を見るに至り道廳に於ても森林經營に重きを置き之れが發展を計らん爲め従來の施設を擴張し全道に營林區署なるものを設け専ら森林の保護と新經營を爲すに至りて數歩を進め當町の如きは卅七年六月始めて造林經營を爲すと乍時に當支廳管内各村も競ふて之れが保護經營を爲したる結果今日は大に見るべきものあり而して當營林分署管内に於ける森林状態を見聞すれば現今の森林面積は約四万町歩にして其蓄積量は二千万尺あり之れを作業により年々十萬尺を伐採利用し得ると云ふ古宇、蛇田、二郡は主として濶葉樹の天然林なるも漁業の盛なる時代に過

伐せられ稍々林相を破壊せられたる個所ありと雖も温帯北部の地としては樹木の生長比較的良好なると以て需用に供して餘あり蛇田郡の如きは平均二割の針葉樹を混し從來斧鉞の人らざる原生林なる故林積も豊富なれば多く良材を産出す其樹林の重なるものはド、マツ、エゾマツ、セン、シコロ、ヤチタモ、ホウ、ナラ、イタヤ、シナ、トチ等なり其經營は五個の事業區に分ち之が四十三の施業班に分ち擇伐法により年々伐採し天然更新に依る尙は將來事業擴張の上善林の計畫ありと云ふ今四十二年度主産物其他の成績を擧げれば主産物一万二千百九十七圓副産物千〇〇四圓等あり

(十四) 交 通

▲道路開鑿

雷屯山道開鑿の急務たるも岩内町多年の宿題にして往來武藤清兵衛安達定吉氏等卒先して其關係地たる磯谷歌棄壽都の有志と協同して専ら斡旋する處ありしも機運の熟せざりし爲め一時之れを黙止するの已なきに至りたりしも時代の推移に伴ひ交通連絡の必要は一般の急務を提唱せらるに至りしも如何せん工費巨額に達し到底二三關係町村の能く負擔し能はざると殊お岩内町にありては約六十有餘萬圓の巨額を以て獨力漁港

を經營し之れが着手と共に再び中止の已むなきに至りたるは皆等しく遺憾とする處ありしに四十一年中關係町村に於て工費三分の一を負擔せしか其余りは國費支辨の許に着手せるべきの消息に接したるを以て岩内町會は幸先して工費の負擔を議決し關係地方と共に請願する處ありたるも單に實測せられたるに過ぎずして未だ開鑿の舉を觀ざるは地方發展上頗る遺憾に堪へざる處なりとす

▲通信事業

岩内郵便局

本局は實に明治七年一月一日の開始にして當時通常郵便のみを取扱ひ同十四年七月十日には電信事務(内外和歐)同十八年五月一日には爲替貯金事務(内外)同二十九年七月一日には小包郵便の取扱開始せられ同三十六年五月二十一日電話所設置小樽、札幌等の長距離へ通話の道開かれ同三十八年九月二十一日市内特設電話開通す同四十一年十月一日逓信省は加入者の寄附願を容れ公設電話に變更年々擴張せられ今や前記小樽札幌の外余市、俱知安とも通話開始せらる尙近々小澤、東俱知安との連絡電話架設着手の運びに在る趣函館との電話も種々の故障あるに不拘築瀨局長の熱心盡力中に係れば是又近き將來に實現し當地と密接の關係ある壽都の如きも該線に連結せん計畫の由かれは岩内町民は是等通信機關の整備と築

港、鐵道の完成と相俟て八面玲瓏の中に文明國民たるの幸福を恣にするを得べし
局舎は元逓信省用地に在りしか業務の發達増進に伴ひ狹隘なる官設舊局舎にては建壇に亞くに建壇を以てしたるも到底忍ぶ可からず茲お於てか前築瀨局長は自家所有地に私費を以て宏壯なる現局舎を建築し明治三十一年一月新局舎に移轉業務繼續同三十九年八月一日特定三等郵便局に昇格築瀨翁亦特定局長に昇任す
當町通信事業乃發達は實に驚くべき勢を以て進み全國特三局中有數の地位に在りさし
も宏壯なる現局舎も今日おては狹隘を感ずる程なりと云ふ今局勢一斑を示せば左記の如し

局員

局長 築瀨 拾次郎

事務員 男子十三名 女子五名 工手 二名 交換手九名

逓送集配人二十九名 工夫五名 合計六十四名

四十二年度統計

通常引受

一、四九、七七七

爲替 振出金額 一八三、三三、〇七〇

郵便配達

一、三六、五六一

拂渡金額 二五、九四、八八〇

小包引受	九、八〇上	貯金	預入	二五、九二、五〇六
郵便配達	一九、七七一	貯金	戻	二七、六九、〇九四
電信發信	四〇、七五二	振替	込	二五、二一〇、二一〇
電信着信	四六、二九五	貯金	込	二、三九〇、二二五
電話加入者	一七七			

▲岩内港より本道要港に至る湊數

港名	湊數	港名	湊數	港名	湊數
函館	一、九〇	小樽	交	稚内	二七
福山	二七	増毛	三三	網走	三三
江差	九七	香深	一九	根室	四八
釣掛	七	留萌	一五	浦河	二七
室部	六	鬼脇	一八	厚岸	三九

▲本港より内地要港に至る湊數

港名	湊數	港名	湊數	港名	湊數
直江津	四一	敦賀	六九	神戸	八六
夷	四九	境	六四	大坂	一、三三
伏木	五九	下ノ關	八三	横濱	六九

青森	三元	直江津	四一	敦賀	六九	神戸	八六
酒田	三三	夷	四九	境	六四	大坂	一、三三
新潟	四九	伏木	五九	下ノ關	八三	横濱	六九

本港を基点とし西行は函館 東港は小樽を経て算出せるもの

(十五) 教 育

岩内町に於ける教育の端を啓きたるは明治七年にして世運の進歩と共に次第に教育思想涵養され其普及を見るに至り爾來三十有餘年の星霜と幾多の變革を経て今日の如き盛運に達せり然して從來の男女兩校にては到底年々増加すべき就學兒童の収容を爲すこと能はざるに至り明治四十年中更らに尋常科程度の學校新築の議起り全年十月橋町字清住に之れが新築に着手し翌年一月竣工を告げ同年二月開校の式を挙げたり橋町常小學校之なり又た當町教育の改善進歩を計らん趣旨により本年九月機關として岩内教育會を組織せられたり

●岩内男女兩小學校

明治七年中は智恵光寺堂宇を以て校舍に充てたりしが同八年十二月御銚内町二百七十

二番地をトし三百拾六圓三十五錢の醸金を以て八十三坪五合二勺の校舎、新築し明治十一年十一月七拾七圓三錢の經費を以て十二坪の一教室を増加す
 同十二年分署在勤築瀨真精氏等の議により學校建築の事を決し同年八月起工翌年五月竣工す建坪百六十九坪二合五勺敷地百九十九坪八合にして四千九百二拾四圓五拾八錢二厘を要せり而して舊校舎は本校の附屬として家税を収むる條件を以て百八十五圓を以て造作す此年該校の建物十二坪は野東分校に廻す
 明治二十四年二月二十四日 勅語謄本を下賜せられ翌年五月三十日 天皇皇后兩陛下の御眞影を拜戴す
 明治二十七年六月二十九日橋町劇場老松座火を失したるため同校第二分教室を燒き舊校舎并に教授器械書籍等悉く燒失せり因て同年七月地を鷹臺町トし御鉢内町の校舎を以て成る
 明治三十年兒童増加の爲め全部容るるを能はざるを以て支廳蔵庫を借りて一學級に充てたりしが又々狹隘を告ぐるに至り鷹臺町濱喜三郎氏所有の倉棟を借り之を鷹臺分教場とし居たど此時に當り女兒生徒數尋常科二百卅九名高等科八十三名のも數に上り男女學校の分離すべき實情殆ど動かすべからざるに至り地を鷹臺町字岩ヶ嶺にトし明治

三十三年十一月一日起工翌年一月竣成す此月落成式を舉げ四月一日尋常科三年以上の兒女を之れに移し岩内尋常高等小學校分校とす之れ女子小學校分立の端緒を明けるなり之より同月十二日岩内女子小學校分立の件北海道長廳官の認可を得て七月時町長梅澤六兵衛氏より校長向山政直氏に通知あり此月三十一日女子小學校校長以下職員の任命あり五月九日開校式を舉げたり其後兩三年を經つに隨ひ岩内尋常小學校生徒の増加と共に校舎狹隘を告ぐるに至り女子尋常小學校校舍を増築し北海道廳の認可を得て校舎を交換せり是れ實に明治三十七年一月十一日なり
 明治三十七八年の時局は普通教員以外吏の新設施をなしたるを記憶せざるべからず普通實業教育即ち之なり岩内の如きも同三十八年二月實業補習科を設け農、商、工業特に水産小實業を課する等専ら實業思想の涵養に努めたる結果其成績頗る良好にして開始以來今日迄兩業、水産兩科の卒業生は男女を通じて七十數名を出せり既に普通、實業二科を併せ卒へて現に實業の門に入り實地に其習得せし學科を應用しつゝある在り、鷹田帝國今後の教育は應に實業教育の効果を待たざるべからずと信ず其他勤儉、尙武の風氣の養成等に至つては頗る見らるべきもの任り同三十七年二月より兩校生徒が能く勤儉の主旨を守り植樹、養蠶、相互理髮其他の方法により貯蓄せる金額の如きは四十

年十二月調査によれば實に二千七百七拾六圓九拾六錢の巨額に達せり

岩内男子尋高小學校		岩内女子尋高小學校	
在籍生徒	出席歩合	在籍生徒	出席歩合
尋 七五	九四、八	尋 八三	九三、七
高 一四	九六、六	高 五	九五、七
計 八九	四、三	計 七五	四、〇九
稀尋常小學校			
男 三五	九四、四	女 二二	三三、三
計 四八			

●北海道染織講習所 本年三月元岩内支應内に設置せられ道廳技手孫人仲次郎助手風間昇兩名講師として盛に染織實地講習を爲しつつあり講習生三十名

●岩内教育會 四十一年九月設立する目下會長欠副會長山下良實以下理事數名岩内町には全會第一回は會長伊東保基にして同會の事業として通俗教育講話貧民生學用品給與等をあし亦本年第二回水泳術實地練習中あり

▲岩内尋高小學校 (十六學級)

訓導兼校長伊東保基 訓導本正西田豊市 同福原正吉 關村安太郎 山村磯藏 子野信一郎 福嶋徳重 尋正磯野止 本正本間まさ 佐々木續 尋正井野ちよ 下山喜代作 尋正金スエ 准訓導分重治 岡嶋斌 宮川信乃

▲岩内女子尋高小學校 (十五學級)

訓導兼校長井野長司 訓導本正宮川武彦 今米澤太藏 今湯村一 尋正北谷信一本正嘉藤田のぶ 尋正松本みつゑ 尋正山本秀治 本正木下ちやう 尋正訓導西田まわ 全野崎芳 全林すけ 全福岡ます 准訓導高橋はる 代用教員小野越三 大野くに

▲稀尋常小學校

訓兼校長石黒兼三 訓本科正村上廉 全木下慧 今川嶋静 准訓導神保明倫 今田中てる 本多釜二郎 全道深ちよ

(十六) 寺 社

▲郷社 岩内神社 祭神應神天皇 明治十四年五月當郡佐藤彌三合祀市岐局比賣命 兵衛外信徒の願によつて勸請す

由緒文久二千戌年八月池田茂達信徒、協議創立神社、格未定の處明治九年郷社に列せらる。岩内町大字橋清住にあり(社掌池田峻)

▲村社 稻荷神社 (祭神保食神)

由緒嘉永三年庚戌當時居住藤田又藏創立神社、格未定に付明治八己亥年村と社公稱す。岩内町大字稻林崎にあり

▲無格社 稻荷神社 (祭神保食神)

由緒文久二千戌年當時祠官池田茂達創立す。岩内町鷹森町清住にあり

▲全修寺 (本尊釋迦牟尼佛) 曹洞宗

由緒本寺渡島國龜田郡函館鷹森町高龍寺十八世海雲和尚を開基として安政四丁年己建立にかゝり岩内町大字鷹森町にあり 住職關本孝吟

▲智恵光寺 (本尊阿彌陀如來) 眞宗大谷派常葉山

由緒安政六己未年七月十日の創立にして本願寺第二十一世嚴如法主の開基たり。明治二十三年九月十二日類焼の災に罹り堂宇悉く灰燼に歸せり。同年十一月假堂を橋町字清住に造營し。同二十九年四月橋町字裏通に移轉再築せり 住職福島什山

▲光照寺 (本尊阿彌陀如來) 本願寺末 眞宗本願寺派

由緒安政五年六月本願寺第廿世光澤法主膽振國山越郡長萬部村に本願寺掛所を設けし。明治二年十二月光照寺を改稱同十二年十二月廿五日岩内橋町に移轉の許可を得て同十三年一月堂宇建築せるが。同廿三年九月十二日類焼に罹りて全部烏有に歸せり。更に同卅一年六月九日鷹臺町字岩々嶺に新築移轉せり。住職松本智海

▲歸厚院 (本尊阿彌陀如來) 淨土宗

由緒本寺渡島國函館區稱名寺十六世紀觀光安政三丙辰年開基創立。明治廿三年九月十二日日本堂庫裡類焼に罹り。同二十七年橋町より鷹臺町番外地に移轉再築し。同二十九年鐘樓堂新築着手し。三十二年落成せり。住職久井全度

▲蓮華寺 (本尊釋迦牟尼佛) 本山妙願寺末日蓮宗

由緒本京都府山城國愛宕郡上京町妙願寺五十二世津川日濟の開基にして。明治十一年建立せり。岩内町鷹臺町にあり。住職中川春亮

▲本弘寺 (本尊大日如來) 金剛寺末眞言宗

由緒當地には本宗寺院無く。祖先祭祀回法意の如くならず。依て信徒一同協議の上。明治卅一年九月二十五日本寺建立出願。同年十一月廿二日許可を得。岩内町字御鉢内町西濱に寺院新築せり。住職肥田成道

▲美以教會

明治廿四年七月高見常藏始めて岩内に來り熱心傳導したるより信仰者を得同廿五年即
幹内町一八二番地に教會堂を設立せしが同三十七年十一月鷹臺町に新築移轉せり之れ
岩内に於ける基督教會設立の嚆矢とす

(十七) 衛生

當町に於ける公衆衛生は未だ完全の域に達せずと雖も市内を七部に區分し道費回費等
の補助を得て衛生組合を置き第四部組長上高職組合總長として書記五百藏榮を指揮し
て之が統一を計り町に掃除係の一課を設け常に一致の歩調を取りて衛生思想の涵養と
其勵行に努めつゝあるを以て年々良好の成績を見るに至れり然とも當町街衢の組織尙
ほ不完全なれば漸次之を整理するの要あるのみならず公衆衛生と直接の關係ある飲料
水と常に欠乏を告げ給水の如きは不充分なれば多くは河水を使用するの狀態あり今
後岩内の發展に伴ひ水道施設の必要あるへし而して例年多少傳染病患者の發生を見ら
るは種々の原因あるべしと雖も要するに飲料水道衛生の不完全を生ずるなるべしと信
ず當町の衛生事業尙幾多の設備改善を要す是等の改善と發達を計るべく去る四十二年六

月岩内醫師會の組織を見るに至れり掃除吏員衛生組合岩内醫師會の役員氏名左の如し

掃除監督長(助役兼掌)道澤敬藏 掃除監督柿崎操 巡視木下甚太郎

掃除受員卯尾徳太郎

第一部衛生組合組長	梅田 長治	副組長	岡村徳次郎
第二部全 上	伊東 敬	全	松浦嶋次郎
第三部全 上	若狭 岩藏	全	勝峯 全治
第四部全 上	上嶋 職	全	三上 常和
第五部同 上	欠	全	佐彌藤十郎
第六部全 上	坂本六兵衛	全	下山勝三郎
第七部全 上	安達 清吉	全	佐藤 彌平
岩内醫師會會長	泉 鉄太郎	副會長	栗山 英哉

(十八) 慈善事業

▲岩内救護所

岩内救護所は老幼羸寡孤獨にして自活の途なき者癩病不具にして産を營む能はざる

者及行旅病人等を収容して救護を興ふる目的を以て設立せられたるものなり其起元は明治卅五年にあり同年七月以降岩内町御鉢内町九番地鈴木久太郎岩内町役場の囑託を受け行旅病人救護取扱をなせるに基き今日の設立を見るに至れるものなり久太郎は告ぐるべき悲惨の境に陥れる同胞を救ふを以て唯一の事業となし三十五年七月以降男三十七人女五人(内死亡男十七女二)の行旅病人救護取扱をなせり

四十一年十月同町大字老古美字薄田に於て町有地百七十五坪を十箇年間無償貸付の約を以て借り受け建坪四十七坪の救護所を建築せり其費四百八十五圓内二百三十五圓右救護所賛助員其他特志者三百四十五名の特志寄附に係るものにして殘額二百九十圓は久太郎の特志支辨に係るものなり目下収容せる救護人員と創設最初より六十五人を收容せしが目下の行旅病人は二人貧民救護員九人(男二女七)なり

行旅病人孤兒及び窮民被救者に賜與せられたる金圓及米穀は久太郎に於て之を預り救護取扱の費に充て不足分は久太郎の資及一般特志同情者より寄贈せらるゝ金品を以て其救護に充てつゝ居れり目下の役員は

- 理事長 武藤清兵衛 副長 山下良賢 理事 福嶋什山 關本孝吟 中川春亮
- 久井全度 高橋浩流 監査員 道澤敬藏 三上常和 向山忠太郎

(十九) 新聞事業

當港の言論機關は比較的進歩の状を呈し岩内新報岩内新聞岩内新聞乃三種ありて何れも正確穩健の論議を試み當港の發展に貢献する所少なからず文藝にはやまと草紙(月刊一回)發行せらる其他小樽新聞支社ありてコレ又當區の發展に資する處少なからず

(二十) 氣象

▲岩内の溫度

雪は十一月より降りて翌年四月には融解し積量五六尺を程度とす氣温は冬季の最低攝氏十八度夏季の最高同八十三度位にして冬季は朔風凜烈痛に徹するも春季に至れば惠風貽蕩袂を拂ひ五月下旬中旬に掛け梅も櫻も桃李一時に咲き亂れ殆ど半歳を白雪玲瓏の裡に送れる當地の人々には言ひしらぬ感を興ふる候なりとす夏季の溫度は比較的高昇するも日中暫時にして朝夕は眞に凌き善く秋季紅葉の霜に飽きて滿眸恰も錦を織出すの頃に至るまじ山光水色の明媚なる事殆ど本洲と異なる所なし特に白花爛熳たる春季に於て青巒僅に残雪を留め座ながら雪月花を賞し得るか如き蓋し本洲に優るの風情なるべし

岩内町 最高 九三、五 明治三十七年八月二十日
 最低 五、八 明治三十五年一月二十四日

絕對最高、低、氣溫
 ▲平均最高最低氣溫(華氏)

一月二月三月四月五月六月七月八月九月十月十一月十二月平均
 平均 氣溫 四七、七 四七、三 四四、五 六五、六 六五、七 六六、五 六六、七 六六、七 六六、七 六六、七 六六、七 六六、七
 平均 高氣溫 五七、八 五七、七 五七、五 八二、八 八二、七 八二、五 八二、五 八二、五 八二、五 八二、五 八二、五 八二、五
 平均最低氣溫 三三、三 三三、三 三三、三 三三、三 三三、三 三三、三 三三、三 三三、三 三三、三 三三、三 三三、三 三三、三

▲霜雪季節

初	終	初	終
平年	平年	平年	平年
最早日	最遲日	最早日	最遲日
十月九日 明治十九年 九月六日	四月廿四日 明治卅二年 五月十二日	十一月十日 明治卅二年 十月廿四日	三月卅日 明治三十二年 五月二十二日

積雪

平年初 最 早 日 平年終 最 遲 日 最 深
 十二月十日 明治卅九年十二月九日 三月二十日 明治卅八年三月卅日 明治卅二年三月廿三日 四尺一寸

(廿一) 岩内統計一班

▲現住戶口

年次	男	現住	女	計	現住戶數	平均一戶ノ人口
	現住	住人	口			
明治四十二年	一〇、六六六		九、五九九	二〇、三三二	二、七九八	六、八六
全四十二年	一〇、一五五		九、四八五	一九、六四四	二、八六一	六、八六
全四十年	九、七七六		九、二一八	一八、九四四	二、七八〇	六、八五

▲人口増減歩台

備考 總人口 二〇、三三一人
 總戶數 二、八〇〇戶
 納稅者總數 三、一八七人
 明治四拾二年十二月末日現在
 明治四拾三年四月一日現在

▲四十二年度岩内町ニ係ル租税及公課賦課額調

國稅	地方稅	町稅
地租	營業稅	所得稅
二、〇六〇、〇七五	九七、六七〇	二、四四五、五五〇
所得稅	雜種稅	營業稅
一四、七七一、三三〇	三、九五五、五五〇	二、一〇四、九二〇
營業稅	所得稅附加稅	地方稅營業稅
一五、三〇三、三三〇	六三、一九〇	九三、五七〇
醫藥營業稅	營業稅附加稅	雜種稅
三三、五〇〇	一、七六、一三〇	三、一四、三三〇
	戶數割	水產稅
	五、七四、七五〇	三、六三、二五〇
	水產稅	反別割
	三、四三、七八〇	二〇、八六五
	反別割	過年度收入
	二〇、八六五	五二、三三〇

内譯表左の如し

合計 三、七五、六五五
 ▲資産額及人員 一七、六六、三三三
 地租割 二六、五三〇
 三三、二〇、五六〇

金額	人員	金額	人員
五百圓未滿	一、一四〇	五百圓以上	七六九
五萬圓以上	九	十萬圓以上	三
計	二、七八〇	計	一、八三〇
均	〇	均	〇

▲町村生産力

農産	金額	人員
岩内町	八三三	一、一四〇
嶋野村	七、五九三	七六九
前田村	七、五九三	七六九
發足村	一、四九三	一、一四〇
小澤村	一、四九三	一、一四〇
古宇郡	三、三三六	三、三三六
俱知安村	六、五七三	六、五七三
狩太村	八、九七七	八、九七七
熱郭村	六、六八三	六、六八三
南尻別	四、二七〇	四、二七〇
黒松内	四、二七〇	四、二七〇

米	二八〇	二六九	四五六	二六七	一三三	二二二	五七七	九三六	二〇四	三、四八	八二二
家畜	七五七	二五二	三八九	四三〇	一七三	三一九	七五五	六六六	五、四八〇	四、六六	二、八六
果實	一四	一六	二七六	一八三	七七八	二〇七	三六	〇	二、六	一〇〇	五六
林産	二五	七三	三、六六	一八七	一、二〇七	三、二二	四九七	六、七七七	三、四九二	二、三六七	二、八五
礦産	〇	〇	一〇、〇〇〇	〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	〇	〇	〇	〇
工産	五七三〇	〇	一、九一五	〇	〇	〇	二、七二二	八、三五〇	二〇	〇	〇
水産	八四七五	七九〇	〇	〇	〇	三、四〇三	〇	〇	二、七	〇	二、九六六
其他	六、四八	三、八〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	〇	〇	〇	〇

以上は昨四十一年に於て収獲せし價格調査として舊支廳への報告を基礎としたるも中にも水産物の如きは水産課の關係より概ね其收獲高の六割位を届出るの懸例あるを以て實際の價格と相違するは免るへからず本年の如き岩内郡古宇郡に於ける土産物たる鯨の如きは近來の大漁にして兩郡合計收獲約七万五千石を計上せるを以て實際の價格は(白石千五百圓と換算)優に壹百万圓を超過せるは明瞭なり

米	作付反別 收額計高	七、八三反 九、八八石 八、七〇九圓	岩内郡	俱知安	狩太	熱郭	南尻別
大麥	作付反別 收額計高	二、九七 三、五八一 二、四三二		三、〇〇〇 二、四〇〇 一、四〇〇	四三〇 三、五三 一、三六六	七、六九 六、九二 五、五九	二、七〇〇 三、五二〇 二、八二六
小麥	作付反別 收額計高	五、三三 五、四〇九 四、七二八圓		三、〇〇〇 三、四〇〇 三、四〇〇	五、八一 四、〇六 二、五九八	一、六 二、七 九、六	一、〇八〇 一、四三二 九、二五
裸麥	作付反別 收額計高	七、八〇 七、〇七 五、四九九		一、〇〇 七、〇〇〇 五、〇〇〇	三、九一〇 一、九五〇 一、六〇〇	二、〇八 一、四〇 一、三三	七、九一〇 七、九〇 六、七二四
燕麥	作付反別 收額計高	一、八六九 四、〇三一 六、六九八		〇、〇〇 一、〇〇一 三、〇〇〇	一、六〇〇 四、〇〇〇 一、二五〇	一、五七 三、〇三 八、九六八	一、七〇〇 四、五九〇 一、四三九
大豆	作付反別 收額計高	八、四四六 六、八四二 四、九八三		三、〇〇〇 三、〇〇〇 一、二〇〇	七、〇〇 二、八八〇 一、〇〇一	三、五三〇 三、二六八 一、七九〇	一、三二八 一、九五〇 一、〇七五

品評會を開きて銳意斯業の獎勵と改良に努めつゝあり當時の監督と小松崎吉郎氏
 ▲國富礦山 小澤に於ける礦業熱も一時非常に昇騰し礦山の如きも拾數ヶ所を算す
 然れ共國富礦山の如き大發展をなしたるものは非ず同礦山は二拾年以前少許の採掘を
 爲したる者ありし由なれ共其後久しく廢坑に屬せり明治卅二年より北海道鑛山株式會
 社(當時社長田中平八)に於て開坑に着手し若干の採掘を行ひたるも礦石の粗悪なる爲
 の一時事業を中止し居りしが明治卅九年五月中田中平八回銀之助氏之を譲り受け個人
 事業として經營する事となり爾來銳意探礦に努め諸師の設備を整へ四拾一年拾一月廿
 三日製練器械の据付をなしてより一日の製練量七拾屯一ヶ年銅産額約九拾万斤價格參
 拾五六万圓を算すと雖も開坑は尙ほ淺く未だ豫定の發展を遂ぐるの域に至らざる爲め
 充分の利益を見るに至らざるも開坑以來起業費二拾万圓を投せりと目下使用せる坑夫
 は三百余人にして役員として技師長宮川兼造氏庶務部長中庄麟吉氏擔任せり同所製造
 の型銅は一八貫匁ありし銅九八銀万分の五金万分の五を含有するといふ

●公共團體と諸醸造場

▲岩内自強會 本會は成申詔爵の聖旨を奉戴して所在町役場内創立したるものにし
 て明治四拾二年三月拾八日本町有志に依り組織せられ本町を拾三支部に區分し各部に

支部長一名理事若干名を置き重なる事業としては左の事項を研究し遂次其實行を爲す
 ものとする目下の役員は左の如し

- 會長 欠 副會長 山下良實 幹事 伊東保基 石黒兼三 井野長司 清澤敬藏
- 評議員 本間勘次郎 本間作平 大島順兵衛 小田權吉 岡本庄吉 若狹岩藏
- 上座職 藤峰金治 角林藏 種田巳之吉 中房儀八 卯尾治三郎 向山忠太郎
- 梅田長治 梅澤六兵衛 梅澤榮之助 黒澤喜代定 栗林國太郎 藥瀬拾次郎
- 松浦嶋次郎 藤田幸太郎 藤野善三 小林董吉 安達清吉 安達爲次郎
- 齊藤作藏 佐藤熊吉 坂本六兵衛 佐藤彌十郎 澤口良藏 坂本榮藏
- 北友長之助 一柳平太郎 弘中丑之助

- 一 地方自治の鞏固を謀ること
- 一 會員相互の懇和親睦を圖り隣保扶助團結の美風を養成する事
- 一 一般風俗の矯正を圖り良風美俗の獎勵に努むこと
- 一 質素儉約を守り各々其業務に忠實勤勉なるべしこと
- 一 殖産事業を興起すること
- 一 租税其他の公課の納期を嚴守し滞納せざるに努むること

- 一 教育の普及を圖り及兵役の義務を完ふすること
 - 一 選舉の權利を勵行すること
 - 一 法令規則の周知を期すること
 - 一 集會其他の時間を確保すること
 - 一 零碎なる資金を集め産業其他有益なる事業に資金を供給する事
 - 一 冠婚葬祭等の儀式は誠意威肅を主とし虚飾に流れるること
 - 一 公私衛生思想の普及を圖り其改善を期すること
 - 一 慈善事業に努むること
 - 一 其他本會に於て必要と認むる事項
- ▲岩内在郷軍人團 同團は明治卅九年の創立にして當港在籍軍人を以て組織し團長酒卷若狭川嶋安宅山本等の團長を經去月改選の結果團長濱中又三郎副團長安宅龜次郎當選
- ▲岩内婦人會 明治卅七年六月愛國婦人會岩内支部より分身せし團體にして時の支應長山田有斌氏の斡旋により岩内共有財産中より畑壹町六反歩の永代無償貸付を受け道廳より桑苗の無代付與を受け桑園事業を起し三十一年五月會員自から鋤鍬を採り經營今日に至りたるものにて道廳より模範桑園と認定せられ年々百五拾圓の補助金

本年迄下付せられ今日に及べり時に手藝展覽會を催し又は蠶業共同飼育等々なし其益金の公共事業に寄付し居れり基本金數百圓を有し當港各團體中尤活動するは此婦人會なり目下會員百有余名を有し創立時代の會頭は築瀨さく子副會頭は泉なか子にして會頭死去泉副會長たりしが去月第六回總會に於て改選の結果會長大嶋ゆづ子副會長山下悦子評議員尾形綾子泉なか子黒澤かね子永田やわの子築瀨さよ子當選せり目下の名譽相談役は築瀨真精本間勘次郎一柳平太郎藤浩氣三上常和の諸氏なり

因に婦人會桑園經營に就ては高井作治の功績によるものたるを忘るべからず

▲岩内消防組 は當町を三部に分ち設置したる公共組合にして組頭壹名部長及小頭拾名一等消防夫四拾五人二等消防夫九拾參人信号夫參人を以て組織し組頭と向山忠太郎部長は青塚勢代吉淺江菊次郎平森清右工門

▲大口會 銀行會社員幹部及町有志の設立せし團體にして幹事を置き月一回輪番會合町經濟及事業計畫を研究する團體なり會員の重なるは山下、一柳、大岩、佐藤彌、岡、川中、小西、築瀨、畑澤氏牛耳を取れり

▲親和會 岩内町一流の紳士を以て組織せる保守的團體にして會員參拾有余名理事長梅澤六兵衛副理事本間勘次郎

▲一志會 大學卒業程度の青年を以て組織せる青年團體にして會員僅少なるも最團結強き學術研究的の青年團體なり會長築瀬拾次郎

▲西友會 町有力の實業家を以て組織せる商事的團體にして會員拾八名會長佐藤彌十郎

▲物産商組合 會員二拾名を有する重なるも海陸物産商の團體に於て組長は齊藤作藏

▲木工組合 常港木工業を網羅せる一團にして組長は宮崎利吉

▲岩内公會堂 四拾年九月海陸物産品評會紀念として建築し自來各種の講習會場も貸與しあてまが今春水方市氣會社増設工場建築の爲め目下の水電事務所地と交換せるが元岩内支廳を拂下げ町役場移轉の上は現在の町役場を公會堂に充つる事に決定せり其他岩内同盟會、岩内農友會等あるも省略

●梅澤醸造所 稻穂崎町にあり三拾一年六月の開業にして醤油味噌製造をなせり醸造主梅澤六兵衛

●岡村製藥所 御針内町濱中あり沃度肝油を專業とす三拾七年八月の開業所主岡村徳次郎

●本間醸造所 鷹臺町宇壁坂にあり三拾五年六月の開業にして味噌醤油製造を專業とす所主は本間作平

●勝峯醸造所 鷹臺町にあり味噌醤油製造專業として三拾一年四月開業所主は勝峰令治

●厚谷醸造所 橋町にあり三拾三年一月の開業味噌醤油製造を主とし傍ら材木卸小賣及建築業を兼營せり所主は厚谷外喜男

●西尾醸造所 鷹臺町にあり酒造專業にして四十年十月開業所主は西尾龍松

●角醸造所 橋町にあり酒造專業にして十七年十月開業所主は角林藏

●川田精米場 御針内町にあり四十二年の開業にして石油發動機より盛に營業をなせり近き將來於て電力を應用して精米業の發達を計畫しつつあり場主は川田巳之吉

●淺岡精米場 三拾一年一月の開業蒸氣機關を以て盛に營業しつつあり所主は淺岡徳次郎

●瀧谷精米場 鷹臺町にあり三拾九年四月の開業石油發動機を利用し營業しつつあり所主は瀧谷源太郎

●森田煉瓦場 老古美にあり三拾參年五月の開業にして職工四拾有余名を使用し盛

に營業せり工場主森田孫兵衛

備考 以上乃諸工場に於ての一箇年數量並價格を舉れば精酒四六三石 万七千九百
有余圓 醬油一五四石二万八千八百五拾圓 味噌三二七七六貫八百九拾
四圓 煉瓦二五〇〇個二千五百圓 其他製糸、鹽詰、肝油、沃度等を概算せし
價格約七万圓を計上すべし

●官公衙官公吏名譽職

△岩内區裁判所 (橘町字清住)

判事正七位 門脇 三太

監督書記 毛利 直吉

檢事局書記 服部 作治

公 訟 人 上嶋 職

辨 護 士 山孝 本治

△札幌營林區署岩内分署 (橘町字清住)

所長 屬 大淵 清樹

△岩内警察署 (廣藁町八幡通り)

檢事正七位 佐藤桑三郎

登記書記 萩原 量

執 達 吏 佐藤虎五郎

永田 要

技 手 瀬戸 武夫

署長警部 子野日弘毅

巡查部長 佐藤 盛文

△岩内町役出職員

町長正六位勳五等 山下良實

書記 齊藤和藏 同長谷川清五郎 同垣沼武二郎 同日下部治郎 同石川竹之助

同羽見信隆 同柿崎操 同人見七郎 同住吉敬次郎

町書記補 岩清水市郎 佐々木格次郎 藤井三郎 工藤伊八 金子環

雇 大塚太郎治 清水清五郎 坂本竹志 木下甚太郎 塚原信治

水産係 川崎久市

町 會 議 員

一柳平太郎 藤田幸太郎 佐藤彌十郎 梅澤榮之助 本間作平 西尾清太郎

田原彌三吉 角林藏 林貞助 坂本六兵衛 卯尾治三郎 若狹岩藏 勝峯命治

松浦高二郎 堀江爲治 栗林國太郎 北友長之助

第一部長 岡村徳次郎 同代理 青塚勢代吉

第二部長 嶋野 秀吉 代理 大嶋 權平

巡查部長 嶋崎與三吉

外巡查

助役 道澤敬藏

収入役 中里秀彦

第三部長 弘中丑之助 代理 黒澤喜代定
 第四部長 菊地留二郎 代理 伊藤 與平
 第五部長 濱谷兼太郎 代理 平森徳右衛門
 學務委員 伊東保基 井野長司 石黒兼三 一柳平太郎 角林藏 大嶋順兵衛 上嶋職
 常設委員 一柳平太郎 本間作平 佐藤彌十郎 梅澤榮之助 栗林國太郎 西尾清太郎
 大嶋順兵衛 川向築太郎

△築港事務所
 工事長 關原忠正 專任工師 高口重次郎 事務主任 大橋釘松
 技手 新納多氣雄 技師員 橫溝則和 事務員 金子房一
 築港委員 林貞助 藤田幸太郎 勝峰金治 坂本六兵衛 松浦嶋次郎

●警察の取締に關する諸營業 (四拾二年拾二月現在)
 新聞雜誌轉賣 三 號砲賣賣 一 火藥類賣賣 一

烟火製造	三	烟火賣買	一	古物商	一四五	質屋	一七
彫刻	五	人力車	二	人力橋	一	人力橋	一
乘合馬橋	四九	通船	一〇	接骨業	一六	接骨業	一六
灸治業	一〇	鍼治業	一二	按摩業	四六	按摩業	四六
賣藥部外品	四	浴湯	二三	旅人宿	三九	旅人宿	三九
製造販賣	八	料理店	三六	飲食店	二	飲食店	二
雇人口人	一	賣肉	四五	牛乳搾取販賣	一	牛乳搾取販賣	一
屠畜	一三	劇場	三八	寄席	八	寄席	八
乳製品請賣	一九	藝妓	五八	貸座敷	六	貸座敷	六
遊戯場	五〇	酌婦	一六	冲賣商	六五	冲賣商	六五
娼妓	一八	人馬繼立	三八四	理髮	一七四	理髮	一七四
代書業	三一	清涼飲料	二	清涼飲料	二	清涼飲料	二
銀治工業	一	水製造場	九四	水請賣	二	水請賣	二
氷雪製造	一	全上請賣	三	陸上運送業	二	陸上運送業	二
陸上運送業	二	水上運送業	三				

岩内入景

抱天居

敷島秋月

過海たる怒濤のうねり、嵐と巨巖に碎けて、吹散す潮の花雪吹、霏々たるあき
と拭ふが如く風き、一痕の常娥、中天に明鏡を懸けて清光を恣ままにす只見る、水
煙渺茫たる彼方、泊盃の對岸、一抹の翠螺をなして横たはる宛として是れ無聲詩中
の景趣

野東落鷗

天籟々明笛を弄し狂瀾敦に天鼓を打つ處遙か隊伍整々魚鱗動翼の陣を張れる海
鷗の一群裂帛の叫音を放ち波瀾に下り泛々たる少時悠ち翅を揃ひ騒然波頭を搏つ
て翺翔するや驟雨嘈々舳腹にさゝめき羈客故山の夢を驚かす仙郷なる是野東

雷電暮雪

峻崖を削り幽谷を穿ち神斧鬼鑿の妙を極めたるを雷電の奇勝となす驚し夫れ白雪
紛々満山皚々暮色暗澹として迫れる時遠く之を望めば白熊の踞踞して氷洋に眠れ
るか如く獵夫をして空しく銃を握り扼腕せしむる慨あり真乎雄犬の好畫圖

薄田夜雨

巫山一廓を蔽ひ夜來の妖雨喃々密語の如く喋々痴話の如く切々啣つが如く嘔々泣
くが如く霽るるを惜むに似たり閨門惟深く垂るる内極花一朝の春夢を買へる遊蕩
の漂兒娼婦の獻歎と誤りて流連の涎雨をただよはす薄田不夜城の三更

濱中夕照

潺々追ひつ追はれつ戯るゝ女波男波磯近く片割れ沙上甲を干す小蟹の夢をひたし
閃々たる残暉水天一髪の青線を描くあたりより斜に射て暑灼くが如し即ち裾をか
ゞげ履を棄て渚邊に今む須臾ならば清風裕ろに來り涼味自然に生ず可し

山崎晴嵐

蒼鬱たる老樹參差半空を摩し蜿蜒たる丘阜長蛇の如き一帶俚俗山崎と稱す晚秋景
物既に蕭條满目轉た荒涼たる際一陣の晴嵐急に起つて之を襲へば忽ち綠波翻り翠
浪騰り鞞轄の響天角を撼かし地軸を抜き海嘯に捲土重來せるかと疑はる

稻穂歸帆

櫓聲欸の遠くを返して和し萬頃波死して汪洋たる蒼海青巖を敷ける如き快晴の好
日和灣口長く突出せる防波堤に立ち白帆風を孕むで矢よりも早く歸來するを見む
眼界の廣濶なる氣宇をして自ら壯大ならしむ又絶景の一たるを失はず

鷹台晚鐘

眼下、市街を鳥瞰し灣内の風光を一瞬、萃たる處一巨刹あり、全修寺と名づく烟霞
紫を萃め百花爛熳たる陽春の薄暮梵鐘一杵幽韻漂渺として鴉群時に急ぐあとを追
ひ余音弱たり人もし堂下に結伽して詩禪に參せば目睫詩神彷彿たらん

●岩内八勝詩

兒玉夢櫻

△野東浮鷗

東風吹雨過、沿海長魚苗、
可卜富漁獲、群鷗逐潮暮、

△薄田夜雨

蕭々連夜雨、柳巷寂絃歌、
憐殺深春恨、多於花落多、

△稻穗崎歸帆

日落寒潮白、雨收秋浦空、

△山崎晴嵐

霽々氣、晴嵐鎖廣原、
健兒爭運動、嗚采震乾坤、

△鷹臺晚鐘

遠浦炊烟起、遙林歸鳥啼、
疎鐘何處寺、隱々暮雲西、

△敷島内秋月

水天清似洗、月照海門澄、

歸帆三四五

隱見暮雲中

△濱中夕照

十里沙遠、夕陽映晚霞、
白雲鎖紅葉、何處好停車、

吹拂寒千里

秋風一雁高

△雷電暮雪

一白乾坤小、雪晴千里空、
巍然雷電嶽、現出玉玲瓏、

●岩内雜咏

兒玉市隱

比屋三千戶

通街半是商

海多產真黑

山盡出硫黃

今日烟華里

昔時魚蟹鄉

始知照代化

波及遍遐方

滿街塵漲幾行馬

盡負硫黃煤炭來

無事何堪此日長

瓶花相對倚吟床

始知北北異南地

六月袷衣猶覺涼

夜雨窓前滴岩梧

涼痕如水沁肌膚

真成北地宜銷夏

六月無蚊不用幅

紅旭海天晴色開

垂楊門外暫徘徊

真成北地宜銷夏

六月無蚊不用幅

晴、霞、出、海、門、東、萬、丈、霞、光、潮、水、紅、
舟、子、張、帆、方、擬、發、候、風、尚、在、津、灣、中、

○ 則半酸居士再刊舊著岩内案内賦誌寄

誰道文章不值錢

醉中自笑乾坤小

筆端收拾月山川
領略無窮風月權

○ 觀宿内鉄索

鐵索蜿蜒蟠、空、
梯雲取月、今、休、說、

晴天白日現、長、虹、
上下銀河一、瞬、中、

修築の漁港にて

荒磯の昔しは夢を飛ぶ蟹

○ 岩内八景

敷島の秋の月

實に龍の腮の珠か海の月

○ 鳴神瀧

百尋瀑布桂崔嵬 吹霧飛沫漲万雷

吟嘯不堪嵩下立 冷風六月刺肌來

夢櫻香客

兒玉夢櫻

勝峯錦風

山崎の晴嵐

崖鼻や寄せはかへす青嵐

野東の落鷗

はや沖は鱈か鷗數千羽

濱中の夕照

白濱や秋赫々夕日影

鷹臺の晚鐘

海へ引く余韻や閑けし秋の鐘

山崎の沙照り返す暑さか那

磯とたに腰掛出して涼みかな

巖頭にゐふなさらなりはな炎

磯臭き海士か軒端に干飯哉

波防く長堤今や風かをる

磯松にからむや蟹か夕飯遣

泰枝

遠思

宇山

仙風

加志美

露月

雷電の暮雪

山岳重疊雪より雪に暮んとす

稻穂の歸帆

帆の列や歸る鱈船助宗船

薄田の夜雨

戀やある夜半にメノコの袖時雨

荒磯のむかしは夢かこゝ螢

梅雨晴や羊蹄山のおさはらけ

豊漁の祝ひをかねし端午か那

熊吠る雷電山らゐりさかゑ

築港の石垣燃ゆる暑さ哉

夢櫻

紅葉

紫明

圭美

赤子

守 拙

打水や磯風かよう庭の松 埋立の沙もひかるや夏の月 藻汐焚く島野の夕や月涼し

● 雜 部

- 南河旅店は、御銚内町波止場前角に在りて當地一流の旅館宿舎結構の美を極めずと雖も昨令大修繕を施し室内清潔萬事行届き居るを以て好評(店主南河政行電話七番)
- 梅内旅館は、橋町見番通りになり高等下宿を兼ねたる新築館にして其客と接する最も丁寧なるを以て日に信用厚く他旅館を凌駕するに至れり店主梅内謙吉電話百廿二番
- 其他丁平藤田、かきや、菱川、小宮山、會津屋、久鱗、井ゲター、加藤、大西旅館等の旅店兼下宿やあり
- 劇は二葉座、元と吹上町に在りたるも火災に罹り焼失せるか更らに橋町に新築開場せり(持主二葉伊三郎)
- 劇場、内座、橋町に在り、舊勸工場を改築したるものなり(持嶋野秀吉)
- 劇場改良座、鷹臺町に在り元と鷹臺座と稱せしも今の持主の手に移りて改良座と改稱(持主七戸善助)
- 寄席遊樂亭、御銚内町東樓隣に在り三拾八年四月開場(持主吉田豊吉)
- 岩内勸工場は、橋町七拾七番地に在り目下場内に開業せるもの拾店重に和洋小間物美術繪端書類を所ふ頗る繁昌

- 金精柳球場、當地に於ける球戯場にして米國式最新玉突台を取寄せ設備も完全也
- 岩内魚市場は、兎も角小樽に亞くの岩内として魚菜市場の設備もなく地方衛生上と道路整理と夙に必要を感じ居りたるが當地林貞助吉田清作等の主唱によりて御銚内町六帯地に差當り岩内魚市場を見るに至りたるは一般の進歩と云ふべし
- 百花園、鷹台町カベ坂下の右に在り散て風賞探景の趣なくも土地蓬幽俗腸を洗ふに足る殊に四季折々の花卉美を争ひ妍を競ふ

◎ 花 柳 細 見

ありと聞く、月宮殿の御遊の舞、伽陵頻伽の、天乙女、霓裳羽衣の、曲ならで三筋の、糸のチンチントン、浮いた二上り三下り、心意氣なる爪彈に、沓も重なる左、駒、ぬしを待つ身の疊算、嬉しき首尾に鼠啼き、あら耻かしやさらば迎て思ひ切れまじ、切られませまじ、そもやそも、始めてぬしも三嶋町、その清住の御姿に、戀風ぞつと吹上町、それと思ひをせケぬしを万更稻穂崎、忽ち浮名が鷹台町、戀の重荷も御銚内町、それと岩内わーが胸、

コレ、錦風茶屋から寄せられた岩内花柳界の消息たソーナが不祥の編者は其内容を窺

知するに苦むから具体的に常港の料理屋と阿見番の藝妓連を紹介して其資を塞ぐことにした

△岩内見番

本間喜助 工藤與惣吉 巳亦長平 川崎市次郎

本玉の部

糸吉	加藤ヨシノ	助六	志賀ミツ	小六	杉原トモ
小勢	藤村ハマ	一助	榎村ツマ	千代野	米本チヨ
小新	後藤モト	愛吉	小林アラヨ	仙吉	宮田ノブ
小かね	工藤サキ	小糸	石井キン	茶っ子	小田トセ
幸五郎	瀧澤コウ	小春	森タカ	あや子	石井ミヨ
梅吉	森田ノブ	れん子	林サキ	小三	又地マス
力丸	佐々木キヌ	文子	宮内トメ	お茶	中川トキ
やね子	新谷ツル	かるた	齊藤マサ	照枝	櫻井ラツ
秀子	石井ツマ	きん子	田村イチ	貞奴	川村サダ
	松本トレ				

半玉の部

つばぬ	加出トヲ	かつ丸	福嶋カツ	ふく丸	又地ケン
まつば	鈴木ヒサ	ベ子	加山シメ		

△岩内町見番 (合資)

吉田豊吉 嶋野秀吉 小嶋爲藏 吉田嘉藏

本玉の部

重吉	鈴木キク	貞壽	西川スエ	老松	田中ハマ
福松	六角シユン	小團次	久岡ケン	奴	山本ミチ
勝榮	橋本シマ	花吉	花山ハオ	咲松	中嶋カツ
春助	佐々木ハル	桃子	小熊チヨ	市子	中嶋キヨ
政子	久田マサ	小作	中村リナ	丈八	葛馬マツヨ
いさみ	岩村カヨ	まめた	近正チヨ	小若	辻アイ
力彌	湖川ハマ	小一	瀬下コノ	權助	藤井ツル
染子	佐々木チヨ	鹿之子	澤田ルイ		

△料理店

茶子辻 エイ 半玉の部 てん子 重石ヒナ

金精樓 本間 喜助 東樓 吉田 嘉藏 福の家 川口 つら
 入工すしや工藤與三吉 鳳萊亭 佐々木チヨ いろは 岡本 八重
 松川樓 川崎市次郎 日進樓 佐の 吉彌 喜樂亭 水野 ヤエ
 開進亭 小林 良助 ひつ美家 柴田宇之吉 梅の屋 常盤樓 岩村 ハマ
 みどり 金子 ヨチ 三浦家 加山 トミ

△料理舞そはや
 金又 巳亦 長平 山久 吉田 嘉藏 分銅 松嶋 ヤ
 丸北 大のや 久三 清月亭 角一 たわらや
 九十 澤田屋 健幸 藤卷庚太郎 金ト 猪股藤太郎

◎薄田遊廓
 その薄田の不夜城や、蝦夷松前の昔から、何處も變らぬものは戀、が、の、と、が、の、じ、と、て
 はやされ、伽羅の下駄履く長者より、命を的の船の人、戀に隔しの無い上下、女ならでは
 明けぬ國、誠無いとの傾城も、染めし耻かし紅筆の、思ひ參らせ候かしと、
 コレも錦風村からの寄書其儘なが古い事はイワナイで現時薄田遊廓は七軒で其内尤繁
 昌する二三の妓樓と艶麗な名花を紹介せば

△村上樓 (樓主村上元吉)

若浦 坂井はん 都 太田ごら 香梅 中村さな
 金龍 成田くに 桂木 田邊れん 宮治 高田とそ
 淺嶋 齊藤つる 五月 寺嶋とし 信夫 渡部みよ
 千秋 三上つる 松嶋 高橋しもよ

△文明樓 (梅内せい)

小雪 中田たよ 桃井 宇田りつ 七重 米谷よし
 小松 佐々木さたを 朝日 佐藤さく 清花 富樫きん
 小櫻 大門きさ

△新開樓 (佐藤得兵衛)

勢枝 熊谷こと 曙 鈴木さき 米花 米谷てる
 梅技 成田たけ 小とし 田中よし 琴浦 秋村はる
 小蝶 石澤さん 小藤 長内そめ

△北辰樓 (藤井はる)

八千代 菅原みさね 小蝶 今野政尾 桂木 本間花江

小峯 田附とよ
 小勝 高橋仲代
 小龍 太田とて
 福松 石田こと
 小花我孫子ふくよ
 龍 地主さん
 松嶋 小柳ひめ

明治四十三年八月十三日印刷
 同年同月十七日發行

後志國岩内郡岩内町一九七番地

(定價一部參拾錢)

編輯兼發行人 浪越重隆

印刷人 岩内郡岩内町御鉢内町六十番地 信夫賢左右

印刷所 同上 文賢堂

賣捌所 御鉢内町 池田大盛堂 小林九阜堂

小峯 田詰さよ
 曙 太田そて
 龍 地主さん
 小勝 高橋仲代
 福松 石田こと
 小花 我孫子ふくよ
 松嶋 小柳むゆ

明治四十三年八月十三日印刷
 同年同月十七日發行

(定價一部參拾錢)

編輯兼發行人 浪越重隆
 岩内郡岩内町御鉢内町六十番地

印刷所 同 信夫賢左右
 印刷所 文賢堂

賣捌所 御鉢内町 池田大盛堂 小林九阜堂

和洋酒 掛菓糖子 砂糖 其他雜貨

岩内港御鉢内町

全松原文作

電話 百三十八番

諸雜貨卸小賣 福 梁川菊次郎

電話 二百一十一番

和洋酒 雜貨 罐詰貨物

岩内港鷹臺町

加賀屋大吉

電話 〇九又八(九) 五十七番



- 千代盛清酒特約販賣
- 鹽元賣捌所
- 大山梅乃川一手販賣

岩内港

田原彌三吉商店

電話 六十九番
電器(ハラ)又(タ)
振替貯金 一九八七四番
口座

- 米穀雜貨荒物
- 海陸物産委託販賣
- キリンビール一手販賣
- 有隣生命株式會社岩内代理店

御料理仕出し

壽司御一人前拾五錢御手輕專一二大勉強仕候

岩内見番通

菊水

岩内港(見番通)

高等旅館



梅内本店

電話 百二五番

和洋金物 度量衡販賣



丸山信治

岩内御鉢内町

電話 (五十四番)
電器(ヤマ)又(○)
振替貯金口座六五九一

和洋御料理

梅の家

岩内港(岩内見番通)

内外科
眼科
梅毒科

岩内病院

岩内町

院長 日山 日州

電話 二〇九番

石炭販賣

右近炭礦事務所

岩内港



牛乳採取販賣

山本愛精舎

岩内港 鹿台町

和洋御料理

梅の家

岩内港(岩内見番通)

内外科
眼科
梅毒科

岩内病院

岩内町

院長 日山 日川

電話 〇九番

石炭販賣

右近炭礦事務所

岩内港



牛乳採取販賣

山本愛精舎

岩内港(岩内見番通)

藥種賣藥 卸小賣
書藉筆墨

新聞雜誌(時中、朝日、國民、毎電、西朝、やまこ)
(商業の日本、引博文館、金港堂)

北海タイムス、小樽新聞
函館毎日新聞 大取次所

岩内港

池田大盛堂

電話 百五十九番
振替貯金口座第一四八八〇番

陶器商

岩内港 鷹巣町

大嶋權平

電話 百六十二番

文明的搾取牛乳

岩内港 宇老古美

八重橙牛舎

岩内港

質商 全佐和屋支店

並に三府注文品引受

萬はきもの
並 雨傘商



岩内橋町

てりぬりや

煙火製造 販賣



岩内橋町

疋田伊三郎

質商

木印 木部 ハル

登 鳩 錦 (清酒)

越後國北蒲原郡荒井濱

醸造元

阿部 與惣吉

錄 嘉 印 (醬油)

越後國北蒲原郡荒井濱

醸造元

阿部 嘉平

標 阿 印 (醬油)

越後國荒井濱

醸造元

細野 龜多六

特約代理店

米穀荒物
海陸物産商

北海道岩内港



小林代太郎商店

電話 (一百五十五番)
電器 (コクイノ又(三))

米穀荒物海産委託販賣業
 日本生命保險株式會社代理店
 共同火災保險株式會社代理店
 神戸海上運送火災保險株式會社代理店



岩内港

澤口良藏商店

電話(サツ)又ハ(ツ)
 電話(二二)番

海陸物産荒物

肥料委託販賣



武林貞助

電話(百)九番
 電話(ハツ)又ハ(二)

岩内町御鉢内町

海陸物産商
 木材賣買商
 下駄製造販賣

北海道岩内港
 林太一

電話(百)九番
 電話(ハツ)又ハ(二)

質商古物賣買商

北海道岩内港
 吉岡義純

生そば並に御料理

岩内港
 一 たらはらや
 電話(百)二二番

白米荒物雜貨

岩内港橋町 (電話七十四番)
 木 一支店
 尾崎久五郎

商標



卸 小 賣
手 正 用 具 運 動 具
小 橋 藉 雜 誌 和 洋 紙 文 房 具
寶 藥 化 粧 品

和 洋 酒 鐘 詰 類 食 料 品 雜 貨

和 洋 酒 鐘 詰 類 食 料 品 雜 貨

最 新 洗 粉 サ ツ ポ ン 一 手 販 賣

理 科 器 械 標 本 樂 器

岩 内 町 金 精 樓 向

小 林 九 阜 堂

電 話 零 九 三

岩 内 港 鷹 台 町

眼 科 專 門 松 村 眼 科 院

林 木 商



厚 谷 外 喜 男

岩 内 港 鷹 台 町

電 話 二 百 十 七 番

並 味 噌 製 造 卸 小 賣

北 海 道 岩 内 港 八 幡 大 池
清 涼 飲 料 水 製 造 元

滋 養 海 鼠 あ め 全 高 井 作 治

○ 滋 養 の 効 力 は 牛 乳 錫 卵 に 勝 る 數 倍



卸賣 小書 雜貨 和洋紙 文具 和洋藥 化粧品

和洋酒 罐詰類 食料品 雜貨

最新洗粉 サツポ 一手販賣

理科器械 標本樂器

手工用具 運動具

岩内町金精樓向

小林九阜堂

電話 九三〇

岩内港鷹台町

眼科專門 松村眼科院

林木商 泉 厚谷外喜男

岩内港鷹台町

電話 二百十七番

並味噌製造卸小賣

北海道岩内港八幡大通
清涼飲料水製造元

滋養海鼠あり 高井作治

○滋養の効力は牛乳鶏卵に勝る數倍

客室清潔岩内唯一の好地位

岩内港波止場前

高等旅館



南河

旅館

電話(七番)

小澤停車場前

支

店

海運業



岩内港

澤口汽船合資會社

電話(四十五番)

和洋御料理

岩内町

三喜

樂亭

並天ふら

電話(十七番)

和洋御料理

岩内町鉢内町

福

の家

電話二百八番

土地海面測量並に設計

岩内警察署前

宮崎測量所